

白石清春氏・橋本広芳氏 還暦祝い記念誌

八



白石清春氏・橋本広芳氏還暦祝い記念誌

飛



## 還暦のお祝会によせて

白石清春氏・橋本広芳氏還暦祝い実行委員会

実行委員長 角田 ミキ子

### もくじ

還暦のお祝会によせて	角田ミキ子	3
還暦のお祝い	長位 鈴子	4
白石様、橋本様、		
還暦おめでとうございます	三澤 了	5
橋本さんと白石さんの		
60才によせて	安積 遊歩	6
38年間にわたる		
障がい者関連運動の思い出	白石 清春	15
今までのあった事	橋本 広芳	98
白石清春・橋本広芳プロフィール		106

白石さん、橋本さん、還暦おめでとうございます。

二人を囲んで、昔話をしている～という想いが、還暦のお祝い会という運びになりました。二人の共通の知り合い、同志でもあるということで、この度、実行委員長の役に就かせていただきました。

今回、この様な形でお祝い会が実現出来、苦楽を共にした仲間が一同に会して親交を深めることができることは大変意義ある事だと思っております。

お二人の今までの活動に関しては、私が、今更述べる事がない程、この記念誌に記されております。どうぞ、目を通してください。30余年の障がい者運動の中で、お二人が周囲に与えた影響は、障がいをお持ちの方々にとりまして、生きる大きな支えになったことは勿論ですが、私自身にとりましても、生き方についての指針を教えられました。

「彼等がこんなに真摯に歩んでいるのに、私達がここで諦めてはいけない。」という想いが、私が行政で福祉という仕事をする中で、真の福祉のあり方を教えてくれました。

今だからお話出来ますけど、自立生活センターオフィスILが活動を開始し、少ない補助金で運営を余儀なくされていた時、白石さんはさりげなく「じゃ～出稼ぎに行って来るか～。」と言って、暮れの寒い中、神奈川方面に街頭カンパに出かけて行ったのです。その募金が百万円を越していく、私は、声も出ませんでした。ただただ頭の下がる思いで一杯でした。あれから20年近くになります。

あの時の彼等の行動が、私自身現在もこうして熱い想いで仕事が出来ていると思っております。

お二人の今までのご苦労と活動に対しまして、心から敬意を表しますと共に、今回のこのお祝い会でお二人から元気と勇気をもらい、明日への活力になればと願っております。

## 還暦のお祝い

全国自立生活センター協議会  
代表 長位 鈴子

理事長の白石清春氏、理事の橋本広芳氏の還暦を迎えたこと、誠におめでとうございます。

重度障害者が地域の中で生きていける環境が何もなかった時代に、体をはって「地域社会で生きること」にこだわり、障害者運動を展開してこられた白石清春氏、橋本広芳氏のお二方様に感謝します。また、青い芝の会の活動を福島県及び全国に広げ、そのアクセス運動を基にバリアフリー法やハートビル法ができるといつても過言ではないと思います。

私がお二方を知ったのは「バリアブレイク」のビデオでした。白石さんは笑って話しており、橋本さんは施設から出た理由を「彼女をつくることが目的」と言われている姿が何度見ても面白く、職員研修の教材には最高だと大絶賛です。しかし、ビデオの内容は単純ではなく、これまで多くの障害者が体を張ってきた障害者運動の取り組みに、運動を知らない人からは「こんなことさせられたら……どうしよう」といった感想が聞かれました。

そのお二方に直接お会いできたのは厚生労働省前日比谷公園の大集会でした。先輩たちの命をかけて積み上げてきた生活に対して、ヘルパー上限問題などがあった頃で、まじめな顔と怒ったような声にびっくりして聞きいりました。私たち若造には知りつくせない色々な思いから、体に鞭うって声を張り上げに遠い東京まで来たのだろうと思います。その前後に橋本さんの生死をさまよった事を、橋本さんの笑い話で聞いた時には笑っていいのか、どのようなアクションをしたかは覚えていません。

去年、あいえるの会主催の職員研修で「全国自立生活運動や加盟団体がめざす方向」をテーマにお話しするためにお邪魔した時感じた事は、お二方の他、障害者スタッフと健常者スタッフ同士の仲が良いということです。また、障害者運動への理解と情報が共有された活動ができるからこそ、私たちのような障害者運動を知らない世代も、遠く離れた地方の障害者が頑張れると思いました。

最後になりますが、これまで第一線を引っ張ってこられたからこそ何もなかった障害者在宅生活支援サービスが、徐々に整い、多くの障害者が施設や親元から自立する事ができるようになりました事、全国自立生活センター協議会加盟団体一同、感謝申し上げます。これからは、後輩の私たちを障害者運動の後継者として見守り、時には叱咤激励をしていただければと思います。

どうか、これからはお体を気遣い、長生きして長寿社会への貢献も宜しくお願いし、あいえるの会の益々のご清祥をお祈りし、あいさつの言葉とします。

## 白石様、橋本様、還暦おめでとうございます

DPI 日本会議議長 三澤 一了

日米障害者セミナーや障害者の所得保障、障害者施設の費用徴収問題への取り組み等、日本における障害者運動の歴史に残る活動で、お二人とご一緒したことを懐かしく思い出します。

特に、障害基礎年金設立のための様々なロビー活動や「障害者を大きな赤ん坊にするな！」と声を上げた施設費用徴収問題での座り込み行動は小さくない成果をもたらしました。「障害者自身の声・行動が社会を変える」ということの原点とも言える活動でした。

その後、お二人は地元の福島県に戻られてからも、オフィス IL（あいえるの会）を設立され全国でも珍しい自立生活センターへの助成制度を実現される等、地域に密着した活動を進めてこられたことと思います。

21世紀に入ってから10年、この国の障害者政策は混迷が続きました。そのために、全国的な集会や行動がありました。そうした場面でもお二人の姿を拝見することができました。また、福島県での障害者総合福祉サービス法のタウンミーティングの開催の際には、あいえるの会の皆様のご協力を頂き感謝しております。

今、国では障がい者制度改革推進本部・推進会議が立ち上がり、私どもの仲間も関わって改革を進めてきています。日本で障害者の自立生活運動が始まって40年余り。いよいよ、障害者の地域での自立生活を正面に据えた制度ができるかどうかの山場に差しかかっています。

推進会議の提言（第一次意見書）を実現していくためには、私たち障害者の声と行動が不可欠です。また、次の世代に私たちが進めてきた活動を伝えいかなければなりません。ともに、もう一頑張りしていきましょう！

## 橋本さんと白石さんの60才によせて

—60才、おめでとうございます—

安積 遊歩

すさまじい早さで、時がたつので日本の社会が確実に変わっていくのをしみじみ、実感するには、時々のニュースが必要です。

今回は橋本さんと白石さんの60才のニュースが、私にとっても、うれしいグッド・ニュースです。

私の人生は、橋本さんと白石さんの地域に生きようという決断と行動なしには、始まりませんでした。2人が『全国青い芝の会』の中に、福島県の会を発足するよう、行動してくれたことで、在宅障害者であった私にも、「自分自身のこの体で、人生を始めてよいのだ、いや始めるのだ。」という決意が生まれたのです。それまでの心痛くなるほどの、自己否定の歴史は、彼らとの出会いによって、実践的な活動の力の源となり、内なる差別感の克服と、社会の問題提起を今日まで努めることになったのでした。

このたび、白石さん、橋本さんが、障害を持つ人にとっては、長寿である60才を無事迎えられたことは、私達の運動の誇るべき成果であり、輝かしい勝利であると思います。

34年前、福島駅を3人で使った時、「荷物用のエレベーターに乗りたいのであれば、自分は社会のお荷物です、と言ってみろ。」との、駅員のとんでもない差別発言に怒り狂った日——養護学校義務化阻止のための文部省前の座り込みの日とその前夜の絶望感でいっぱいの打ち合わせの時間——。

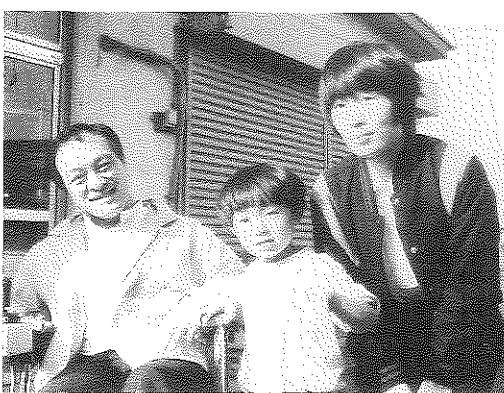
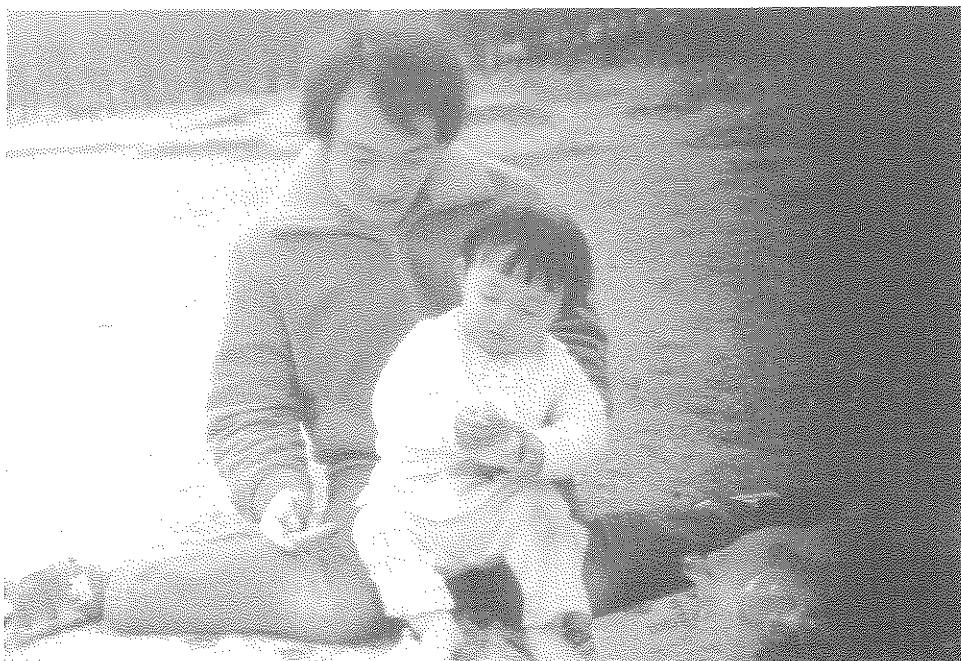
3人でいた時を思い出すと、どの時もどの時も怒り、怒り、怒りで、その中で闘い、生き延びてきたのだと、お互への切なさと愛しさがないまぜになります。

これからも、この優生思想社会で、決して終わることのない、ぎりぎりの生命を生きる闘いをゆっくり続けていきましょう。

白  
石  
清  
春



## 相模原、そして「くえびこ」

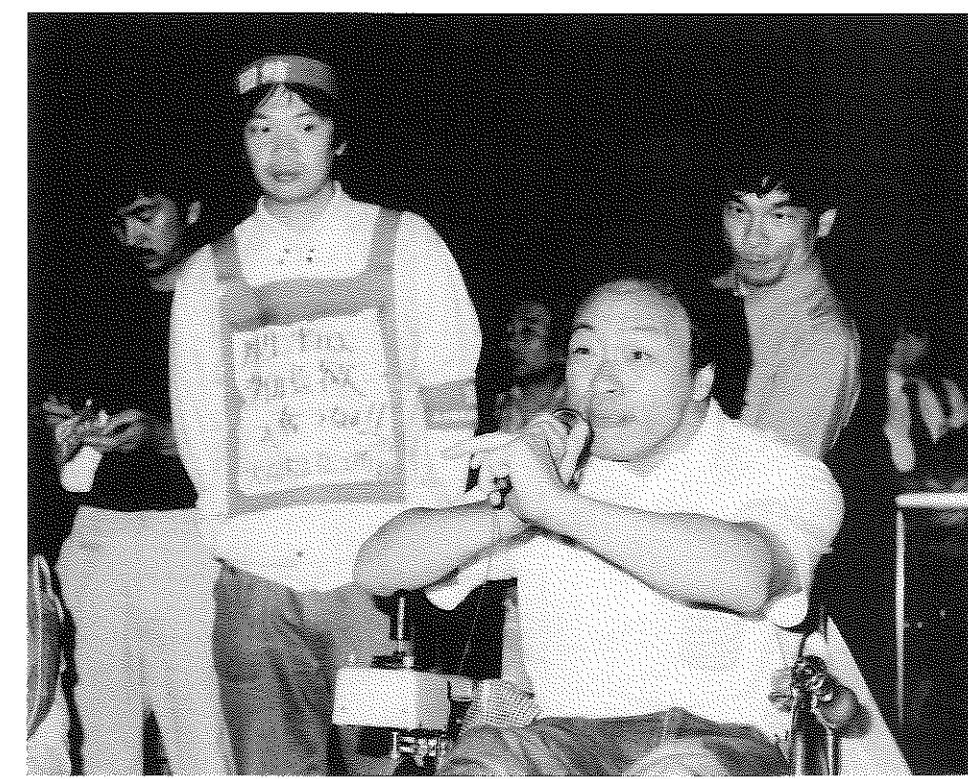
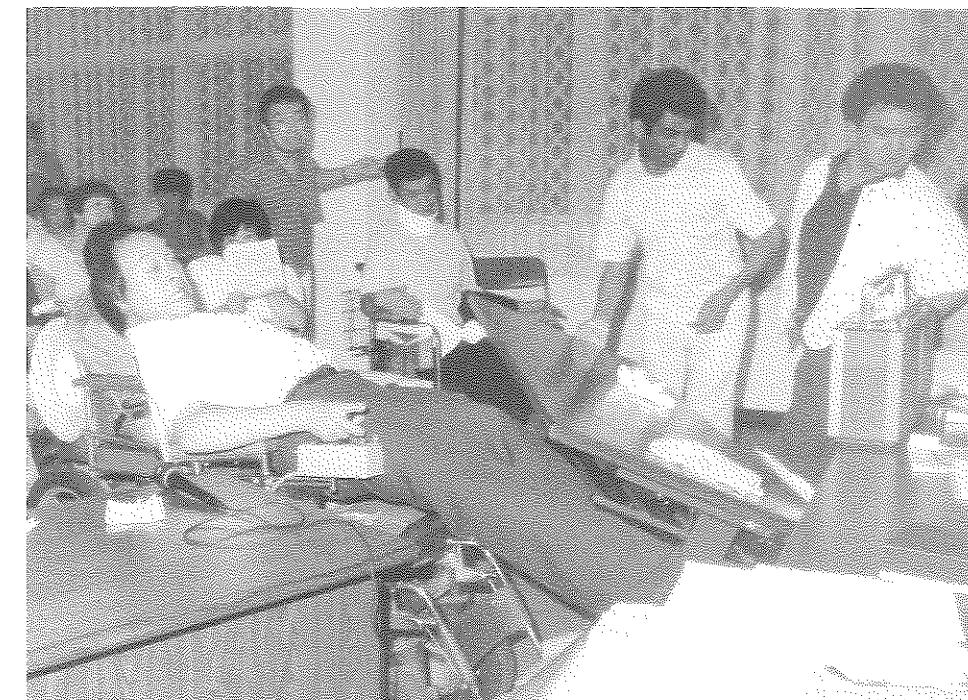
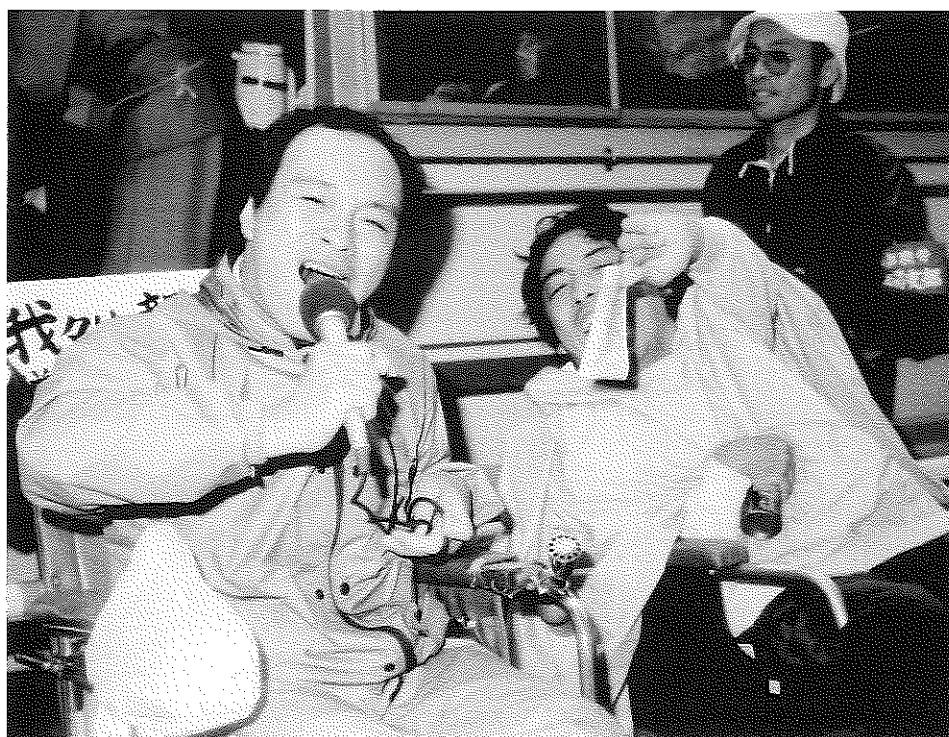
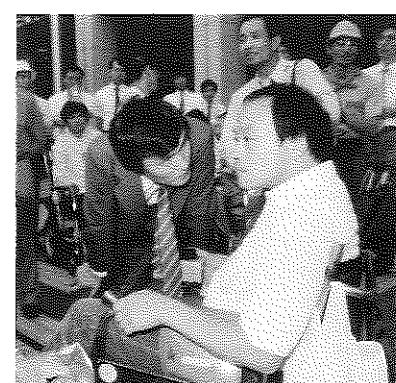


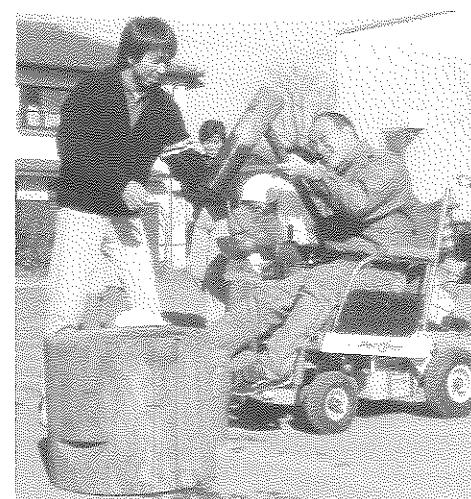
若かったあの頃、何も恐くなかったと言う歌のセリフがあるが、恐いこともたくさんあったなあ…。しかし、それ以上に同志としての仲間との付き合いが楽しかった。太い絆も作っていく事が出来た。



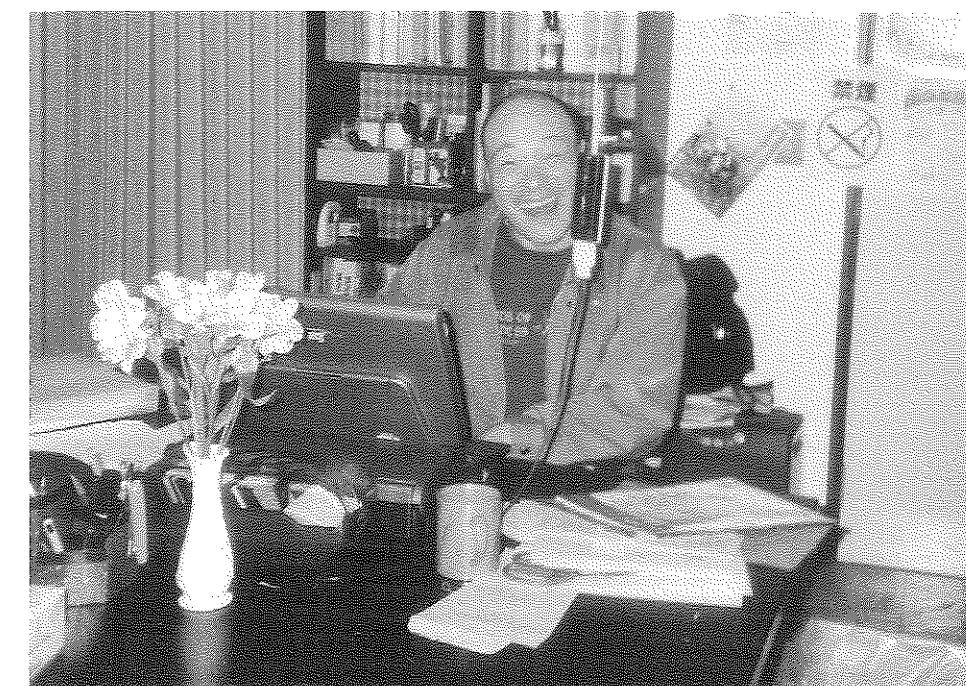
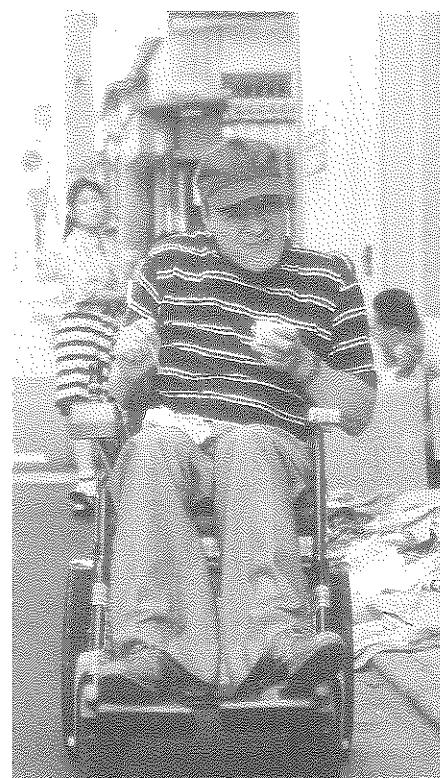


障がいを全面にだして





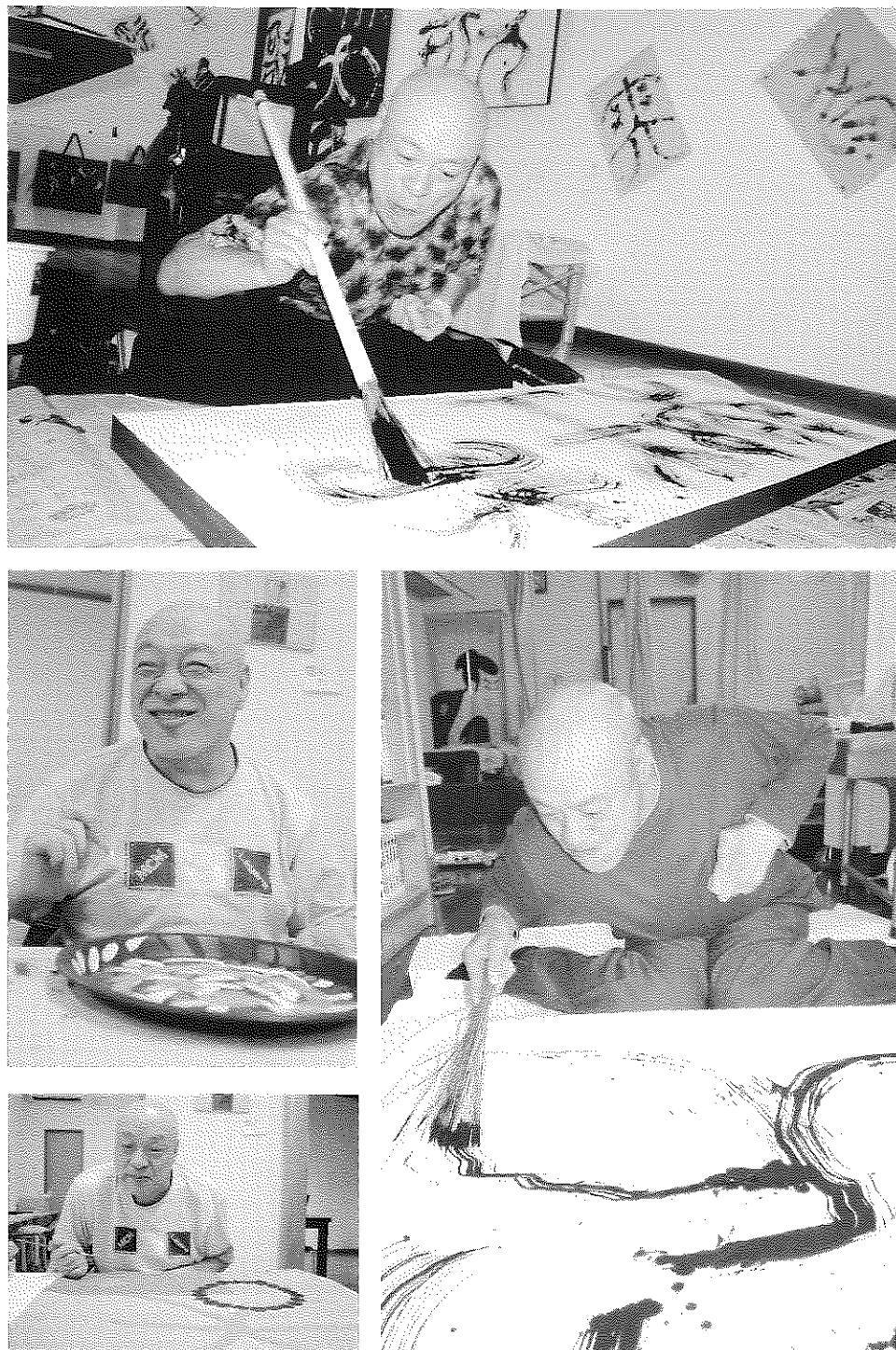
郡山へUターン  
自立生活センターを  
立ち上げる



郡山でも様々な人達と出逢い、  
みんなの協力によりここまで  
生きてきたのだ。



## アーティストとしての白石清春



14

## 38年間にわたる障がい者関連運動の思い出

=私たちの還暦祝いに寄せて=

白石 清春

### はじめに

私が郡山の地で活動し始めたのは22歳の頃からだから、もうかれこれ38年前のことになる。懐かしい思い出は私の頭に詰まり過ぎてこぼれそなほどある。

私は初めから障がい者運動に染まってきたわけではない。ボランティア活動ともいるべき福祉サークルを経由して、障がい者運動にのめり込んでいったのである。障がい者運動の原点である青い芝の会との出会いから私の青春は弾けたのであった。

現在私たちと関わりのある若い障がい者の大半は青い芝の会の『あ』の字も知らないのではないだろうか。若い頃の私たちが培ってきた障がい者運動の記録を残し、若い障がい者の世代に『苛烈なまでの情熱と闘いの歴史』を知らしめていくことも大切な活動なのではないかと思うので、ここに私の38年にわたる生き様を記す。

### 青い芝の会との出会い

養護学校卒業後、福祉サークルへ

養護学校の同級生であった今野君が菊地義昭さんという日大の大学院生の方と私の家を訪ねてくる。そして福祉サークルに入会しないかという。福祉サークルの名称は『サークル・なかま』と言った。『サークル・なかま』の活動内容を聞いてもそんなに魅力は感じなかったが、今野君や菊地さんの熱心な勧誘に乗せられて、サークルに行ってみようという気になる。『サークル・なかま』のメンバーには女子高校生や女子大生がたくさんいるということを聞いたので、それもサークルに行く大きな理由であったのだろう。『サークル・なかま』の活動が活発になってくるにつれて、周囲の団体との関わりも多くなっていった。今野君の所属する福祉関係のサークルとの交流会（合宿形式の）は無論のこと、ボランティア等福祉関係の様々な団体との関わりを

15

つくっていくことになる。

私がサークルに入会した頃は、仙台の西多賀のワークキャンパスで筋ジストロフィー障がい者を中心とした活動が盛り上がっていった時期でもあり、山田富也さんが『車いすの青春』という映画の上映会や同題の詩集を発行して、東北地方の各地で活発に活動を展開していた。それが地福研（地域福祉研究会）という団体の大元であったのだろう。現在、岡山県で老人保健施設の副施設長をしている武田和典さんが当時高校生で、地福研で『車いすの青春』の上映会などを開催していた。武田さんの勧めもあって、『サークル・なかま』も地福研の加盟サークルとなっていく。

#### 『さようならCP』映画上映会

郡山の『サークル・なかま』と福島のサークルとが合同で映画上映会を開催していくという話になる。そのときに上映する映画が『さようならCP』という『疾走プロダクション』という会社で作った、脳性まひ者が生出演する迫力ものとの情報が入る。

#### これは何だ！という衝撃

いよいよ上映会の当日。宣伝効果もあってまあまあの参加人数だったのではなかったか。さすが、前評判だけあって『さようならCP』はすごかった。ド迫力で私に迫ってきた。横塚さん、横田さん、矢田さん、小山さんらCPの先輩たち（当時は名前すら知らなかった）が続々と画面に登場して、CP特有のおぞましい姿を「これでもか、これでもか」と、さらけ出していく。CPから見た社会と、社会から見たCPの姿、そこに横たわる『断絶』をものの見事に映し出していく『さようならCP』。私の社会観、社会の側から見ていた私の価値観が音を立てて崩れていくようで、恐い思いをして映画を見ていたというのが真実である。

『さようならCP』を見終わって、へとへとに疲れる。私たちCP（脳性まひ者）が日常とっている姿は自分には見えないが、その姿が平然と画面に映し出されるものだから、自分の姿が映し出されて（さらけ出して）いるようでなんとなく恥ずかしい思いもあった。そして、この映画は字幕スーパーが入っていない。生の脳性まひ者の言葉がそのまま脳裏に突き刺さってくる。こんなに脳性まひ者の言葉が聞き取りにくいものとは思わなかった。映画の音響効果も手伝って、よけいに聞きづらくなっているのかもしれないが、

初めての『さようならCP』は内容がさっぱりわからなかった。が、映画で訴えたいことは十分に捉えることができた。

#### 東京青い芝の会の若林さんがみえる

『さようならCP』上映会の際に東京から、東京青い芝の会の若林さんが見える。この若林さんがまた豪放？な脳性まひ者で、酒が好きで、はたまた女性には目がないという、はたから見るとめちゃくちゃな方であったが、人間味のある憎めない性格を持っている不思議な人であった。若林さんは上映会終了後の座談会の折に「福島県にも青い芝の会をぜひともつくってほしい」というメッセージを残していく。

#### 関西からオルグに来る

大阪青い芝の会を中心とした関西青い芝の会のメンバーは比較的若い脳性まひ者らが多く、私と同年代の養護学校出の脳性まひ者らが中心に運動を進めていた。福島県には有望な（？）若い脳性まひ者たちがいることを若林さんから聞いたのだろう、『さようならCP』上映後、関西青い芝の会のメンバーが福島県に来て、オルグ活動を展開していく。メンバーの中でも特に凄みがあったのは古井（旧姓鎌谷）正代さんと松本君であった。あの関西弁でまくし立てられると圧倒されてしまって、こちらからは何も言えなくなってしまう。二十数年経った今でも関西弁には抵抗を感じる。

#### 20名の脳性まひ者によって「福島県青い芝の会」を結成

本格的に青い芝の会をつくろうということになって、福祉サークルや一房（ひとふさ）の会（養護学校の同窓生の集まり）、または養護学校同窓生の脳性まひ者に呼びかけていった。郡山市内やその周辺に住む脳性まひ者の家を回って「青い芝の会の会員になってください」と勧誘活動を行った甲斐があって、20名にのぼる脳性まひ者を集めて、1973年に『福島県青い芝の会』を結成する。

#### 両親との喧嘩の果て

福島県に青い芝の会を結成して、外に出ての活動の時間がさらに多くなっていった。福祉サークルの活動も平行して行っていたので、外出、外泊が日を追って多くなっていく。そのような私の日常行動を両親は好ましく思わなかつたのである。

「今日はサークルの用事で福島に行く」「あさっては青い芝の会の用

事で東京に出かけてくる」などと私は両親に伝えていたが、それに対して両親はいつも「おまえがそんなに頑張らなくても良いのではないか」「家の中で自分の好きなことをやっていれば良いのではないか」と、私を説得するのであった。障がい者運動に私が巻き込まれないように。

#### 年間の親子喧嘩の果てに、両親はあきらめる

私は青い芝の会の存在を知って、障がい者が差別されることのない社会をつくっていこうという使命感に燃えていた。両親との心の軋轢は一段と激しさを増していく。そして、とうとう親子喧嘩に発展していった。母につかみかかり、父には殴られ、八つ当たりに障子のさんを折ったり、部屋の中で暴れまくっていた。父がいくら暴力に訴えようと私の意志は変わらなかった。親子喧嘩は一年間ぐらい続いたであろうか、私の行動に対して両親は何も言わなくなっていく。

#### 福島市に橋本君と共同生活

壮絶な親子喧嘩を経て、私は親離れを果たした。しかし、両親は私の歩む道を理解したわけではなかった。私の意志があまりにも強固だったために『あきらめた』のである。したがって、両親のふところをあてにするわけにはいかなくなってしまった。その覚悟で家を出たのである。1974年のことであった。

両親との喧嘩と平行して、橋本広芳君を施設から連れ出す説得も行っている。当時、橋本君は千葉県の『ベテスダホーム』から福島市の『けやきの村』という重度授産施設に移っていた。橋本君は母親をガンで、父親を交通事故で亡くしていた。私は何回も『けやきの村』に足を運んで、「福島市でアパートを借りて一緒に住んでいこう」と説得するが、橋本君はなかなか重い腰を上げなかつた。橋本君には「施設を内部から変えていきたい」という気持ちと、「施設を出たらもう後がない」という気持ちがあつて、いさぎよく施設を出る決心がなかなかつかなかつたのだろう。しかし、橋本君も私と一緒に外出する機会（青い芝の会の活動等）が多くなってきて、園長や職員との摩擦が大きくなっていく。そのような状況の中で、やっと橋本君も施設を出る気になって痔持ち（当時からかは知らないが）の重いお尻を上げたのであった。

#### 最初、今野君のアパートに転がり込む

私と橋本君はそれぞれ在宅と入所施設を出るには出たが、まだ住む場所は見つかっていないかった。同級生の今野君のアパートにしばらく同居すること

になる。私は郡山から手動式三輪車を持っていったのでそれに乗って、橋本君は前の車輪の大きな車いすに乗って、毎日のようにアパートを探しに走り回る。福島市の福祉サークルのメンバーがついてきて不動産屋との交渉をするが、なかなか首を縊に振ってくれる不動産屋は見つからなかつた。

#### ボロ長屋の一室を借りる

不動産屋は私たちには家を貸したがらないのは顔つきで分かつた。不動産屋は露骨には「貸さない」とは言えないで、「あんたたち2人でどうやって生活していくのか」「火の始末は出来るのか。火事になつたら逃げられないだろう」「ちゃんと保証人はいるのか」と、私たちに質問を浴びせる。それに対して、「私たちを支援していくグループがあつて、その人たちが毎日交代で介助をしてくれるので生活は安心してできる。グループのメンバーの中には年配の方もいるので保証人の問題も大丈夫だ」と答えた。一緒に付いてきた福祉サークルのメンバーも口添えしてくれるが、アパートを貸してくれる不動産屋はなかなかなかつた。十何件かの不動産屋をあたってようやくアパートを借りることができた。そこは長屋形式のボロアパートであった。私たちにはお金がなかつたので、家賃の安い物件しか借りられない。アパートは四畳半と六畳の部屋に小さな台所がついているごく狭いものであったと記憶している。トイレは共同使用のもので、アパートの玄関前についていた。私と橋本君は共同のトイレは使えないで、狭い玄関の隅にポータブルトイレを取りつける。ボロのアパートでも2人が寝起きできる場所が見つかったことは本当に嬉しい思いであった。

#### 助っ人集めで大学などでビラ撒き

福島市での橋本君と私の二人暮らしが始まつたが、すべての日常生活を二人で行なうことは困難なので、生活をサポートしてもらう介助者を探すことが当面の目標となつた。福祉サークルのメンバーが頑張っていたが、それだけでは介助者が少ない。福島大学を中心に『介助者を求む』のチラシを作つて、毎日のようにビラ撒きを行つてはいた。脳性まひ者が、それも二人で共同生活しているという状況は当時としては珍しいケースだったので、チラシを見て私たちを訪ねてくる学生や勤め人の数が多くなっていく。私たちにとって大変嬉しいことで、その人たちに早速食事作りや掃除、洗濯、活動の付き添い等を頼んではいた。

### 1ヶ月あまりかかって生活保護を取得

私と橋本君の自立生活において、住む場所の確保という第1段階はなんとかクリアーしたが、第2段階の『生活費の確保』をなんとかしなくてはならなかった。当時、月に3千円程度の障害福祉年金ではどうしようないので、青い芝の会の先輩たちの知恵を借りて、生活保護を受給していくことにする。

なにはともあれ、予備知識もなく私と橋本君は福島市の福祉事務所に行って生活保護の申請をしようとしたが、保護課の職員が「生活保護の申請は調査してからでないとできないのでちょっと待ってくれ」という。当時、脳性まひ者二人で生活するのは東北地方では珍しいことで、福島市の職員も驚いてしまって、私たちの対応に苦慮したのではないかと思う。

### 福祉事務所の職員らが断り続ける

福島市役所に行ってから数日が過ぎても市役所の職員が調査に来ないので、済れを切らした私たちは再度市役所に出向いて、早く調査に来てほしいと訴える。私たちの訴えが効いたのか、福祉事務所の職員が私たちのアパートを訪ねて調査をしていく。今度は大丈夫だろうと思って、調査から何日か過ぎた頃に福祉事務所に行くが、職員の対応は「生活保護の申請はできない！」との一点張り。

福島市の保護課職員の対応は強硬そのものだったので、こちらも負けてはならないという気持ちになり、昼飯の弁当持参で市役所の福祉事務所の前で毎日座りこむことにする。午前10時ごろから夕方まで「生活保護はまだか！」と、橋本君と二人で座りこんでいた。

### 職員が親を呼び付ける

そのような私たちの行動に保護課の職員らが慌てふためいて、私たちの実家に電話を入れて、私たちの両親を福祉事務所に呼び出した。無論、私たちのいる前に。親が来ようとだれが来ようと私たちの意志は変わらない。両親を呼んで私たちを説得してもらおうとした福島市の保護課のもくろみは失敗に終わったのであった。私たちの文字通り身体を張った行動に、保護課の職員らがとうとう根負けをして、保護の申請に応じることになった。私たちの信念が福島市の行政の厚い壁を破ったのであった。

保護が支給されてからも私たちと保護課の間では様々なことがあった。当時から生活保護では障害者加算の中に他人に介助を受ける際に介助料（他人

介助料）が支給されることになっていたが、福島市の保護課では「生活保護の中にはそのような規定はないので介助料は出せない」と、私たちの要求を突っぱねたのである。当時私たちも勉強不足であったので、保護課の職員にごまかされたのであった。私たちに他人介助料が支給されるまで2年あまりを要した。さらに、私たちが電話を取り付けようすると、保護課からストップがかかった。「生活保護者には電話は贅沢品だ」という。「一般世帯に70%以上普及していない品物を生活保護者は持つてはならない」というのが保護課の主張であった。その保護課の理屈に対して、私たちは「日常生活で介助者を探すときに電話がなくては大変だ。いちいち介助者の家に電報を打てというのか。または介助者の家まで行けというのか」と応戦して、結局、電話設置はOKということになったが。

このように福島市で障がい者が生活保護を取り始めた頃は保護課の間で丁々発止のやり取りがあって、大変でも有意義な経験をさせてもらうことができた。

### 仲間が集まり住んで、恐ろしくも楽しい集団生活

アパートを借りてしばらくすると介助者の数も多くなつていって、私たちの生活は安定してきた。地域での青い芝の活動も活発になってきて、施設訪問や在宅障がい者訪問などを積極的に行っていった。その甲斐があったのか、私たちの生活の実態を見にくる障がい者が日増しに多くなっていく。アパートに泊まっていて、青い芝の活動を私たちと一緒に行うものも現れる。

### 安斎晃君、吉田強君、佐藤泰樹君、佐藤清一君らが長期間泊まりにくる

安斎晃君は橋本君と一緒に『けやきの村』に入所していた。職業経験・社会経験が豊富で、安斎君からはいろいろ学ぶものが多かった。安斎君とは夕方、食事前にプロレスごっこを良くやつたものだ。安斎君が一番初めにアパートを借りて独り立ちする。安斎君は2年前に連れ合いと温泉に行って、酒を飲んで溺れたのか、亡くなってしまった。

吉田強君は当時、ずいぶんと歩けていたもので「働く」ことに意欲を示していてクリーニング屋さんなどを転々としていたが、働くことに疲れてきたのか、私たちのアパートに転がりこんでくる。吉田君は生活がまめで、蒲団をたたんだり、掃除をしたり、うんこの始末などを苦にせずにやっていた。外にあるトイレがよくつまるのだが、吉田君はいそいそとキンカクシに手を

突っ込んでトイレのつまりを直していた。

現在、吉田君は私の家の近くのアパートに住んでいて、現在はフリーの身（どの団体にも所属していない）で障がい者の仲間たちと関わっている。

佐藤泰樹君は橋本君と同じ『けやきの村』に入所していた。泰樹君とはいわきの障害児施設『平整肢療護園』、『郡山養護学校』からの付き合いになる。泰樹君は思い切りがつかず自立するのは難しかったものだから、時々『けやきの村』を抜け出してきて私たちと付き合っていた。青い芝の会の全国行動の折にはよく行動を共にしていた。泰樹君ともよくプロレスごっこをしていた。泰樹君は身体が大きかったもので、手ごわい相手であった。泰樹君は今も『けやきの村』に入所している。

佐藤清一君は『オオカミ』というニックネームを持つ、郡山の農家の出身者であった。なぜニックネームがオオカミなのかというと、脳性まひ者特有の症状もあって顔がオオカミそっくりなのである。清一君は農業の手伝いをやっていただけあって、物凄くエネルギーで、落ち着きがなく行動していた。また、清一君は運転免許を取っていて車の運転ができた。一度軽トラックの助手席に乗せてもらったが、緊張して顔を横に向けて運転しているのである。脳性まひ者の運転する車には正直言って乗りたくない。清一君は何ヶ月間かアパートで一緒に生活していたが、父親が業を煮やしてアパートに怒鳴り込んでくることによって清一君を連れていってしまった。父親の顔を見たら、なんと！清一君とそっくりのオオカミ顔であった。

現在、清一君はたいむⅠに顔を出しては、橋本君と将棋を指している。

#### 助つ人らも大勢、いつも満杯状態のアパート

安斎晃君、吉田強君、佐藤泰樹君、佐藤清一君らが我らの家に泊まりこんで「これが人間の生活か？」と疑いたくなる生活をしていた。脳性まひ者の声は普段でも騒がしいのに、酒を飲んで騒ぐは、介助にきた学生と「学生運動と障がい者運動との違い」などと議論を闘わせるので、隣の住人が「うるさい、騒ぐな！」と怒鳴り込んでくることもしばしばであった。また毎タブロレスごっこをしているので男の汗の臭いがたちこめ、部屋の仕切りの障子戸はぼろぼろに破れ、なんとも形容しがたい妖怪長屋であった。

#### うんことご飯が一緒の生活

みんなで朝食を取ろうという時にかぎって、橋本君はうんこをする。玄関

にポータブルトイレが置いてあって、そこでうんこをするのだ。奥の部屋でみんなは食事を見るのだが、部屋を仕切る障子戸を閉めてもぼろぼろ穴だらけで、うんこをしている橋本君の顔が丸見えの状態。それに、昔のポータブルトイレの消臭剤は臭いがきつくて、うんこの臭いと混ざり合って、それはすごい臭いであった。そんな部屋の中で平然と朝食を取っているわれらも正常じゃないな。

#### 詩集の売上がすべてアルコールに変わる

私は自立する前から作っていた下手な詩集を、福島の駅前の郵便局前で週に2～3回街頭販売を行っていた。1日の売上が3～4千円あつただろうか。街頭販売から戻ってくると夕方になっていて、お腹がすいてアルコール類を飲みたくなってくるのであった。途中で酒屋とスーパーに寄って酒類とつまりを買って、アパートに戻ってみんなで宴会のはじまりというお決まりのコースになってしまふ。みんなも生活保護を受けていたが、毎日酒が飲めるほどの贅沢はできなかった。だから、私の詩集の売上がすべてアルコールに化けて、みんなの明日の活力源となったのである。

#### 地下歩道建設阻止闘争

私たちは、なにはともあれ「福島県青い芝の会」を立ち上げて、一応形だけは作ったのであるが、地方でのメインの活動は少なかった。それで、目をつけたのが『地下歩道建設阻止闘争』であった。福島駅前に地下歩道を建設するという情報が私たちの耳に届いたのである。

#### 「私たちが渡れない地下歩道をつくるのか！」

早速私たちは福島市役所に出向いて、地下歩道建設の計画を聞く。1976年の春頃に建設着工するという。「障がい者の存在を考慮した地下歩道を建設するのか」という私たちの質問に対して、市の職員は「そのようなことは考えていない」という。私たちは福島市と度重なる交渉を続けていった。その結果、福島市では「地下歩道は予定通り建設するが、地下歩道の上にはグリーンベルト（横断歩道をグリーンに塗って、手押し式信号機をつけたもの）を設置しておいて、障がい者や高齢者が自由に渡れるように考慮する」という見解を示す。この答えに対して私たちは、「グリーンベルトを渡るのは私たち

と高齢者であって、その者は交通事故にあってもよいというのか」と主張していった。結局物別れとなって、建設工事着工の日を迎える。

#### 工事を一日遅らせる

私たちは青い芝の会員10名ぐらいで工事現場に集結した。助っ人の健常者たちは遠くで野次馬にふんしてみていることにする。健常者が一緒にいればほぼ確実に警察につかまってしまうので。いよいよ工事関係者らが来て、現場の機械類を動かし始める。私たちは身体を張って機械類にしがみついた。工事関係者が私たちを機械から離そうとしたが、私たちは執拗に、強情に離れなかつた。工事関係者らは私たちの行動にあきれ返って、「きょうは工事を中止しよう」と、引き上げていく。

私たちは工事現場を離れなかつた。夕方、助っ人に頼んで青い芝の会の車（中古のワゴン車）に毛布類を積んで持ってきてもらう。仲間たち六人で車の中に泊まりこんでいく構えを見せる。私たちはこれからどうしていくかを話し合つた。「これだけやつたのだから、明日の朝工事前には帰ろう」という者と「いや、絶対阻止の構えで明日も工事を中止させよう」という意見が対立したが、『絶対阻止』という方向に傾いていく。

2日目の朝がくる。工事関係者の数が昨日よりも増えている。きょうは是非でも工事を始める気だなと直感的に分かつた。それでも私たちは機械類に全力でしがみついたが、多勢に無勢、脳性まひ者1人に工事関係者が3～4人で攻めてくるのでどうしようもない。あつという間に工事現場から排除されてしまう。この、工事関係者の行動に私たちは怒り狂つた。みんなで車に乗りこんで、故安斎晃君が無免許（原付の免許しかなかった）で車を運転して工事現場を走り回つた。これには工事関係者も驚き慌てて逃げ惑う。私たちは工事現場を離れて市役所に抗議にいく。市役所に到着して、玄関に突っ込もうということになり、玄関のガラスドアをぶち割つた。そして、車を少しバックさせて、車のクラクションを思いきり鳴らす。大勢の職員たちは何が起つたのだろうと市役所の上の階から顔を覗かせる。車の中にはハンドマイクがあつたので、私が抗議のアピールを行う。

#### 無免許運転で、パトカーと衝突

市役所から県庁へと私たちを乗せた車は移動していった。県庁でもハンドマイクで抗議のアピールを上げようと思っての行動であった。しかし、私た

ちが抗議行動を行つていることを聞きつけてパトカーが県庁に到着してしまう。パトカーから警官が降りてきて窓を開けろという。安斎君は窓を開けなかつた。警官は警棒を取り出して車の窓ガラスを叩き割ろうとして、ガンガン窓ガラスを叩き始めた。この辺で行動を止めようと思ったが、安斎君は車を発進させてパトカーのわき腹にぶつけた。パトカーのわき腹がグニャリと曲ってしまった。県庁から道路に出て逃げようとしたが、パトカーが先回りをして道路を塞いだ。安斎君も観念して車を止める。警官が安斎君をパトカーに乗せて、我々の車を運転して警察署に向かう。

#### 福祉事務所の職員が飛んできて

安斎君は警察署の中に連行されていく。我々は車の中で待機だ。我々を見張つてゐる警官に「安斎君だけが悪いのではない。私がこの行動を指揮したのだから、私も連行していってくれ」と言ったが、聞き入れてはもらえないかった。

しばらく車の中で成り行きを見守つていると、福祉事務所の職員が何名か慌ただしく警察署の中に入つて行く。警察署で福祉事務所の職員を呼んだのか？やがて安斎君が福祉事務所の職員に見守られながら戻つてくる。安斎君のとがめは何もなかつた。バイクの運転免許も後から戻つてくる。このような事件を健常者が起こせば即逮捕されようが、私たちが事件を起こしても福祉事務所の管轄に移されて罪がさせられないのは何なのだろうか。これもれつきとした障がい者差別であろう。

#### 福島市にスロープの地下歩道が建設される

一応私たちの『地下歩道建設阻止闘争』は幕を閉じることになった。福島駅前には立派な地下歩道が建設された。私たちは駅に向かうときにグリーンベルトを通ることになるが、そこを通るたびに屈辱的な思いに駆られた。現在の福島駅前は人通りが少なく寂びてしまつてゐる。そして、駅前には横断歩道が設けられているではないか！きっと地下歩道を利用する人が少ないのである。

また、最近（といつても十年以上前）、福島市の県庁の近くにスロープの地下歩道が建設された。やればできるのではないか。私たちの言い分を聞いていれば、たくさんのお金を出して地下歩道を作らなくてすんだものを。

## 公営住宅入居要望の闘い

### 私たちが住める公営住宅を

私たちは『地下歩道建設阻止闘争』と合わせて『公営住宅要求闘争』を敢行していった。福島市の市街に県営住宅が建てられるらしいという情報が私たちの耳に入ってきたので、県庁の住宅課に出向いて真相を聞く。間違いない県営住宅が近いうちに建設されるという。私たちは早速「私たちも入居可能な住宅を建設してほしい」という要望書を作成して県の住宅課に提出したが、住宅課からはいつこうに良い答えが返ってこない。

### 6日間にわたる座り込み

私たち青い芝の会のメンバー6人は意を決して県庁の住宅課の前に座りこみを決行していった。助っ人たちに朝、昼、晩と食事を運んできてもらって、夜は廊下に毛布を敷いて、寝袋の中でくるまって寝ていた。なにぶん6人という小人数で、それも県庁の中、住宅課の前での座りこみなので、マスコミにも取り上げられることなく、市民に対してのアピールができなかつたことが悔やまれる。それでも私たちはがんばって座り込みを続けた。

### 県庁管理者と数時間にわたるにらめっこ

6日目の夜に、とうとう県庁の管理者が私たちの前に現れて、私たちを排除しに取りかかった。1人減り、2人減りして、最後に私だけが残る。そして、管理責任者と数時間にわたりにらめっこを続けた。管理責任者から目をそらしたら負けだと思ったので、相手の目を見続ける。この、私の行動に管理責任者も根負けをして「君たちの態度はたいしたものだ。君たちの意向を県当局に誠意を持って伝えよう」という。1人で県庁に座りこんでいても仕方がないと思ったので、県庁を後にする。

その後も県庁には要望していくが、我々の要望がかなったのはずいぶん後のことであった。県庁座りこみの行動を起こしてから十数年が経過して、福島市に市営住宅が建設され、身障者用住宅が作られた。私たちの青い芝当時の仲間である角野正人さんが現在そこに住んでいる。

## 和歌山センター闘争

1976年1月15日、和歌山青い芝の会の会員であった藤田正弘さんが鉄道

自殺をする。藤田さんは和歌山県立身体障害者福祉センターに入所していて、センターの仲間たちを青い芝の会に誘っていたという。そのような彼の行動を見ていて、センターの職員たちが圧力をかけていたらしい。それを苦にしての自殺であったらしい。

青い芝の会の会員たちは自立を阻んでいる入所施設に対して好ましくない感情を持っていた。関西青い芝の会の会員たちは、センターに対する抗議と藤田さんの名誉回復のために「和歌山センター闘争」を敢行していく。

### 右腕の激痛をおして橋本君と

関西青い芝の会から和歌山センター闘争に対する動員の要請が私たちのところにも来たので、橋本君と共にいくことにする。ちょうどその時期、私は右腕の使いすぎで右肩に激痛が走る最悪の状態であった。しかし、若さと根性で右肩の激痛をこらえて橋本君と出発する。全国青い芝の会の用事で、埼玉青い芝の会の八木下さん宅に一泊してから和歌山に向かう。八木下さん宅では、右腕の激痛が激しいので、床の上で転げまわっていた。

### 和歌山のセンターで大暴れ

1月26日、和歌山のセンターには、関西青い芝の会の若い闘士たちが勢ぞろいしている。30名ぐらいはいたろうか。全国青い芝の会会長の横塚さんも顔を出す。怒りと若さのエネルギーが爆発して、センターの職員事務所を占拠する。そして、事務所に置かれてある書類を手当たり次第に破るは、飾り物や事務用品はめちゃめちゃに壊すは、みんなでとことん暴れまわった。当時、私はほんの少し歩いていたので、杖代わりに木刀をいつも持っていた。その木刀で、痛む右手を振り上げて入賞カップなどを叩き割った。その日はセンターにみんなでろう城する。

次の日の朝に、和歌山県警の機動隊員が十数名現れて、私たちを排除しにかかった。京都青い芝の会の三宅君が機動隊員に向かって消化器をかける。消化器の煙がセンターの部屋に充満して、息が苦しい。隊員が3人で私を取り囲んだ。私は木刀を振り回して応戦したが、木刀を取られて隊員3人がかりで外に連れ出されてしまった。外には和歌山県社協の大型バスが横付けされており、そこに私たちは乗せられて和歌山の青い芝の会の事務所まで送り届けられる。センターの事務所をめちゃめちゃに破壊して、一晩ろう城したにもかかわらず、私たちは前科がつかない。なんとも不思議な世の中だ。し

かし、私の木刀は戻ってこなかった。値段が高めのいい木刀であったのだが…。

## 共同生活から独立生活へ

### 角野さん、島崎さんたちが仲間に加わる

福島県青い芝の会の活動も活発になってきて、会員の数が増えていった。『在宅訪問』や各方面に働きかけていた成果が出はじめる。そして、千葉から角野正人さん、郡山から島崎由美子さんという全面的に介助が必要な脳性まひ者がアパートに住み始める。2人も仲間が増えて、ましてや島崎さんは女性であるので、みんな自分のアパートを借りて住むようにしようということになり、1人ずつアパートを探して住むようになっていった。島崎さんはセクトの人間との関係から青い芝を離れて、全障連の運動を行うようになる。そして、長野に移住していく。現在は東京に住んでいるという。

角野さんは1981年に福島県青い芝の会を解散した後、福島市内に『障碍者が地域で生きる会』作業所建設の中心メンバーとなって精力的に活動していく。現在はILセンター福島の大親分になっていて、福島県内の介助保障制度設立に向けて活動を続けている。

### 近くに間借りの部屋を借りる

私も住みなれたアパートを後にして、間借りの部屋を借りる。大家さんと毎日顔を合わせなければならないので、精神的に落ち着かない間借りの部屋の生活であった。

### 鈴木絹江さん、安積純子（遊歩）さんらも青い芝運動に加わる

青い芝の会の会員は脳性まひ者のみであるので、その他の障がい者の取り扱いを巡って散々議論を積み重ねていった結果、青い芝の会と関わる脳性まひ者以外の障がい者を「闘う障がい者集団をつくっていく間は青い芝の会のオブザーバー的存在」として位置付けていた。私たちが在宅障がい者訪問を繰り返していくうちに、養護学校の同窓生で脳性まひ者以外の障がい者が関わってくることになる。鈴木絹江さん、安積純子（遊歩）さんたちである。鈴木さんや安積さんは外的には青い芝の会のオブザーバーではあったが、内部では仲間として一緒に青い芝の会の運動を行っていた。

鈴木さんは福島県青い芝の会の解散以降、船引町の山奥で旦那と一緒に農

業にいそしんでいたが、私が郡山にUターンした後、私たちの活動に触発されたのか、船引町で活動をし始めて、現在、田村市船引町に自立生活センターを立ち上げて精力的に活動を続けている。

安積さんは福島県青い芝の会の解散以降、橋本君と共に郡山に移り住んで、うつみねの会の作業所建設に関わる。その後、作業所の中心メンバーとして活躍していたが、ミスターードーナツの障害者リーダー米国留学事業でアメリカCIL研修に参加したのをきっかけに東京に居を移し、今ではピア・カウンセラーの第一人者として全国各地で講演をしてまわる活躍ぶりである。

## 秋田へ、秋田青い芝の会の再生に行くが…

当時は青い芝の会の全盛期であり、東北にも福島・山形・秋田にと、三県に青い芝の会ができており、『東北連合会』をつくっていた。破竹の勢いをもって18都道府県にまで青い芝の会は拡大していったが、しかし、各地の青い芝の会の内実をみてみると、内容が伴わない面があったことは確かである。

障がい者の中でも脳性まひ者、それも社会性のない、養護学校教育しか受けていない若造が組織を運営していくのであるから、対社会的、あるいは健常者との関係で様々な軋轢を生じていくことになる。福島では、養護学校の同窓生たちが力を合わせて、なんとか青い芝の会を運営・維持していたが、山形や秋田では脳性まひ者の仲間の数が少なく、運動とは程遠い、親睦程度しか活動はできていなかつたようだ。特に秋田は、青い芝の会を結成したにもかかわらず、早くも存続の危機に立ち至っていた。

そのような秋田青い芝の会の状態を何とかしようということで、全国青い芝の会・常任委員会（執行機関）や福島県青い芝の会の会議で議論した結果、青い芝の会・東北連合会から、会員を1人秋田に派遣しようということになる。しかし、山形は会員も少なく、自らの組織を維持することで汲々としている状況なので、福島県青い芝の会から派遣するということに自動的になってしまった。

福島県青い芝の会の会議を何回か持ってみんなで話しても、誰も名乗りをあげなかった。知り合いも少ない秋田に行って、青い芝の会会員の掘り起こしと運動の定着を図るのだから、たいていの人間はしりごみしてしまうだろ

う。しかし、物事は考えようで、「大変だ」というマイナスの考え方を持つのではなく、「秋田に行けばうまい酒も飲めるし、うまくいけば秋田美人と巡り合って…」とプラス思考で考えると、秋田に行くのもそんなに重く感じられなくなり、「俺が秋田に行くことにしよう」とみんなの前で啖呵を切ってしまった。

1976年6月、「なかなか住む家は見つからないだろう」と覚悟して、寝袋を一つ持参して秋田に出かけていく。秋田での話しあは少し後で。

#### 全障連（全国障害者解放運動連絡会議）の結成

秋田の青い芝の会の動きは低迷状態にあったが、全国各地に雨後のタケノコのようにできた青い芝の会に支えられて、全国青い芝の会は急成長を遂げていった。横塚晃一会長の明晰な頭脳と手腕によって、全国の青い芝の会は一つにまとまって、全国の障がい者運動の中心的存在になろうとしていた。青い芝の会の思想や運動方針をその他の全国の障がい者等にも広めることができ課題として浮上してきた。そして、関西青い芝の会関係の勢力が中心となって全国各地の障がい者や健常者に働きかけていって、1976年8月に全障連が結成されたのである。全障連の初代の代表（幹事長）に横塚晃一氏が選ばれたのであった。全障連の第2回大会の折には副幹事に私が選ばれる。まったく光栄？なことであった。これで、私は中央（大都市圏）と地方（秋田）とのギャップがますます見えるようになってきた。

全障連の運動存在の一つとして、全障研（全国障害者問題研究会）との対抗意識があげられる。全障研の関係者の中心的人材は日本共産党の思想の流れをくむ者で構成されていて、「障害児の発達保障論」を掲げ、特殊教育には賛成の立場を取っていた。全障連は当然、特殊教育には反対・統合教育推進の立場を取る。日本共産党に対して積年の恨みのある左翼セクトの関係者らが全障連の一部を担うという図式があったようだ。

そのような魑魅魍魎（脳性まひ者も妖怪の仲間だが）が闊歩する全障連という大所帯の中にあって、全国青い芝の会は運動の基本となっている『行動綱領』を全障連の行動綱領にしようと働きかけていく。しかし、その目論みはまったくの徒労で終わってしまった。折りしも、全国青い芝の会は関西青い芝の会から飛び火した『健常者問題』や横塚晃一さんを亡くすという事態にさらされた経緯もあって、1979年2月に声明書を出して全障連から決別

（撤退）していく。

#### 健常者組織の結成

全障連と並んで、全国青い芝の会で取り組んだもう一つの一大事業は、青い芝の会を支援していく健常者組織をつくることであった。これもまた関西青い芝の会から提案されたものだ。関西青い芝の会では『より重度の脳性マヒ者の自立』という目標を掲げていたため、会員も重度の者が多く、いきおい健常者の手助けがなければ運動が成り立たない状況にあった。組織的に健常者を動かしていく必要性に迫られていたようだ。

こうして、1976年4月、全国青い芝の会春季大学習会の折に『全健協』（自立障害者集団友人組織・全国健全者連絡協議会）が結成される。しかし、全健協の組織生命は長くはなかった。

青い芝の会員と、青い芝の会という組織に関わる健常者との関係は、「やってやる」「理解していただけ」というものではなく、「差別する側」「差別される側」という関係のなかでお互いにしのぎを削っていくことである。ぎりぎりの人間の絆をつくっていき、お互いの人間性を高めあうことが主目的であったものが、いつの間にやら健常者が力を持つに至り主客転倒してしまったらしい。このような危機的状況の中で、関西青い芝の会は1978年4月に臨時総会を開き、健常者組織（関西ゴリラという名称）を解散するに至った。関西青い芝の会の重大な決意を受けた全国青い芝の会でも、全健協を解散する方針を出した。

東北の福島には「グループ・かいな」、秋田には「グループ・とまと」という健常者組織があったが、全国青い芝の会の方針にしたがって、それらのグループを解散していく。何がなんだか半分分からぬままに健常者組織をつくり、2年あまりでその組織を解散させて「果たして、俺たち何をやってきたのだろう」というのが、当時の私の偽らざる気持ちであった。秋田の健常者の中には「せっかく健常者組織をつくって、秋田では何の問題もなく組織として活動しているのだから、中央の意見に従わなくともいいのでは」という意見もあったが。

今になって考えてみれば、当時の青い芝の会の躍進ぶりは異常であった。関西青い芝の会が猛烈な勢いで運動を進展してきた影には、支援する健常者の絶大なる力があったからなのだ。曲がりなりにも高等教育を受けて世間の

荒波にもまれてきた健常者と、養護学校教育しか受けていず、在宅で無為な生活を送っていたD.C.Pでは『月とすっぽん』、どう転んでも太刀打ちはできないだろう。それが分かりすぎるほど分かっていながら、あえて無謀と思われる運動方針を取った、故横塚さんはなんという人なんだろう。と、今でも感心している私である。横塚さんはきっと、若い脳性まひ者と健常者組織に青い芝の会の命運をかけたのだろう。青い芝の会では本当によい勉強をさせてもらった。

## 川崎でのバスジャック

### 私と橋本君が火付け役

1976年4月に川崎市の高津区に全国青い芝の会の正式な事務所を構え、青い芝の会の組織体制は徐々に整っていく。そして、全国青い芝の会の執行機関である全国常任委員会が毎月、その新事務所で開かれる。私と橋本君が全国常任委員に名を連ねていたので、毎月秋田と福島から川崎まで出かけていた。まず、私が秋田からの夜行急行に乗る。介助者がついているときと一人で行くときがあった。杖代わりの木刀をたずさえて行くのだ。夜中の2時ごろに郡山駅に着くと橋本君が介助者と乗りこんで、後は一緒に川崎まで行動を共にした。当時、私は杖（木刀）についてほんの少し歩いていたが、長距離は歩くことができなかった。都合の良いことに橋本君の車いすは前後が逆で、大きなタイヤが前についていた。橋本君の車いすのステップに私が乗って、それを介助者が押すという形で移動していた。

川崎駅から高津区の事務所までは、川崎駅で乗り換えて電車を利用していたが、それよりも川崎駅からバスを利用した方が便利なことが分かって、橋本君とバスを利用することになる。したがって、川崎で車いすでバスを利用し出したのは橋本君が初めてで、『バス乗車拒否』問題の発端をつくったのであった。

### 川崎に住む脳性まひ者たちがバスを利用するようになり

橋本君と私がバスを利用していることが、神奈川県青い芝の会員たちに知られるようになり、川崎市内でバスに乗りこむ車いすの脳性まひ者が増えていった。川崎市内だけでなく、『私たちの足を奪い返せ』とばかりに、全国各

地で車いすによるバス乗車が実行されていった。

そして、1976年12月に川崎市で路線バスの『車いす乗車拒否』事件が起ころ。路線バスに車いすの脳性まひ者が乗車したところ、バスの運転手がバスの運転を放棄してしまったのである。この行為に対して、川崎市内の青い芝の会の会員らが夜を徹して抗議行動を行っていった。川崎市の『車いす乗車拒否』を引き金に、全国各地でも同じような事件が起きるようになって、全国青い芝の会でも何らかの方策を立てなければならない状況になっていく。

脳性まひ者を含む障がい者の交通権を求めて、全国青い芝の会は精力的に運輸省、東京陸運局等と度重なる交渉を持ったが、なかなか良い返事は返ってこなかつた。政府、行政などの障がい者を無視するやり方に対し、業を煮やした全国青い芝の会は実力行動に移っていった。

### 川崎駅前でバスに籠城

1977年4月、川崎駅前に全国各地から車いすの脳性まひ者と助っ人の健常者が120人結集した。川崎駅前のバスターミナルには何十台ものバスが横付けにされていた。車いすに乗った青い芝の会員たちを助っ人が押して、一斉にバスに向かって駆け出していく。会員たちは助っ人に抱え上げられ、一斉にバスに乗り込んだ。会員たちをそのまま放置して助っ人たちは逃げていく。

私たちはバス1台に2人ぐらいの割合で乗っていた。運転拒否のためバスが止まったままなので、バスの乗客が川崎駅前を埋め尽くす格好になり、大変な騒ぎになってきた。バスに乗れない乗客が私たちの乗るバスを取り囲んで「おまえら何をやっているんだ！みんなに迷惑をかけていいと思っているのか！」「早く降りろ！このばか者ども！」と、私たちに向かって罵声を浴びせ掛ける。

私はズボンのベルトに金槌を隠し持ってきた。その金槌でバスの窓ガラスを叩き割った。割った窓からハンドマイクを突き出して、憤怒の顔をしたバス乗客に向かって、私たちはなぜバスを止めているのかを演説した。バス乗客には私の言葉は分からなかつたと思うが。

私はバスの中で暴れまわった。バスのドアが開かないように、タオルで縛る。そして、バスの運転席に座って、ハンドルめがけて金槌を打ち下ろした。ハンドルの真中のプラスチックカバーが割れて火花が走る。運転手席の右横

にあったテープレコーダーのようなものも壊した。窓ガラスも何枚か割る。尿瓶でおしつこをして、それを座席にふりまいた。何度か乗客がドアを開けて中に入ろうとしたが、私はドアの前に立ちはだかって、金槌を振り上げてそれを阻止する。

バスの運転手や警官やバスの乗客に会員たちが降ろされていって、止まつたままのバスが徐々に減り始める。青い芝の会員の乗るバスがだんだん残り少なくなってくる。私が運転席に座って、小休止しているときに、「おい、白石、早く降りろ！」と、叫ぶ声が聞こえる。振り向くと何人かの私服の警官だと思うのだが、バスの後ろからのぞきこんでいた。なぜ、自分の名前がわかつているのか、驚いてしまった。今になって考えても不思議だ。

#### 福島勢が最後までバスに立てこもる

川崎駅前が夕暮れ時となって、日が沈み始める。夕闇の中に私のバスを含めて、止まっているバスは3台を残すのみとなってしまった。後から聞けば、残ったバスに乗っていたのは福島県勢だけだったという。私に、橋本君に、それに吉田強君の3人であった。

橋本君と吉田君が降ろされるなか、私は最後まで粘った。午後11時、4人の警官がバスのドアをこじ開けて入ってきた。私は用意しておいたバスの消化器を警官に向かって噴射した。警官は驚いて一時バスの外に出たが、消化器のガスがなくなったのを見計らってバスに入ってくる。私は立ち上がりて金槌を振り上げたが、あっという間に警官に奪い取られてしまった。私は警官に抱え上げられて、バスのドアからまっさかさまに道路に頭を叩きつけられた。頭から血が流れただけですんだが、打ち所が悪かったら大変なことになるところであった。もっとも、私もバスの中で散々悪さをしてきたので仕方がないか…。

結局、誰も逮捕される事なく決起集会を行い解散となった。

#### 川崎風呂闘争

##### 直接的差別がたくさん

川崎市高津区の全国青い芝の会の事務所では月1回、全国常任委員会が開かれていたので、全国各地の脳性まひ者らが十名近く泊まり込みの会議を行っていた。会議は翌朝の4時ごろまで続くことがあった。その当時は青い芝

の会議ばかりでなく、全障連の会議や各地の青い芝の会の視察などもあって、私は全国を飛び廻っていた。秋田から夜行急行で大阪に行って、翌日全障連の会議。夜には再び夜行特急に乗って川崎で常任委員会の会議。川崎に一泊して、福島の青い芝の会に寄る。福島に一泊して、その足で次の日は仙台で全障連東北ブロックの会議に出席して、ようやく秋田に帰る。というような、ハードスケジュールをこなしていた。

このような日程が月1度は必ずあったので、何日も風呂に入れないことがある。私は汗かきのタイプで、身体の臭いもきつい。川崎の事務所は会議・視察旅行の中間地点になっていたので、事務所の近くの銭湯を利用するようになる。私たちが銭湯に入っていけば、銭湯のご主人は初めのうちは胡散臭い顔をしていたが、直接には文句は言わなかった。しかし、福島の角野正人さんが私たちと一緒に銭湯に行った時のこと、銭湯のご主人が私たちの前に立ちはだかって、「そんな人が銭湯に入られたら困るので、出でいってくれ」という。角野正人さんは体格が大きく、立派な体をしている。しかし立ち歩くことができないので、銭湯の脱衣所でやおら横になって、介助者に服を脱がしてもらっているところであった。大トドが寝転んでいる姿を想像してもらえばよい。その日依頼、銭湯では障がい者の入浴を拒否するようになる。

##### 銭湯の前で大暴れ

銭湯と私たちの間で小さな摩擦が繰り返されていたある日、私たちは常任委員会の役員、川崎の仲間たちと共に、大勢で銭湯に押しかけていった。銭湯でもやくざ風情の男を雇っていて、私たちと応戦するかまえた。たちまちのうちに銭湯の前は戦場に変わっていた。私は銭湯の前に立ちはだかっているやくざ風の男に向かっていく。そして、男の胸倉にくらいついた。男は私を振りほどこうとするが、私は離さなかった。男のワイシャツのボタンがあらかた千切れ飛んでしまった。

このように私たちは、私たちを理不尽に取り扱う社会に対して、果敢に闘っていました。20年前は、私たちに対する社会の壁は分厚いものであった。私たち脳性まひ者を拒否するところは銭湯だけでなく、街の中のいたるところに存在していた。

#### 54養護学校義務制化阻止闘争

### ステッカーを貼っているところを警察にみつかる

養護学校義務制化阻止の闘いに幾分かの疑問を感じながら私は秋田の地で細々と活動に取り組んでいた。『養護学校義務制化阻止』のステッカーを大量につくって、秋田市内の電信柱などに貼り巡らしていった。日中、正々堂々とやるわけにもいかず、外が暗くなつてから介助者の学生たちと街の中に出来ていった。私が車いすに乗って、糊の入ったバケツを抱えて、私が乗った車椅子を介助者が押して、電柱にステッカーを貼っていく。介助者がステッカーを貼っているのを、私はただ見ているだけであったが。

ある日、秋田県教育委員会が入っている県庁の玄関前の柱にステッカーを貼ろうということになり、真夜中に事務所を出発して私と渡辺新君という学生が一人、県庁前まで行ってステッカーを貼っていたら、隣の秋田県警から警官が一人やってきて「おい、きみたち、そこでなにをやっているんだ」と、呼びとめられて県警まで連れていかれてしまった。そして、夜明けまで警官に懇々と説教されるという一幕もあった。

### 文部省の前に柵

私たちは時には青い芝の会、時には全障連という『顔』を持って文部省との交渉にのぞんだ。

文部省に限らず、交渉の折、私は口下手な為うまく話しができなかつた。交渉の中で論理的に話している仲間たちを「よくそのようにうまく話せるな」と、尊敬の眼差しで見ていた。

交渉の際に白熱したこと、私には言語障がいもあって言葉ではうまく伝えられないので、態度で持つて分からせてやろうと文部省の職員めがけて、灰皿を投げつけたこと也有つた。そのような青い芝の会や全障連の少し過激な行動を見て、文部省では玄関前の入り口に頑丈な鉄製の柵をこしらえてしまつた。

### 丸坊主になり、3日間の文部省闘争

いよいよ、昭和54年（1979年）度が始まろうという時期に、横塚会長を亡くした全国青い芝の会では『横塚会長の弔いの気持ちで、養護学校義務制化に対して最後の最後まで闘つていこう』と、文部省闘争を準備していった。目潰し爆弾を洗剤で作つて、文部省の職員めがけて投げつけようという過激な行動も考えられたが、実行するまでには至らなかつた。

文部省闘争が近づくにつれて血氣盛んな若い役員たちは、一致団結して闘っていく証に、みんなで丸坊主になろうという意見が持ちあがつて、それが実行されていく。私は4月の初めに結婚式を控えている身であったので、できることなら丸坊主になりたくなかつたが、みんなの熱気に押された形で丸坊主になってしまった。

1979年3月29日になった。2トントラックのレンタカーを借りて、そこに青い芝の会の若い脳性まひ者たちが乗りこみ、文部省をめざして突き進む。文部省の玄関前の柵を境に私たち青い芝の会員と文部省の職員が対峙した。

私たちは総勢50名あまり、職員はそれを上回り、文部省の玄関前を封鎖している。関西青い芝の会を中心とした健常者との問題、横塚会長の死などが重なり、青い芝の会の求心力は弱まっていて、全国動員をかけても会員が集まらない状況になってきていた。

それでも、私たちは文部省の前で3日間、果敢に闘いを繰り広げていく。私たちは文部省に対して話し合いを求めていたが、文部省の柵は堅く閉ざされたまま、職員たちは私たちに耳を傾けようとはしなかつた。私たちは文部省の柵をよじ登つて、中に入ろうと試みるが、多勢に無勢、職員たちに押し戻されてしまう。私は何度も柵をよじ登つて、とうとう柵の中に入ることができたが、職員に抱え上げられて柵の外へ突き落とされた。あるものは仲間のおしつこの入った尿瓶を職員めがけて投げつけたり、自分のズボンのベルトを外して職員に打ちかかったり、若い仲間たちのエネルギー発散の闘争であった。31日、最後の闘争の日には、トラックに乗りこんで文部省の周囲を走りまわつて、ハンドマイクでショプレヒコールを繰り返したり、文部省の職員めがけて火の付いている花火を投げつけて、闘争を終了していった。

### 橋本君が郡山市へ

私が「東北に青い芝の会の拡大を」という使命を燃やして秋田に出向いたのと、時を同じくして橋本君が福島市を離れて、郡山市に移り住むことになる。福島の青い芝の会は細胞分裂を起こして、福島市と郡山市に運動の拠点を持つことになった。萱の外の人間として私は、橋本君が郡山に移り住むの

は時期が早すぎるとの見解を持っていたが、橋本君は敏速な行動であれよあれよという間に郡山市に移り住んでしまっていた。

## 発展的解散へ…。そして作業所設立へ

1981年の国際障害者年も終わりに近い頃に、福島県青い芝の会は臨時総会を開催して発展的解散を果たした。私は当事者ではなかったので、どのような経過で青い芝の会が発展的解散に至ったのかいまだにその内容を把握していない。露骨に過激？な告発型の青い芝の会の運動は保守性の強い福島県では馴染めないものであったのだろうと思う。福島の地に根付いた障がい者運動に取り組もうという観点から、運動の拠点としての小規模作業所設立に動いていったものと私は解釈している。

## 青い芝の会の運動と思想

### 親睦会から要求 告発型

青い芝の会は昭和32年に東京の『光明養護学校』の卒業生が集まってつられたと聞いている。在宅で外にも満足に出られない脳性まひ者の卒業生を光明養護の先生たちが連れ出したのがきっかけになったようだ。青い芝の会の最初の活動は親睦会や旅行を企画・開催して、卒業生の元気な姿を確認することから始まったのであった。徐々に青い芝の会の存在が周辺の脳性まひ者に知れ渡るようになって、新しい会員も増えていくて、青い芝の会は親睦が目的の会から、運動が主体の会に変身していくのである。

東京の脳性まひ者とは別に、茨城のマハラバ村という脳性まひ者の共同体を出て神奈川に移り住んだ横塚さん、横田さん、矢田さんなどの脳性まひ者たちが『神奈川青い芝の会』をつくって、東京青い芝の会とは違う運動形態を取っていった。

### 差別され、抑圧され 社会の片隅で

#### 生きていかなければならなかつた脳性まひ者

現在の、郡山市やその他の街で障がい者が制約はあってもなんとか生活できるようになったのは、私たちや私たちの先輩たちの、血の滲む努力によって勝ち取ってきたものなのである。

昭和30年代といえば、私が小学生の頃である。巷には露骨な障がい者差別があったに違いない。先輩にあたる脳性まひの方の話しへ、「道を歩いていれば、子どもたちから石をぶつけられた」という。

脳性まひ者は身体に手も足も正常についている。しかし、脳の運動中枢が侵されているものだから頭で考えているように手足が動かない。脳性まひ者特有の顔や手足の不随意運動や緊張が周りの健常者には奇異のものと映るのだろう。わが国の社会は特に、『自分と違うものは排除していこう』という考えが強いので、健常者の目に奇異に映る脳性まひ者は露骨な差別を受けるという方程式ができる。

また、わが国の障害程度等級は傷痍軍人の障害程度を基準（手足があるかないかで判定）に作られているので、手足があるが、それが満足に動かない脳性まひ者は障害程度を軽く見積もられたり、制度上においても社会的不利益をこうむっている。

このように、脳性まひ者は社会の中で、脳性まひ者以外の障がい者とも違う社会的障壁が立ちふさがっているので、脳性まひ者が団結していき、脳性まひ者主体の運動様式を創っていくなければならないというのが青い芝の会の主張であり運動であった。

わが親に殺される脳性まひ児・者という現象だけでなく、その当時は（現在もあまり変わらないかもしれないが）脳性まひ者に対する差別や社会的障壁は数限りなく存在していた。収容施設での悲惨な生活（職員からの暴力、嫌がらせ、子宮摘出など）。在宅でも座敷牢（あるいは天井裏）に隠された生活。旅行はおろか外出もできない生活。食堂や飲み屋は脳性まひ者を見ただけで門前払い（設備や環境も劣悪）。結婚なんかご法度、周りの健常者に反対されて夢のまた夢（子どもが生まれると分かれば墮胎しろと迫られる）。就職もできない、年金もなかった、自立しても少額の生活保護で、毎日コッペパンをかじって飢えをしのぐ生活。このように、脳性まひ者・障がい者を人間として見ない社会、脳性まひ者・障がい者を排除している社会に対して憤りを覚えて立ちあがっていたのが青い芝の会の脳性まひ者らであった。

### 青い芝の会の行動綱領

1975年11月に行われた青い芝の会第2回全国代表者大会にて『日本脳性まひ者協会「全国青い芝の会」行動綱領』が採択される。

行動綱領は、

1. われらは、自らが脳性まひ者であることを自覚する。

われらは、現代社会にあって、「本来あってはならない存在」とされつゝある自らの位置を認識し、そこに一切の運動の原点をおかなければならぬと信じ、且つ行動する。

2. われらは強烈な自己主張を行う。

われらが脳性まひ者であることを自覚したとき、そこに起こるのは自らを守ろうとする意志である。

われらは強烈な自己主張こそ、それを成しうる唯一の路であると信じ、且つ行動する。

3. われらは愛と正義を否定する。

われらは愛と正義の持つエゴイズムを鋭く告発し、それを否定することによって生じる人間凝視に伴う相互理解こそ真の共生であると信じ、且つ行動する。

4. われらは健全者文明を否定する。

われらは健全者の作り出してきた現代文明が、われら脳性まひ者を弾き出すことによってのみ成り立ってきたことを認識し、運動及び日常生活の中からわれら独自の文化を創り出すことが現代文明への告発に通じることを信じ、且つ行動する。

5. われらは問題解決の路を選ばない。

われらは安易に問題解決を図ろうとすることが、いかに危険な妥協への出発であるか、身をもって知ってきた。

われらは次々と問題提起を行うことのみが、われらの行いうる運動であると信じ、且つ行動する。

われらは以上5項目の行動綱領に基づき、脳性まひ者の自立と解放を掲げつつ、すべての差別と闘う。

(神奈川の青い芝の会の行動綱領には『われらは健全者文明を否定する』という一項目は入っていない)

この物凄い行動綱領によって、全国青い芝の会は日本社会に対して『告発型戦艦』を発進させたのであった。

### 脳性まひ児殺し…減刑嘆願運動に対しての反対運動

今も時々新聞の三面記事に、年老いた親が障がいを持つわが子を殺してしまった、あるいは自分も自殺してしまうという記事が載ることがある。殺される子どもは脳性まひ者や知的障がい者が多い。この類の事件は昔から連綿と続いている。

1970年に横浜市金沢区で母親が脳性まひ児を殺すという事件が起きた。その事件を知ってわが子を殺した母親の住む周辺の住民たちが、「わが子を殺した母親には罪がない」として不幸でかわいそうな母親を救おうという『減刑嘆願運動』を展開していく。

この『減刑嘆願運動』に対して反対運動を繰り広げたのが『青い芝の会』神奈川県連合会であった。前述した映画『さようならCP』に出演していた横塚晃一さん、矢田龍司さん、横田弘さんらが神奈川の青い芝の会の中核について、運動を展開していった。横塚さん、矢田さん、横田さんらは茨城県のマハラバ村という共同体で生活し、結婚し、後に青い芝の会の運動の方向性となる理論武装をして、神奈川県に移り住んだと聞いている。

神奈川の青い芝の会の人たちがなぜ、脳性まひ児を殺した母親の減刑嘆願運動に反対していったのか。五体満足の健常な子どもを母親が殺した場合、減刑嘆願運動は起こるだろうか。まずは起こらないだろう。肉親を殺めたのだから重い罪をさせられて当然だというのが世間の常識だろう。これに対して「脳性まひ児を産んだという事実=不幸ということに短絡的につながってしまうのが一般人の常識になっている。つまり、この社会にあっては脳性まひ者は不幸の存在であり、あってはならない存在として位置付けられてしまうのである」という考えのもとに、神奈川県の青い芝の会の脳性まひ者らは運動に立ち上がっていったのである。

### 優生思想に対する告発運動

1973年5月に優生保護法改定案が国会に上程される。これに対して青い芝の会（神奈川、東京、茨城、栃木の会員）は1万人あまりの署名を持って国会に出向いて、改定案反対の請願をしていく。

青い芝の会はなぜ優生保護法改定案に反対していったのか。優生保護法第一条には同法の目的として『優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する』云々とある。不良な子孫というのは当然障がい者を指していることには間違

いないだろう。また、改定案の『中絶できる』条件として第十四条四項に『その胎児が重度の精神又は身体の障がいの原因となる疾病または欠陥を有しているおそれがあると認められる者』とある。産まれてくるであろう者が障がいを持っているとわかった時点で中絶しても良いという法律は、とりもなおさず我々、社会の中で生きている障がい者の存在も危うくするものであるという観点から、青い芝の会は優生保護法改定案に反対していったのである。

横浜で起きた脳性まひ者児殺しの事件と、この優生保護法改正案に取り組み出していくうちに、青い芝の会は『障がい者差別を許さない告発型の運動』にのめりこんで行く。そして、胎児（羊水）チェック、安楽死、臓器移植、コピー生物、遺伝子操作等々、優生思想に少しでも関連のある事象に対して公然と反対していく運動を展開していく。

胎児チェック検査、コピー生物を作る、遺伝子操作などは明らかに人間の生命に対する傲慢な行為であるとは思うが、安楽死や臓器移植の問題については敢然と否定できるものではないと私は考えている。

#### 東京型と神奈川型の運動の違い

私は6年間にわたって青い芝の会に関わってきた。その間、福島から秋田へ、秋田から神奈川県相模原市へと流れていく。時間の流れについて、青い芝の会の組織内部もずいぶんと変わっていた。1979年7月に横塚晃一会長が亡くなり、青い芝の会は衰退の一途をたどることになる。私が全国青い芝の会の再建委員会代表に就いたこともあったが、私の力量では青い芝の会の衰退にブレーキを掛けることができなかった。

そのような状況下で、私は東京青い芝の会の面々と親しくなっていく。当時、東京青い芝の会では郡山養護学校の後輩の大森幸守君が事務局員として活躍していた。大森君との関係もあって、東京青い芝の会との関わりが作られていくことになったのである。大森君は1992年にくも膜下出血によって亡くなってしまった。大変惜しい人材を亡くしてしまったものだ。

神奈川青い芝の告発型の運動に対して、東京青い芝の会は『生活保障制度を整備していくことによって、脳性まひ者の生活は可能になる』との見解を持って運動を展開していた。告発一辺倒の全国青い芝の会の運動形態には幻滅を感じていた時分でもあり、磯部さん、寺田さん、若林さん、今岡君（1997年に亡くなる）たちとの付き合いから、私は徐々に東京青い芝の会の運動形

態に興味を持ち始め、そして、とうとう東京青い芝の会と共同戦線を組むようになった。

1981年の末に行われた青い芝の会全国大会で私は役員を降りた。そして、相模原市に地域作業所『くえびこ』を開設して、地域に根付いた運動の展開を図っていく。また東京青い芝の会を中心全国各地の障がい者団体に呼びかけて所保連（全国所得保障確立連絡会）を結成し、運動を展開していく。

その結果、1986年に「障害基礎年金」を創設することができた。その後、東京青い芝の会等とともに自立連（全国障害者自立生活確立連絡会）を結成し、制度改革に向けた運動を展開していく。一方、相模原においては、地域における運動を粘り強く展開していく、1986年には念願のケア付き住宅「シャローム」を建設することができた。

#### 秋田での4年間

1976年から1980年までの4年間にわたり、福島の地を離れて、秋田市の生活を送ることになる。雪と雨と曇りの日の多い秋田での生活は、私にとっては少し憂鬱な日常であった。

#### 寝袋を持参で行くが、それが当たる

秋田には名前だけの青い芝の会があり、その会員たちをサポートしていく健常者たちのグループがあった。健常者たちにはっぱをかけられた形で青い芝の会が存在していたといつても過言ではない。そのグループにいた清水君という秋田大学の学生が、当分私の付き添いとして一緒に行動することになる。まず、泊る場所がないので、秋田大学の男子寮に転がり込んだ。その他に秋田大学の女子寮や、健常者グループのリーダーであった佐々木さんという女性の方の家の1部屋を借りたり、秋田での拠点を作るまでの間、転々と泊まり歩く生活が続く。

#### 3ヶ月かかってようやく借家が見つかる

毎日のように不動産屋を回って借家を探すが、どこに行っても胡散臭い顔をされて断られてしまう。福島市での借家探しに輪をかけたように難しかった。秋田市内の不動産屋を100軒ぐらい回ったろうか、あきらめかけていたころに、ようやく泊る場所兼秋田青い芝の会の事務所がみつかる。秋田に

来てから3ヶ月のことであった。

#### 秋田市の対応

私に対する秋田市の行政の対応はそれなりに慎重で、割合物分かりの良い、話を聞く姿勢であった。ある時、秋田市の職員と冗談を交えて話していると、「実は福島市から白石さんに対する情報を送ってもらったんですよ」と言って、3センチぐらいの厚さのファイルにまとめられた私に関する情報が届いていたのである。これには驚いてしまう。福祉事務所間では、私はブラックリストの1人としてカウントされていたのだと思う。

#### 秋田青い芝の会の会員らは

秋田市に貸家を借りて、ようやく青い芝の会の活動をスタートした訳だが、秋田青い芝の会の会員たちは一向に事務所(私が住んでいる)に来る気配がなかった。で、健常者グループに頼んで、会員の家を訪問していったが、大多数の会員たちは口をそろえて「青い芝の会を辞めたい」という。これにはあきれ返って、返す言葉がなかった。入所施設にいる会員も多かった。

#### 初心に帰って 会員集めから

秋田青い芝の会員たちがぞろぞろと辞めていく中、どうやって青い芝の会を立て直していくのか路頭に迷ってしまう。どうしたらよいものか考えて、郡山市の福祉サークルや福島の青い芝の会で行っていた在宅障がい者訪問活動を秋田でもやっていこうと奮起する。その当時はプライバシーの問題についてそんなにやかましくなかったので、秋田市の身体障害者親の会の方に頼んで、会員名簿をコピーしていただく。早速、健常者のグループのメンバーと在宅訪問活動を行っていく。当時、私は、福島から手動式三輪車(子供の乗る三輪車を大きくしたようなもので、右手でハンドルを回して、後輪に運動しているチェーンを回して進み、左手で舵をきるというもの。重量がかなりあった)という車いすを持ってきていたので、それに乗って、健常者が付いていく。相当の数の家を訪問して回ったが、体よく断られることが多かった。何回行こうが断られる。何度かは家の玄関前で座り込みましたが、当の障がい者本人には会えずじまいでの終わることが多かった。引っ越しして行ってしまった家族も多かった。それでも、在宅訪問の成果があって、ぼちぼちと在宅脳性まひ者との関係が生まれてきた。しかし、即戦力となるような脳性まひ者には巡り合う機会がなかった。

#### 再建した秋田青い芝の会は親睦会がやつと

在宅障がい者訪問活動で数名の脳性まひ者との関係ができたが、青い芝の会運動の参加となると二の足を踏むことが多く、たいていは私一人で行動していた。養護学校義務化の問題で秋田県の教育委員会との交渉のときには福島から何人かの脳性まひ者に外人部隊として来てもらったこともあった。そのような秋田青い芝の会の会員であったが、月一回ぐらいのペースで行う行事(飲み会のつく)にはたくさんの人が集まってくる。事務所で夜遅くまで飲んでいたものだ。障がい者運動までは届かなくても、在宅の障がい者が集まつてくるようになっただけでも良しとしなければならないと、自分に言い聞かせたものである。

#### 学生がたくさんの健常者グループ

労働運動や学生運動が下火の時期に入っていたが、福島でも秋田でも、学生運動の生き残りが障がい者運動のほうにも首を突っ込んでいたのであった。福島では特にその傾向が強かったが、秋田でも似たことがあった。健常者グループにセクト(中核派、革マル派、社青同、第四インターなど)関係の学生が入り込んで、そこに関わっている学生や障がい者などをセクトに引き込もうと虎視眈々と狙っているのである。私は純粋に障がい者運動、青い芝の会の運動を行っていくだけだったので、セクトの学生などと良く議論を闘わしていた。時には夜中を過ぎて朝方になっていたこともある。知識や経験のある健常者だが、議論の上では絶対に負けたくないの、最後の最後まで食い下がっていた。秋田の健常者グループでは秋田大学生が多かったよう思う。女子学生も多く、中には恋愛関係にまでいった学生もいた。が、あっさりとふられてしまった。女子高校生も良く事務所に来ていた。福島の青い芝の会のメンバーは、ことに吉田強君、佐藤孝男君らは、女子高校生目当てに良く秋田まで来ていたものだ。

現在では考えられないような、私たちと良く付き合ってくれる健常者が多くいたものだ。青い芝の会の用事で大阪や東京などに行くことが一月に一度はあったのだが、青い芝の会は財源的にひつ迫していて、交通費など半額は自己持ちであった。付き添っていく健常者も半額は自己持ちで行った。時には女子学生の付き添いで行くこともあった。文句など一言も言わずに、よく私たちと付き合ってくれたものだと思う。

### 秋田の冬は雪でたいへん

秋田の気候は曇りと雨降りの多い地域であった。だからだろうか、気持ちまで滅入ってくる。気候が県民性をも左右するのだろうか、口数の少ない寡黙な人が多かったような気がする。30年以上前はまだそんなに温暖化の影響がなく、雪がずいぶんと降り積もっていた。雪の降る冬の間も日中活動を休みなく行っていたことを思い出す。手動式三輪車に乗って、あるいは普通の車いすに乗って、学生たちがキャスターを上げて雪道を歩く。女の子も私を車いすに乗せて、キャスターを上げて息を弾ませながら在宅障がい者の家を訪問に出かけた。道にはわだちができていて、車いすで走ると、車いすが斜めに傾いて転びそうで危なかった。ある日、雪が降り積もった道を手動式三輪車で走っていたところ、ドンと急に座席が下に落ちた。良く見れば、前輪を支える鉄の棒がぼっきりと折れているではないか。雪道を走っていたもので、前輪を支える棒に多大な力が加わったのかも知れない。

雪の降っている冬の日は、外は寒くてなかなか出かける勇気が出でこないので、コップ酒をあおって、その勢いで出かけたこともあった。目的地の障がい者の家にたどり着くと、父親が酒を飲んでいて、「寒いとこ大変だったな。お前も酒を飲め」とお酒を御馳走になったこと也有った。

冬の時期、一番大変だったのはカンパ(募金)活動であった。活動には事務所の維持や交通費がかかるが秋田青い芝の会の財源はカンパに頼るしかなかったので、冬の非常に寒い日でもカンパ活動を行わなければならなかつた。冬の寒さの中、街頭に立とうとする仲間は皆無で、1人わびしい街頭でのカンパ活動はできればやりたくなかつた。しかし、私のわびしい姿を見て、同情のあまり募金を(1000円札が多く入る)入れていく人たちが多くいた。雪道は凍っているので、ブーツを履いたうら若き女性が滑って良く転んでいた。

冬のカンパ活動で街頭に車いすでいるときには上着を2枚重ねて着ていたが、それでも寒気が身体を刺して、手袋をはめている手もガチガチに凍えてしまっていた。カンパ活動から帰った後、事務所兼自宅のお風呂に浸かっているのだが、なかなか身体が温まらない。お風呂の後は学生たちとお酒(新政、高清水など)を飲んでいた。

### 全国青い芝の会長の横塚晃一さん亡くなる

映画「さようならCP」の中で、カメラを持って出てくるのが横塚晃一さ

んであった。「カメラを健全者に向けてシャッターを押そうとすると、健全者の存在が怖くて、なかなかシャッターを押すことができない。それと同時に私の中にある健全者幻想が頭をもたげてくる」という意味合いのことを映画の中で話している。このように、横塚晃一さんは常に差別する側の健全者、差別される側の障がい者の現実を冷静に見通して、それを青い芝の会の運動に取り込もうとしていた。

頭脳明晰で、なお且つ組織をまとめていく力があった横塚晃一さんがいたからこそ青い芝の会は1970年代の時代に障がい者福祉の世界では一世を風靡したのである。横塚晃一さんは私にとっては偉大なお父さん的な存在であった。横塚晃一さん、福岡の古賀稔章君、横浜の福田稔君たちと車で移動中のこと、若者の脳性まひ者3人が後部座敷でワイワイガヤガヤ騒いでいると、横塚さんに一喝される。普段は穏やかな面もある横塚さんであったが、時と場合によってはメリハリをつけた付き合い方をするのだと、とても勉強になった。そして、横塚さんは厚生省などに提出する要望書などを若い私たちに「これを書いてみなさい」と渡すことがあった。私も何回か横塚さんに文章作成を依頼されたことがある。当時はワープロやパソコンは無く、電動の和文タイプライターでガッチャンガッチャンと漢字を探しながら打っていた。我ながら上手い文章ができたと全国青い芝の会の常任委員会(役員会)に持つていけば、横塚さんが一目見るなり、「これでは提出できる文章ではない」と突き返される。2回、3回こんなことを繰り返して、ようやく文章として認められるといったことを通して、私の文書作成能力が身についていったのである。

若い脳性まひ者の生きる指針であった横塚さんも病氣には打ち勝つことができなく、1978年夏に43歳にしてその命を終えた。

### 横塚さんの告別式の準備で1ヶ月間川崎の全国事務所に

横塚晃一さんが亡くなったのは、今の社会状況にも責任があるとして、横塚さんの死を社会に訴えかけようと追悼集会を行っていくことに決まる。

追悼集会の準備をしていくため、私と福岡の古賀君、横浜の福田君が川崎の全国事務所に1ヶ月間泊まり込むことになる。夏の暑いときで、エアコンなどは無かつたので、3人で裸同然の格好をして仕事をしていた。

横塚さんが亡くなる前から、全国青い芝の会の運動の勢いは弱まってきて

いた。その最大の原因是関西青い芝の内部のもめ事にあったように思う。関西青い芝の会は、重度の脳性まひ者を街中で自立させようと懸命になっていたので、健常者に介助という面で多大な力を借りなければならなくなってきた。そして、関西青い芝の会のお手伝いを全面的に行っていく友人組織・グループゴリラを誕生させたのである。最初のうちは関西青い芝の会とゴリラの関係はうまくいっていて、全国的に健全者友人組織を作っていくことに決まり、前述のように福島にグループ・かいな、秋田にグループ・トマトがつくられた。しかし、関西のグループ・ゴリラが大きくなるにつれ、青い芝の会の運動にまで口を出すようになってくる。養護学校を卒業しただけで、知識も社会性も身についていない脳性まひ者が大勢の健常者を相手に対等にやりあっていくのは無理があったようだ。そのような状況になって、関西青い芝の会の役員会でグループ・ゴリラを解散することに決まるが、そのことに大阪青い芝の会が反対して、収集がつかない状況になっていった。今まで若い者同士で青い芝の会を担っていこうとしていた関西の古井(旧姓鎌谷)正代さんと三宅君が全国青い芝の会の常任委員(役員)を降りるという事態になって、私と古賀君、福田君がかりだされたのである。

#### ボランティアに来ていた妻の栄子と巡り会う

横塚晃一さんの追悼集会の準備を行うため、何人かの学生ボランティアが全国事務所に詰め掛けていた。そのボランティアの一人が現在の妻の栄子であった。以前にも青い芝の会のボランティアをしていた栄子を見かけたことがあったが、話をするといった関係ではなかった。それが、横塚さんの追悼集会の準備を通じて、栄子との距離が急速に縮まっていった。横塚晃一さんの死が私と栄子との縁を結んでくれたのである。追悼集会の準備のために栄子に車いすを押してもらって横浜に出かけた帰りに、山下公園でデートすることもあった。追悼集会当日には、私が横塚さんの写真を持ち、私の車いすを栄子が押して厚生省前をデモして歩いた。

横塚さんの追悼集会を終えて、秋田に戻るときに、「秋田で一緒に住まないか」と栄子に言ったところ、いろいろ集会のことで片付けなければならない事があるので、それを片付けてから秋田に来るとのこと。

そして、1978年の秋にとうとう栄子が秋田に来てしまう。青い芝の会の事務所でしばらくの間同棲生活が始まる。栄子はその当時千葉大学の看護学部

の学生で、大学を中退して私のもとに来てくれたのである。私の胸の内は感謝感激であったが、栄子の家族はどれほど驚いたであろうか。栄子の父親に長い手紙をいくつもいただいた。栄子の両親は私と栄子の付き合いは認める形になったが、大学を卒業してからでも良いのではないかというのが栄子の父親の意見であった。でも、2人とも遠くに離れての遠距離恋愛という形をとることには抵抗があって父親の意見を押し切って秋田での同棲生活は続いている。

#### 東京青い芝の会と急接近

前述したが、急成長した青い芝の会の思想的な面は神奈川青い芝の会の影響下にあって、東京青い芝の会のような制度改革を行っていく中で脳性まひ者の生活を良くしていこうという生活保障重視の考えを取り入れた運動はあまり行われてこなかった。

そんな東京青い芝の会に若くて元気な会員が入った。なんと、郡山の養護学校を卒業した私の後輩の大森幸守君(若くして亡くなつたが)であった。大森君を東京青い芝の会に紹介したのは、私の養護学校高等部の同級生であった茅野信路君であったから、また驚く。その大森君の仲介もあって、東京青い芝の会の中心的メンバーであった磯部真教さん、寺田純一さん、若林さんたちとの付き合いが多くなっていく。その関係の中で、障害基礎年金創設の足がかりになった所保連が作られていったのである。

関西青い芝の会のごたごたや横塚さんが亡くなったこともあるって、常任委員会の会議にもオブザーバーとして東京青い芝の会のメンバーが姿を見せる事になって、青い芝の会の運動にも変化が表れてくることになる。

#### 全国青い芝の会再建委員会の代表に

1979年であったか、青い芝の会全国大会が開かれた時のこと、東京青い芝の会から緊急動議が出される等、当時全国青い芝の会の会長代行であった横田弘さんが常任委員会を解散、総辞職してしまった。今後、青い芝の会をどうしていくかを若い会員たちに委ねられるという状況になる。若い仲間たちで話し合った結果、青い芝の会が正常に機能していくまでの間、再建委員会として活動していこうということになる。その代表に私が就くことになったのである。いくら弱小で、立て直すことになった青い芝の会といえど、全国に名をはす団体の代表に29歳の若造であった私に果たして務まるのか、と

ても不安であったことを覚えている。

#### 郡山で結婚式を挙げ、息子晃寿が生まれる

1979年3月の末に行われた養護学校義務制化阻止の運動が終わってすぐに、郡山で私と栄子の結婚式を行った。栄子は妊娠していたし、栄子の両親の願いもあって、正式に結婚式を挙げたのである。その年の7月には息子の晃寿が生まれる。息子の誕生日は奇しくも横塚さんが無くなつて、ちょうど1年目の日であった。だから、横塚晃一さんの晃をいただいて晃寿と名前を付けたのである。

#### 全国青い芝の会事務所が川崎から相模原に移転することに

青い芝の会の運動の衰退化に伴つて、財政面でも厳しい状況になつていく。当川崎にあった事務所の家賃が高かつたので、もっと家賃の低い場所に移転しようということになった。神奈川県内の各地の不動産屋をあたつていつた結果、相模原市に適当な物件があることが分かつて、その貸家を借りることに決まる。そして、事務所番をしていくという名目で福岡の古賀君がその場所に泊り込むという形をとる。

川崎に事務所がある時には専従の健常者を雇っていたが、財政面でも苦境に陥つた青い芝の会では専従の職員を雇う力が無くなつてゐた。事務所番の古賀君だけでは事務作業もあまりできなかつた。そのような状況を何とか打破しようと考えたのか、東京青い芝の会の磯部さんと寺田さんが秋田の私をたずねて來たのである。磯部さんと寺田さんは、相模原の全国事務所の維持運営を是非とも私に頼みたいと言う。突然のことで、私も何と答えていいか分からなかつたので、その場は「考えてみる」と答えておいた。

曲がりなりにも秋田青い芝の会を立て直すと言って秋田に來たので、このまま秋田を去ることについてはためらいがあつた。秋田でいろいろな人たちとのお付き合いもできたので、それを無下にするのもどうかなと思った。でも、このままの状態で秋田青い芝の会が発展しなかつたら、秋田で、鳴かず飛ばず一生を終えるのも悲しいなという思いもあり、わたしの心は複雑であつた。

#### 秋田を大山君と福田君に託して、相模原市に引っ越す

秋田に残るか、相模原に行くのか悩む日々を過ごしていたが、「運動も停滞している秋田にいるよりは、相模原でもっとのびのびと運動を行つていった

ほうが全国の障がい者のためにもなるのではないか」という妻の言葉を聞いて、相模原に行ってもうひと花咲かせようかという気になり、秋田を去る決心をする。

私が相模原に引っ越した後に残る秋田の連中が気になつたので、以前から関わっていた秋田市内に住んでいた、脊椎損傷の大山君(10年前に亡くなる)と、時々秋田に来ていた横浜の福田君に秋田に移住して活動してほしいと頼み込んで、何とかみんなに納得してもらって家族3人で新天地相模原市に引っ越す。

#### 秋田市から相模原市へ、活動の場を移す

雪との格闘、在宅の脳性まひ者を外に連れ出す活動、健常者とのふれあい等、様々な思いが詰まつた秋田を離れて、1980年、東京や横浜の大都市に近い相模原市での新しい生活が始まった。

#### そのまま生活保護を受給、妻は看護学校へ

青い芝の会全国事務所に歩いて通える場所に2軒長屋があり、その1軒を借りる。始めのうちは妻が全国青い芝の会の事務所の仕事を手伝つてゐた。

私との付き合いを機に千葉大の看護学部を退学したが、私たち障がい者の付き合いには医療的な支援も欠かすことはできないとの思いがあり、もう一度看護学校に行きたいという。

秋田から相模原に越して来てからも生活保護を家族で受給していたので、相模原市の福祉事務所の職員と、妻が看護学校に行けるかどうか話し合つた。生活保護受給者は高等教育を受ける際には、生活保護からの脱却を図らなければならぬというのが職員の見解であった。「妻は看護師になって働いて、生活保護からの脱却を果たそうとしているのだ。その志を踏みにじるのか。看護師になって生活保護から脱却すれば、相模原市や国の予算を余分に使う必要がなくなるのではないか」と食い下がり、特別に認めてもらうことに成功する。何事もやってみることだ。

その後、妻は北里看護学校に通い、北里大学病院の看護師になって働くことになる。

### 手動式三輪車から電動車いすへ

秋田から相模原に移る時に愛用の手動式三輪車を運んで来て、相模原でも移動するときに使っていたが、ある時車道と歩道の間にある縁石に手動式三輪車の前輪を思い切りぶつけてしまい、手動式三輪車が使い物にならなくなってしまう。歳も30を越し、手動式三輪車を動かすにも疲れを感じるようになったので、ここらへんに電動車いすを使おうかという気になり、福祉事務所に出向いて電動車いすの申請をする。

1台目の電動車いすはスズキの、側面にカバーの付いたものであった。電動車いすに赤ん坊を乗せるかごを付けて、息子を乗せて走っていたが、作業所の玄関先にちょっとしたスロープがあって、電動車いすでそのスロープを上がろうとしたら、ごろんと車いすが後ろ向きに倒れてしまう。息子が後ろに乗っていたので、慌てて車いすを起こしてもらったが、息子には何の怪我もなくかごに乗っていた。ほっと一安心したことを覚えている。

### 広島で、電動車いすに乗っていた脳性まひの女性が電車にはねられて死亡する

1980年代に入って、電動車いすを使用する障がい者が増えていったが、それとともに電動車いすに乗っていて交通事故などにあうといったことも増えていく。そんな矢先に、広島青い芝の会の会員の脳性まひ者の女性が夜の踏切を渡ろうとして、踏切のレールの溝にキャスターが入り込んでしまったのか、走ってきた電車にはねられて死するという事故が起きてしまった。

この事故を知った広島青い芝の会は、現代文明が作りだした電動車いすに乗っていたばかりに電車にはねられてしまったのだ、と電動車いすを海に投げ入れるという抗議を始めた行動を行っていった。全国青い芝の会の行動綱領には「現代文明を否定する」という一項目が入っていたので、このような問題に発展していった。そして、広島青い芝の会を中心に電動車いすに乗らないようにしようという動きも表れ始めた。電動車いすに留まらずに、当時出始めたワープロやパソコンも現代文明の最たるものだと、攻撃的にしたのであった。

青い芝の会再建委員会の会議の中でこの問題が議題となって、侃々諤々（かんかんがくがく）の議論を行った。私は再建委員会の代表でもあり、電動車いすを実際に使っているので、「電動車いすを全面的に使ってならないというのは行き過ぎではないのか。普通の車いすだって現代文明が生み出したもの

だろう。ワープロが駄目で、電動和文タイプライターは良いのか。または、障がい者が普通の車いすで介助者に押してもらって街中に出れば、周りの市民が声をかけるのは決まって車いすを押している介助者である。自分ひとりで電動車いすで街中に出かければ、市民は障がいを持つ本人と対応しなければならないので、そういう意味では健常者と関わりを持つという点で大変なメリットがあるのではないか」と反論をしていった。福島の橋本君だって電動車いすを使っているので、電動車いすに乗れなくなったら大変だという気持ちもあった。

電動車いすを使わない、使うという議論は平行線のままでいった。

### 電動車いすで電車を利用するという初めての試み

妻が看護学校の休みの日であったか、私が横浜で会議があったので、妻に介助をお願いしていたのだが、何のことでもめたのか忘れてしまったが、夫婦喧嘩をしてしまった。喧嘩をした相手に車いすを押してもらうのは嫌なので、「俺一人で行くから」と啖呵を切って電動車いすで駅に向かった。電動車いすで電車を利用するには初めての経験なので、ハラハラドキドキの連続であった。駅で乗客の皆さんに声をかけて、4人の男性に電動車いすを階段の上まで持ち上げてもらって、私は手すりをつかまって階段を上がってしていく。当時は手すりにつかまれば少しは歩けていた。横浜の会議を終えて、無事に相模原の家まで帰り着くことができた。私の、電動車いすで電車に乗った話を仲間たちに話したところ、次々と電動車いすで電車を利用する障がい者が増えていった。

### キャタピラ付きの階段昇降機が登場

重度の肢体障がい者たちが電動車いすで電車を利用し始めたので、階段の上り下りを駅の職員たちが行わなければならず、腰を痛めた職員がいたのかどうか、電動車いすの上げ下げの対策を取らなければならない状況に追い込まれて、横浜駅をはじめ各駅にキャタピラ付きの階段昇降機が配置される。その昇降機に、私たちが乗ったままの電動車いすを取りつけて階段の上り下りをするという代物であった。昇降機はバッテリーが小さいため、容量が少なくて階段の途中で止まってしまうというアクシデントにも遭遇する。その後、階段の手すりの下の部分にレールを設置して、車いすのまま乗れるカゴをそのレールにはめ込んで昇降する「エスカル」という機器が普及してい

くことになる。

私たちが電動車いすで電車を利用するような運動(社会的働きかけ)があつたからこそ、駅舎などの環境整備が進み、交通バリアフリー法などの法整備も進んでいったと思っている。

#### 青い芝の会と並行して「脳性まひ者が地域で生きる会」をつくり、地域での活動を…?

青い芝の会の全国事務所の周囲には、古賀君をはじめ、故横塚晃一さんの妻の横塚りゑ(脳性まひ者)さん、川崎から越してきた在日韓国人であり脳性まひ者の金禮子さんたちが住んでいた。青い芝の会の運動(あまりにも先鋭すぎて)についていく脳性まひ者は数が限られていたので、相模原市内に住む脳性まひ者たちを掘り起こして、地域に根付いたもう少し緩やかな障がい者運動を目指していくという目的から、私、古賀君、金さんが中心となって「脳性まひ者が地域で生きる会」をつくっていった。

神奈川県青い芝の会の創始者の1人であった矢田竜司さんは、横浜市鶴見区生麦(もっと後になって移ったかも?)に「ふれあいの会」をつくり、小規模作業所を開いて、陶芸などの創作活動を行っていた。古賀君たちとそこを訪れたときに、矢田さんが「働くことを目的としない、脳性まひ者が気楽に来て様々な活動のできるこのような小規模作業所を作っていく、地域の拠点になっていくのがこれから障がい者運動の方向性かな」という言葉を聞いて、それもそうだなあ、小規模作業所を作ればいくばくかの補助金も出るらしいから、相模原にも作っていこうという気になる。東京青い芝の会系列にも「どろんこ作業所」が存在していた。

#### C P研の発足

1978年頃、厚生省が実施しようとしていた障がい者の全国実態調査に関して、青い芝の会と厚生省の間で度重なる話し合いがもたれていた。当時厚生省の更生課長であった板山賢治さんは私たちの主張・考えを良く聞いてくれた方で、前回の実態調査は障がい者団体の反対があって実施できなかつたので、今回はぜひとも実施していきたいという思いがあったのだろう。青い芝の会を含め、各団体と60回にのぼる話し合いを行っていた。最終的な青い芝の会の見解は、再建委員会の代表の私から「この実態調査にはまだ様々な問題があつて、賛成することはできないが、実力行使だけはしないで見守つ

ていく。ただし、脳性まひ者に対する施策を研究していくこと」といった内容の言葉を発して、全国障害者実態調査に関する運動には終止符を打つ。

そのような経緯があつて、東京青い芝の会と私の連係プレーで、板山課長との話し合いを積み重ねて、更生課長の私的諮問機関としての「C P研」(脳性まひ者等の全身性障害者問題研究会)が発足する。C P研では主に、脳性まひ者の実態に即した所得保障制度の確立、脳性まひ者のために不利益を被る施策の改革について研究していく。C P研の研究成果として、前述した障害基礎年金の創設や脳原生運動機能障害(脳性まひ)の障害等級を判定する内容を盛り込むことができた。

#### 青い芝の会の運動から離脱する

広島青い芝の会で電動車いすを海に捨てるという展開があつてから、私と西日本の役員たちの間に確執が生まれていった。電動車いすの問題とともに、私と東京青い芝の会のメンバーが連携して全国所得保障確立連絡会の運動を行っているのも、他の役員たちはいい気がしなかつたのかもしれない。「年金を上げても生活保護を受けければ、年金額は収入として生活保護から差し引かれるので何ら変わりがない。生活保護で十分である」との意見が出てくる。さらに、私は相模原市に脳性まひ者の活動の拠点となる小規模作業所を作ろうとしていたが、青い芝の会のメンバーたちの中には「小規模作業所は脳性まひ者等に労働を強制する場である。脳性まひ者は生きていることが労働なのである」との見解から、小規模作業所作りには反対の立場をとっている者が多かったように思う。そのような運動路線の食い違いから、青い芝の会での運動に対して急速に興味を失っていく。1981年青い芝の会全国大会で、私は全国の役員を完全に降りて、青い芝の会とは別路線の運動を歩むようになる。

#### 全国事務所を譲り受け、脳性まひ者地域作業所・くえびこを開所

青い芝の会の運動から離れて、地域に根付いた障がい者運動を展開していくためには、まず拠点づくりと財源の確保を行っていかなければならなかつた。全国青い芝の会に私の存在がいなくなることで、相模原に事務所を置いておく必要がなく、そこを引き払うという話になる。それはいい話、早速大家さんと話し合って、名義を全国青い芝の会から脳性まひ者が地域で生きる会に変えて、引き続き物件を借りることになる。全国青い芝の会ではワゴン

車を所有していて、その車もいらないというので、格安で譲っていただく。

これで、相模原市での運動の拠点と移動のための車がそろったわけだが、拠点の家賃を支払ったり、運動には諸々の経費が必要になるので、まずは運動資金を集めようということになり、東京青い芝の会と話し合い、町田駅で街頭募金活動を行っていった。相模原市内では募金活動を行っても収益が少なかったので、隣の町田駅で行ったのである。脳性まひ者が地域で生きる会のメンバーがまだ少なかったので、私と古賀君、金さんに+αの人数で募金活動を行っていたが、1回の募金活動で数万円から10万円ぐらいの資金が集まった。

古賀君が故郷の福岡に帰り、金さんが急激な二次障がいによって相模原での自立生活を断念するといったことがあったが、郡山養護学校の高等部の同級生であった栗城シゲ子さんと、栗城さんと同じ入所施設にいた殿村久子さん（やはり郡山養護学校の後輩）という脳性まひ者が私に施設を出る相談をした事がきっかけで相模原で自立することになり、相模原市内の在宅障がい者の掘り起こしの訪問活動を行って、何人かの障がい者と関係を作ることに成功する。また、相模原市には緑風園という重度障がい者の入所施設があり、その入所者とも関わりを持つことに成功する。甲斐邦博君という脳性まひ者が緑風園を出て、相模原で自立して私たちの仲間に入る。

脳性まひ者の仲間たちもだいぶ増えてきたので、脳性まひ者が地域で生きる会の活動拠点である小規模作業所を作ろうということになり、相模原市役所に申請した結果、1982年に脳性まひ者地域作業所くえびこを開所する。

ここに「くえびこ」という言葉の解説を加えておく。

「くえびこ」は漢字で久延毘古と書く。「くえびこ」とは案山子（かかし）の古い呼び名である。その他に能に出てくる蝶の化身や嘯（うそふき）としての役割もあるという。嘯の面は火吹男（ひよっとこ）の面とよく似ている。ひよっとこ踊りはあるで脳性まひ者そっくりのぎこちなさがある。そこで、私の解釈だが、一本足のかかしや嘯やひよっとこは脳性まひ者やその他の障がい者の姿を現しているように思うのである。昔むかし、日本人が狩りをしていた時代に、健常な者は狩りなどに出払ってしまった後、畑の野菜や穀物を見守っていたり、非常に大切な火を守っていたのが障がい者ではなかつたのかと推測している。大昔にはムラの中で障がい者の役割があったのではな

いだろうか。そのような私の解釈としての障がい者としての役割が現代においても必ず存在しているのだということを証明したいので、「くえびこ」という名称をつけたのである。

くえびこと同じようなものにひょっとこの存在がある。ひょっとこは「火男」がなまつたもので、かまどの神である。また、ひょっとこの踊りは、口をとがらかし身体をぎくしゃくして踊るので、まるで脳性まひ者である。くえびこもひょっとこも障がい者との関連があるように思われる。そのような意味合いを持って、作業所名として「くえびこ」を選んだのである。現代社会においても障がい者の役割があるのでということを市民に知らしめていくためにも。

#### 八王子に「自立ホーム」というケア付き住宅が建設される

八王子自立ホームは1981年にオープンした。開所式には私も出席することができた。施設長には東京青い芝の会の事務局長だった磯部真教さんが就く。東京青い芝の会とその他の障がい者たちが10年に及ぶ運動を続けてようやく作られたものであった。八王子自立ホームは定員が20名で、隣に通所授産施設が併設され、日中は授産施設に行って軽作業などをを行う。自立ホームは入所者全員が個室対応で、1室のスペースはだいぶ広く感じたのでたぶん20畳ぐらいあつたろうか。天井にはホイストというリフトが吊るされていて、ベッド、車いす、トイレの移乗が容易にできる。また、リモコン操作で電灯やカーテンの開け閉めができるようになっていた。お風呂は室外にあって、全部で7風呂備えられていた。入所者の障がい程度や状態によって一番使いやすいお風呂を利用できるようにという工夫がされている。入所者（利用者）にとっては至れり尽くせりのケア付き住宅であった。磯部施設長に「ずいぶん立派なケア付き住宅ですね」と言えば、「白石君も神奈川に作ったらどうか。我々が10年かかって作ったのだから、やる気になれば神奈川には5年でケア付き住宅ができるだろう。頑張ってつくってみたら」と言われて、その気になったのであった。

#### くえびこ軌道に乗って、毎日忙しく動き回る

脳性まひ者地域作業所くえびこは、口コミから開所以来利用者がだんだん増えていて、10畳ぐらいの板の間の真ん中にテーブルを繋いで置いて、その両側に利用者が座る（車いすから降りる）形で狭いスペースに大勢の利

用者で、いつもワイワイガヤガヤ楽しくやっていた。湯本（旧姓安藤）久美子さんという若い職員が来たので、みんな元気が出たのかな？この頃か、臨時職員として郡山から藤橋秀一君（写真家、この記念誌の編集をお手伝いしていただけ）を呼んで、しばらくの間くえびこで働いていただいた。この時期が私にとっては一番充実していて、一番忙しかったのではないだろうか。1ヶ月のうち半分は会議などで東京や横浜に出かけていた。所保連などの会議は夕方、新宿の戸山町で行われて、相模原の我が家に帰るのは夜の10時か11時ごろになっていた。

#### 飲み屋「ぼけや」の主人・石井義幸さんと出逢い、絵本が発行される

町田駅前にて、みんなで募金活動をしていた時、石井さん親子が通りかかったそうだ。石井さんの娘さんが募金をして、私たちのチラシを受け取ったのだが、石井さんがそのチラシに載っていたくえびこの住所宛てに、自分の経営する飲み屋「ぼけや」の生ビールが安くなるという案内のはがきを出したのであった。夏の暑い時期だったので、生ビールが飲みたい一心で仲間たちと「ぼけや」に向いた。そのようなきさつから私と石井義幸さんのお付き合いが始まる。石井さんの奥さんが子ども向けに「お日さま文庫」を開いていて、絵本がたくさん棚に並んでいた。暇なときに時々「お日さま文庫」にお邪魔して絵本を見ていたら、石井さんが「絵本を見るのもいいが、自分で作るのもいいのでは」と諭されて、俄然その気になって息子を電動車いすに乗せて保育園まで送っていく情景を文章にまとめて、石井さんの所に持っていく。石井さんも行動力のある方で、私が作った原稿を、知り合いの絵本作家の西村繁男さんに見せに行くという。西村さんがその原稿を持って絵本の出版社の福音館書店に出向いて相談した結果、絵本「おとうさんといっしょに ほいくえんにいく」が発行されることになる。どんどん拍子で事が進んで、キツネにだまされたような心境であった。

石井さんは私たちの行っている運動に対して、第三者的に率直に意見してくれるので、私にとっては本当に良い理解者であり、アドバイザー的存在であった。

#### 日米障害者自立生活セミナーの開催

1977年に青い芝の会でバス乗車拒否に対する抗議行動を行っていったが、アメリカでも同時期にバス問題に対して実力行動を取っていったという

話は聞いていた。アメリカの障がい者関係の詳しい情報が入るようになったのは1980年代になってからのことであった。ミスターードーナツによる障がい者の海外研修が始まって、どんどん海外の障がい者に関する情報が入るようになつたのではないか。そして、アメリカで盛んに発展してきている自立生活センター（CIL）の情報を日本の障がい者たちに知らしめて行くためのセミナーを全国各地で開催していくという運びになって、神奈川で開催していく担当が私になる。この準備の会議に出席するのも忙しかった。

そして、1983年に東京、神奈川、静岡、名古屋、京都、福岡で「日米障害者自立生活セミナー」が開催された。これを機に、我が国にも自立生活センターを作っていくという機運が盛り上がり、1986年に我が国最初の自立生活センター「ヒューマンケア協会」という自立生活センターが東京の八王子に産声を上げたのである。

#### 神奈川県全身性障害者団体連絡会ができる

1983年、神奈川の横浜で行われた日米障害者自立生活セミナーを契機に神奈川県内の脳性まひ者や頸椎損傷者たちが集まって交流ができ始める。私と同年代の厚木市の玉井明君、横須賀市のたけのこ会の川島君、鈴木治郎君、少し若手の安楽君、内海君たちとの関わりが生まれ、1987年まで毎年、神奈川県の援助を受けて「神奈川県障害者自立生活セミナー」を開催していく。また、全身性障がい者たちの要望をまとめて、神奈川県との話し合いなども続けていく。神奈川にケア付き住宅を作っていくことをみんなに了解を得て、機会あるごとに神奈川県などに提起していく。

#### 健常者との人間関係がうまくできる神奈川の土壌？

秋田の地(福島でも)では考えられないほど、神奈川県や相模原市の職員や、社協(社会福祉協議会)の職員や県立リハビリテーションセンターの職員たちと良くお付き合いしていた。職員たちは良く飲みに行っていた。相模原市では課長や部長とも飲み屋に行ったこともあった。お酒を飲んで仲良くなつて、人間関係を作っていくことを身体で覚える。このような関係があったから、ケア付き住宅も実現できたのかも知れない。社協の職員たちは私たちの行事や合宿研修などに積極的に参加していた。福島県内ではとても考えられない市民や県民との関わりを大事にしていく社協マンの姿があった。このような関係が作られるのは、神奈川県民性からくるものなのか、または、神奈

川青い芝の会による運動があったからなのか、判断は難しいが、どちらの関係もあるのだろうか。

#### 相模原にケア付き住宅「シャローム」が作られる

神奈川県や相模原市に対して、機会があるごとにケア付き住宅の必要性を説いていった甲斐があって、神奈川県と相模原市に「ケア付き住宅検討委員会」が立ち上がる。どちらの検討委員会にも私が委員として入ることができた。検討委員会で討議していった結果、神奈川版ケア付き住宅は東京のように規模が大きなものではなく（小規模施設化につながるので）、最大でも入居者は5人とすることに決まる。

そして、とうとう1986年に相模原市にケア付き住宅「シャローム」を作ることに成功する。ケア付き住宅を作る際にも、絵本ができあがる時と同じような不思議な巡り合わせがあった。神奈川県のケア付き住宅試行事業がスタートしたが、ケア付き住宅になるような物件がなければ事業ができない。どうしたら良いのか悩んでいれば、くえびこの利用者が通っていたキリスト教会の牧師さんの弟さんがアパートを建てるが、障がい者にも利用できるアパートにしたいという。牧師さん、牧師の弟さんを交えて話し合った結果、1階部分をケア付き住宅、2階部分は普通のアパートにして建てていくことに決まる。

ケア付き住宅シャロームは10畳の和室と洋室がそれぞれ2部屋ずつあり、4名の障がい者が最小限のプライバシーを守って住めるようになっている。トイレが2ヶ所、キッチン、ダイニング、お風呂は共同で使用する。2階のアパートの一室を、入居者の介助をコーディネートする職員の待機室として利用している。ケア付き住宅「シャローム」はそこで一生を過ごすのではなく、あくまでも自立生活のワンステップとして活用し、本格的に自立する力がついた段階で、次のステップ（アパートなどを借りて）に進んでいくシステムを取っている。シャロームを卒業して、相模原市内やその近辺で自立している障がい者は20名位にはなっているかもしれない。また、相模原には緑風園という入所施設があって、そこに入所していた者が何名かシャロームを利用して地域に自立を果たしている。入所施設から地域に移行を果たす時に、入所者に安心感を与えるために、シャロームに入居しても3ヶ月間は施設に籍を置いておいて、もしシャロームでの生活が難しい場合は施設に舞い

戻ることができるよう神奈川県との間で約束する。30年も前に施設から地域へという地域移行システムを作りだしていたのだ、と今になって我ながら驚いている。

#### 所保連から自立連へ

全国所得保障確立連絡会（所保連）の運動も佳境に入つていって、1984年には当時大蔵大臣であった故竹下登さんにもお会いして要望書を提出する。選挙が間近に迫つてくれれば、各候補者の選挙事務所を回つて、「幼い時からの障がい者の成人後の所得保障の確立」を訴えた。そして、国会で障がい者の所得保障について各議員による質問があれば、国会傍聴に出向いていった。

あらゆる手を尽くして所保連の活動は続けられた。元宮城県知事の浅野史郎さんが厚生省年金局年金課課長補佐の時に、私たちと話し合いを重ねていた。障害基礎年金を創設する上で、浅野さんの働きかけも大きかったのではないかと思っている。このように幅広い所保連の運動が実つて、1986年に国民年金の中に障害基礎年金が創設されたのであった。

1984年、所保連の運動が一段落してから東京青い芝の会、脳性まひ者が地域で生きる会、福島の橋本君や角野さんたちと共に自立連（全国障害者自立生活確立連絡会）という組織を作り、障がい者の自立生活を確立させる運動を展開する。

#### 施設費用徴収制度に対する自立連の働きかけ

1986年に厚生省は障害者の施設費用徴収制を導入するが、その内容は、本人からの徴収とは別に親などの扶養義務者からも徴収するという案であった。このような厚生省の始めようとしている施設の費用徴収は、入所者の自立性を尊重するなら、本人のみの収入から徴収するべきであるとの見解を自立連では主張して、全国の仲間たちとともに運動の連携を求めていく。私も様々な団体や施設を回つて、共闘の呼びかけをしていく。九州の施設にも訪ねていった。しかし、施設入所者やその他の団体の中には、「施設入所者から費用を徴収するのはおかしい。施設入所者たちは本来、地域での自立生活すべきなのに、社会の在り方によって捻じ曲げられた施設生活を余儀なくされている。その者からの徴収はるべきではない」という論理であった。それに対して、自立連では「障がい者が地域で自立生活を営んでいけば、家賃や光熱費などは自分で支払わなければいけない。施設で費用がかからない生活を

送っていると、そこで生活で満足してしまうことも起こりえる。地域に住むのと同じように費用を徴収すれば、施設での縛られた生活より地域での自立生活のほうが良いと思う者が出でてくるのではないか」という論理で説得を試みていく。そして、全国の仲間たちとともに「障碍者を大きな赤ん坊にするな」というスローガンのもと、厚生省に対して度重なる抗議行動を行っていった。その結果、1年間で費用徴収制度から扶養義務者の親や子を外させることに成功したのであった。

#### 「障害」の害の字を「碍」に変える運動

自立連の機関誌の表面を飾ったのは「碍」という字であった。自立連では、組織内部の理論化を図っていこうという目的で度重なる合宿研修会を開催していく。その研修会の中で、仲間たちで確かめ合ったひとつが、「障害」という表記を「障碍」に変えていくものであった。

障害者を直訳すれば、「差し障りがあって害となる者」となり、まるで障がいをもつ者が「悪い」というようなイメージを受ける。公害、薬害、害虫など、害はよくないイメージの漢字である。一方、障碍者を使うとどうなるか。碍は電柱などに取り付けられている、電気を遮断する白い瀬戸物の碍子の碍である。遮断しているという意味を、壁があって通り抜けることができないと読み替えてよいのではないだろうか。障碍者は、建物や道路などの環境、交通機関、情報、意識の壁（社会的障壁＝碍）があるために、社会での生活に差し障りがある者、というようになる。障碍者を使ったほうが断然よいイメージを持つ。障がい者は社会の害悪ではない。社会の一員として障がい者は生きているのだというメッセージを社会に発信していくために、自立連は「障碍者」を使っていったのである。

1989年、私は、生まれ故郷である福島県郡山市に戻り、むかし障がい者運動と共に歩いていた仲間たちと活動を再開していく。郡山の地でも、私は「障碍者」を使っていたのだが、その行為に郡山市社会福祉協議会の職員が興味を示し始め、社協での印刷物に「障がい者」と、害の字をひらがなにして使うようになる。そして、「障がい者」を使う風潮が広がりをみせていく、近年、福島県の行政出版物に「障がい者」を使うようになっていく。県の行政出版物に「障がい者」が使われるのは、全国都道府県の中で福島県が初めてのことだそうだ。ただし、碍は当用漢字の中には入っていない。だから、郡山市

社協でも、福島県でも「障碍者」を使うことができず、「障がい者」を使ったのであると思う。当用漢字の中に「碍」という漢字を入れれば、問題はすぐに解決できると思う。ちなみに、文豪であった夏目漱石が小説の中で「障碍」を使っている。昔の書物を見ると「障碍」という文字が良く出てくる。韓国では「障碍」を使っている。

#### 横浜の脳性まひの女性が年金の返還を求められて、横浜市庁に泊り込み

記憶が曖昧になっているが、横浜に住む脳性まひの女性が年金額を多く受給していて、そのことを良く知らないで生活費に回して使っていたが、ある時、横浜市から多く支給していた年金額（百数十万程度と記憶しているか…）を返してほしいという通知を受け取ったのであった。今更返してほしいと言われても、返すお金がないのでどうしたら良いものかと、自立連の会員に相談に来たことがきっかけで、この問題を放置することはできないとして、自立連として横浜市と話し合いを持っていく。「年金額を確かめないで支給していたのは行政側であって、いまさら全額返してほしいというのは行政の責任を考えるならおかしい」と、我々は激しく抗議したが、横浜市も一歩も引かないで、とうとう夜がきてしまう。我々と横浜市による話し合いは断続的に夜中まで持たれる。自立連のメンバーは横浜市庁に泊り込むことになる。

翌日の午前中も代表団と横浜市職員との話し合いが続けられて、後日にもう一度話し合おうということになり、一泊二日による横浜市庁抗議行動は終了していく。

この運動の結果、横浜市に住む脳性まひの女性は、確かに数万円程度の返納で済んだと記憶している。

#### 相模原市にCIL的なセンターを作ろうと設立委員会を立ち上げるが

1983年に日米障害者自立生活セミナーを開催してから、1988年まで毎年「神奈川障害者自立生活セミナー」を開催（報告書も毎年発行）していく、CIL（自立生活センター）を神奈川県内に作っていこうという機運が広がりをみせていく。1986年には東京の八王子市に我が国初のCILが作られたことによって、相模原市にも障がい者自らが運営して、障がい者に様々なサービスを提供していくセンターを作っていくという目論見を持って、専門的な先生にも入っていただきて設立委員会を立ち上げて話し合いを続けていった。

### 東京青い芝の会の方向性に疑問を持ち始め、急激に障がい者運動の熱が冷める

八王子に自立ホームを作った東京青い芝の会の運動の方向性は効率性の良い(職員の配置等)入所施設を作ることにシフトし始めていく。八王子自立ホームの規模では効率性が悪いので、もう少し規模の大きな施設建設を計画していた。このような東京青い芝の会の運動の方向性に対し疑問を持ち始める。地域で生活していこうというCILなどの活動に私は惹かれていたので、なんていまさら施設作りを推し進めなければならないのだと、東京青い芝の会の運動に興味を失う。東京青い芝の会の事務局で活躍していた郡山養護学校の後輩である大森君が、運動に疲れを感じていて、東京青い芝の会を辞めたいと、私に相談してきた。私も東京青い芝の会にはちょっと疑問を感じていたので、2人で自立連を辞めようということに話が進んでいく。さらに、郡山の実家を大幅に改造すると両親が言うので、この際だから、郡山に戻って両親と暮らすのも一つの選択肢だなと思うようになる。このような事情があって、障がい者運動そのものに興味を失っていった。

### 郡山へUターン

#### 妻とともにUターンの準備を進める

郡山へUターンすることを決めて、その準備に入っていく。まずは、脳性まひ者が地域で生きる会と脳性まひ者地域作業所「くえびこ」を誰かに引き継いでもらわなければならないので、郡山養護学校高等部の同級生であった栗城さんに頼んだ。栗城さんは始め難色を示していたが、私の度重なるお願いにOKをしてくれる。栗城さんは現在も相模原市で「くえびこ」を維持して頑張っている。次に、自立連の役員を辞めることであった。自立連の役員会の折、私と大森君は自立連の役員を降りることを承認してもらう。これも何とかOKしていただく。相模原に自立生活センターを作る計画も、検討委員会をたたんと白紙に戻すことになる。

郡山へUターンしても、福島では障がい者運動をしていく気は全くなく、郡山での生活をどうしていくかを妻と話し合った。妻は、看護師の仕事でない仕事に就きたいと言っていたので、相模原市で付き合いを深めていた車いす販売のNicKの太田さんという方に相談して、郡山で車いす等福祉機器の

販売を行っていこうということになる。妻は何ヶ月間かNicKで研修を積んでいく。

#### 郡山へUターン

1989年(平成元年)の夏、私たち家族は無事に郡山市の実家に戻ってくる。家は改造されており、1階に私たち家族が住み、2階に両親が住むように2階にも台所を設置して、2世帯住宅のような構造にした。

まず、福祉機器販売業をするにあたって会社法人を設立しなくてはならず、有限会社「ami」を設立する。そして、当時福島県内には90市町村あったが、福祉機器販売の認可を取るために、そのほとんどの市町村を回っていく。妻が運転して、私が助手席に乗って朝から夕方まで福島県内を走りまわっていた。行政と、病院関係、リハビリ施設を区分けして(郡山近辺、福島方面、会津方面、白河方面)毎日営業に出かけていた。

#### 橋本君の生活は

平日は毎日のように営業活動に出かけていたので、土曜日や日曜日に時々橋本君宅に出かける。昔の仲間の吉田強君や岡部和之君、佐藤孝男君などが集まり、飲んで騒いでいた。橋本君は何か問題があったのか、うつみね作業所を辞めて、自分の家で何も活動を行わずにくすぶっていた。吉田強君も岡部和之君も橋本君と似たような生活を送っていた。佐藤孝男君は健気にも妻の久美子さんとうつみね作業所に通っていた。

#### NicKニュースを作り、橋本君に電話番を頼む

営業個所を回っていくときに、ただ回っているだけでは能がないので、障がい者福祉情報を載せたニュースを作っていくことになって、ワープロで打って、ニュース(B5版の両面)を発行して営業先に配っていった。ニュース配りがどれほどの効果があったかは知らないが、だんだんと車いす等の注文がくるようになる。

私たちが営業に回って留守の時に車いすなどの注文の相談が電話でくるようになり、その対応をおふくろにお願いしていたが、うまく対応ができないこともあったので、家でくすぶってる橋本君を借り出して、私の家で電話番をお願いすることになる。微々たる手当を支払っていたような記憶がある。

#### 私が電話番をするようになり、グループ・らせんを立ち上げる

有限会社amiの経営も何とか軌道に乗っていくことになり、私が妻と同行

して営業回りをしてもあまり意味が無くなり、私は家に残って電話番やニュース作りをすることになる。しかし、電話番だけでは暇なので、橋本君や岡部君と話し合ってちょっとしたグループを作つてちょぼちょぼと活動していくかということになり、文化と福祉をつなぐグループ・らせんを結成していく。らせんの活動としては、文化・福祉情報誌を発行したり、ちょっとした資金集めに、駅前の街頭で作業所から仕入れたジャムや情報誌を販売していく。またグループ・らせんのメンバーを集めようと、郡山養護学校卒業の同窓生にも声をかけていく。現在、郡山養護学校同窓会の事務局長を務めている橋本弘子さんがグループの会員となる。私の原稿が載っている「自立生活への道」(仲村 優一・板山 賢治 編、全国社会福祉協議会発行)を読んだと言つて、川内村から秋元典夫さんという脳性まひの方が郡山で自立生活をしたいと橋本宅を訪ねてくる。まあ、一緒にやっていこうということで、典夫さんが郡山に来た時点でグループの一員となる。

グループ・らせんで発行していた文化・福祉情報誌に当時の郡山市長であった青木さんを訪ねてインタビューしたこと也有った(インタビュアーは橋本弘子さん)。しかし資金難からその情報誌は発行できなかつた。

#### パーフェクトバスを走らせる集会に山形まで出かけて

1990年の秋だと記憶しているが、山形で車いすのまま乗れるバスを全国的に普及させていこうという「パーフェクトバスを走らせる集会」が山形で開催されるという情報があつたので、グループ・らせんのメンバーらで行ってみようということになる。集会には京都のJCIL(日本自立生活センター)の長橋さんや矢吹さんらが来ていた。矢吹さんは若い頃に、東北の青い芝の会関係で知り合つた、山形のサークルきどうの代表であつた方である。また、外国の講師の方の通訳をしていたのが齊藤明子さんという元JIL(全国自立生活センター協議会)の事務局をされていた方であつた。長橋さん、矢吹さん、齊藤さんに「福島に東北初の自立生活センターを設立してほしい」と言われる。長橋さんの故郷は郡山で、その後何回か郡山を訪れる。

#### JILの末席に未来会員として登録する

その後、たびたび齊藤明子さんから自立生活センターへの誘いかけがあり、1991年の11月にJILの結成総会の連絡が届いたので、ちょっと行ってみようかと軽い気持ちで橋本君と岡部和之君とで参加したのだが、みんなに是非

ともJILの会員になつてくれとお願いされて、そんな気はさらさらなかつたのだが事の成り行き上JILの未来会員として登録することになる。

#### グループ・らせんで「まちづくりシンポジウム」を開催していく

郡山市内の障がい者福祉関係の団体(行政や社協等も)を巻き込んだ形で、まちづくりに関するシンポジウムを開催していく。シンポジウムは1991年から毎年開催して4年間続いたのであつた。このシンポジウムの開催により、行政や社協や日本大学工学部の佐藤平先生、松井壽則先生や学生さんたち、郡山女子大学の故小坂和夫先生や女子学生たち、その他の団体との付き合いができていつた。また、各方面からシンポジウムの助言者(講演をいただく)として、放送大学教授の三ツ木任一さん、東北福祉大学の原鉄哉先生、八王子の「第一若駒の家」の渡辺啓二さん、筑波技術短期大学の萩田秋雄先生などに、遠いところから来ていただいてご協力をいただいた。

#### シンポジウム開催から「の一む塾」が生まれる

シンポジウムの開催を通して、日本大学工学部と郡山女子大学の先生や学生さんたちとの関わりができるので、この関係を継続したものにしていきたいという思いから、当時郡山女子大学の助教授であった故小坂和夫先生と話し合つた結果、月に一度学習会を行つていこうということになる。小坂先生をはじめ仙台の原先生、日本大学工学部の佐藤先生の息子さんの佐藤篤史先生、日本大学工学部と郡山女子大学の学生さんたち、それに私たち障がい者の面々が集い、学習会を続けていく。多い時では30名ぐらいの人たちが集まつてきていた。学習会だけでは関係性がなかなか深まらないので、学習会を早めに切り上げて、そのあとで飲み会を行つていこうということになり、それが定例化していく。学習会の名称は、「ノーマライゼーション」と「酒を飲む」をかけて「の一む塾」となる。の一む塾の世話人的存在の小坂先生は何らかの事情で郡山女子大学を辞められてしまう。そして、風のうわさで亡くなつたことを知る。私たちと学生さんたちの交流の輪を積極的につけてくれた故小坂先生には大変お世話になつた。おしい人を亡くしてしまつたものである。

の一む塾を通じて、大勢の学生さんにグループ・らせんの活動をお手伝いしていただいたり、日本大学工学部の建物に関する調査研究に対して、電動車いすでの協力を行つたり、持ちつ持たれつの関係ができていつた。しかし

小坂先生が亡くなったのをきっかけに、の一む塾は徐々に戻すぼみの状態になっていた。

#### 小規模作業所 Work・IL を開所して、その中にオフィス IL を設けていく

JIL(全国自立生活センター協議会)の事務局員であった斎藤明子さんからグループ・らせんを少しずつ自立生活センターの活動を行えるように整備していったらという意見をいただいて、じゃあこちらへんで自立生活センターの活動拠点を設けていこうという話し合いがもたれた。しかし、先立つお金がないし、継続した活動を行うには誰かの家では難しいし、いろいろ考えたうえ、まず、行政の補助を得て小規模作業所を立ち上げて、その中に自立生活センター準備室を設けていこうということになり、小規模作業所開所の準備を進めていく。私、橋本君、岡部和之君、秋元典夫さんが1人30万円ずつ出し合って開所準備資金とした。それから、小規模作業所に通う障がい者を集めなければならなかった。私たち4人+何人かの利用者がいなければならぬので、あらゆる方面に声をかけて、1人、2人と仲間を増やしていく努力をした。

当時の小規模作業所の認可の条件として最低1年間の実績がなければならなかったので、1993年に物件を借りて、会津の短期大学を卒業した若い女性のスタッフを雇ったのであるが、私はまだ有限会社amiの電話番をしていなければならなかつたので、橋本君に事務所番を頼んでおいたら、そのスタッフが橋本君と気が合わなかつたのか、2ヶ月ぐらいで辞めてしまうというアクシデントが起こったこともあった。さんざんの苦労の結果、小規模作業所Work・ILを立ち上げて、その中にオフィス IL 準備室を設けていく。そして、1994年に小規模作業所 Work・IL とオフィス IL を正式に開所していく。開所式にはその当時 JIL の事務局で働いていた斎藤明子さんを呼んで記念講演を行った。

#### 行政関係との関係づくりに力を入れる

相模原時代には、福祉行政関係者との関わりをうまく作ってきたという経緯が私にはあったので、郡山や福島県でもきっとうまくいくだろうという自信があり、まずは行政職員との関係を密にしていくという目的から、月に1度は福島県の障がい福祉課へ、月に2度は郡山市の障がい福祉課へ足を向けようという目標を作って橋本君とともに行政には足しげく通つていったも

のだ。そして、行政職員に私たちの顔を覚えてもらって、その次の段階では割り勘で飲みに行くまでの関係を作っていくことができた。このような行動があつて、徐々に私たちの活動が行政に認められるようになってきたのであると、私は思つている。

#### オフィス IL として介助サービスを開始

JIL(全国自立生活センター協議会)の一員としてのオフィス IL なので、自立生活センターとして障がい者(利用者)に対してサービスを提供していくなければならないので、みんなで協議していった結果、年金などの少ない収入から介助料を支払つて、介助サービスを受けていくというシステムを作つていく。当初は1時間600円の介助料を利用者である障がい者が支払い、事務手数料として100円がオフィス IL へ、残りの500円が介助者の手元に入るというものであった。介助サービスを始めたばかりは1ヶ月50時間のサービスであった。ちょうどその頃、Work・IL に24時間テレビからリフト車が寄贈されたので、その車を有効活用していこうと、Work・IL の休みの土曜日、日曜日に「太陽の国」などの施設入所者が外出するときに運転手と介助者付きの移送サービスも行つようになっていく。

#### 12月の寒い中、みんなで出稼ぎ募金活動

一応、小規模作業所の補助を受ける形にはなつたが、活動資金は捻出することはできないので、何かいい方法がないかと考えて、関東での募金活動を行つたらどうかと思い付く。郡山での募金活動では資金集めに何倍もの時間と労力がかかつてしまふので、もっと効率のよい資金集めを考えた次第である。町田市にある CIL 町田ヒューマンネットワークの樋口さんと神奈川の鎌倉に住む安楽光生君(私の知り合いで脳性まひ)に頼んで道路使用許可証を警察から取つていただき、12月のクリスマスを挟んだ1週間から10日間、町田の駅前と鎌倉の駅前で街頭募金活動を行つていく。郡山から寝袋を積んだ電動車いすの出稼ぎ隊5~6名で出かけていった。そして、毎日午前10時から午後の5時過ぎまで町田と鎌倉駅前で、時には雪の舞い散る寒い中、大声を張り上げ続けて募金を求めた。その甲斐があつて、最高記録は町田駅前で1日に25万円の募金が集まつた。クリスマス前後の募金はいい狙い目であった。出稼ぎ隊の泊まる場所であるが、町田ヒューマンネットワークの事務所、安楽君のお家、くえびこ作業所、鈴木治郎君が所長を務めていた通

所授産施設、知り合いの方が施設長の知的障がい者の入所施設を転々としていた。長い期間にわたって同じ場所に泊まるとご迷惑をかけるので、細切れに泊まり歩いたのである。この、出稼ぎ募金活動は3年間にわたって行なわれたと思うが、ちょっと記憶があやふやである。大勢の皆さんのがんばり協力によって行われた出稼ぎ募金活動のおかげで、このような大きな組織のあいえるの会に成長することができたのである。みなさんに感謝、感謝。

#### JIL の地方ネットワーク委員会の一員として活動

オフィス IL がぼちぼちであるが活動をし始めると、JIL からの活動の呼び出しが来はじめる。JIL にはピアカン委員会、人権委員会などいくつかの委員会があり、新しく地方ネットワーク委員会ができるので、ぜひその委員会に入ってほしいという依頼がある。これも成り行きだからと思い、地方ネットワーク委員会に入ることにする。地方ネットワークのメンバーは埼玉の糸賀さん(故人)が委員長で、八王子の若駒の家の大須賀さん(故人)、仙台たすけっとの杉山君、JIL の事務局であった斎藤明子さん、私と、その他に1~2名いたと思う。仙台のたすけっとはオフィス IL ができて1年後にオープンした。地方ネットワーク委員会では、これから自立生活センターを作る団体に活用していただくためのマニュアル本の制作、自立生活センターを作ったが運営がうまくいかない所やこれから自立生活センターを作っていくこうとしている団体を回っていく相談活動等を行っていた。岩手や秋田、山形なども回った記憶がある。地方ネットワーク委員会は、大須賀さんが体調を崩したり、斎藤さんが JIL の事務局を辞めたり、糸賀さんが亡くなったりで、自然消滅してしまった。

#### 福島県障害者自立生活センター支援事業が始まり、Work・IL とオフィス IL が分かれる

1995年、前福島県知事の佐藤栄佐久さんの鶴の一声で福島県障害者自立生活センター支援事業という制度ができあがった。この制度の設立は私たちにとって寝耳に水の驚きであった。福島県内の小規模作業所の補助と同程度の補助ではあったが、自治体から自立生活センターへ直接の補助は全国で初めてのことだったので、みんなで狂喜した。私や橋本君の郡山養護学校の後輩であった桑名敦子さんが、当時アメリカ、バークレーにある CIL の代表であったマイケル・ウィンターさんと結婚していく、佐藤栄佐久さんがバークレー

の2人を訪問したという経緯があって、私たちの活動もあり自立生活センターの支援事業が作られたのだろう。

オフィス IL に対して補助金がおりることになり、1つの場所に小規模作業所と自立生活センターが入って、それぞれに補助対象になるので、オフィス IL と Work・IL は離れてほしいという行政からの連絡が入り、1995年に自立生活センターと小規模作業所は分かれていった。オフィス IL は水道局の脇のボロい一軒家に移って事業を展開するようになる。

#### 飯田(旧姓安藤)しのぶさん、湊(旧姓鈴木)久美子さん 2名の女性職員の支えがあつて

Work・IL の代表に橋本君が、オフィス IL の所長に私が就いて小規模作業所と自立生活センターとしてそれぞれに活動や事業を行うようになるが、そのどちらにもそれぞれ適した女性の職員が配置されていたのである。天が必然的に招いたとしか思えない職員たちであった。

Work・IL の職員であった飯田(旧姓安藤)しのぶさんはとっても行動的で、代表の橋本君にいつもはっぱをかけていたようだ。しのぶさんはまた、思考範囲が広く、障がい者福祉にとどまらずに環境問題などにも自ら参加していくタイプであった。Work・IL が中心となってネットワーク地球村の高木さんを呼んで講演会を開催したり、当時福島大学の教授であった飯田史彦さんを招いての講演会も開催していった。しのぶさんのバイタリティーがあったから、障がい者福祉を超えた先駆的なイベントができたと今でも感心している。そのような関係から、岡部聰君の奥様になった文恵さんや、地球村でアフガニスタン支援に行った植木君などとの付き合いができるしていく。また、Work・IL では月に1度は必ずみんなを集めての飲み会を行っていた。しのぶさんもアルコールは強いほうで、みんなと和気あいあい酔っぱらって楽しく騒いでいたのを懐かしく思い出す。しのぶさんは1999年に結婚して東京に行かれる。

一方、オフィス IL の職員であった湊(旧姓鈴木)久美子さんは福島市に住んでいて、福島の角野さんたちと面識があって、オフィス IL の職員になっていただいたのであった。久美子さんは幼い頃に私たちの募金活動に遭遇して、角野さんから足でチラシを渡されたことをかすかに覚えていると言っていた。私たちと関わる運命にあったのか。久美子さんは美人であった。久美子さん

の顔を見ようと障がい者の男性（中には健常の男性も）がオフィス IL に入りしていたようだ。気功体操の我孫子さんが「オフィス IL を訪ねたとき、ボロい事務所にむさ苦しい男性の障がい者がごろごろしていて、その中に1人はきだめに鶴のような女性がいたが、それが久美子さんだった」と言っていた。ま、それはさておき、久美子さんの仕事ぶりはてきぱきと事務整理をしていた。久美子さんは一時オフィス IL を辞めて、彼氏と北海道にバイトの仕事をしに行っていたが、オフィス IL の職員に欠員が生じて、また舞い戻って（鶴だから？）きて、1996年までオフィス IL の職員を勤めた。

#### 岡部聰君、ボランティアとして関わってくる

1995年に阪神淡路大震災が起こり、郡山からもハートネットという災害ボランティア団体を通して誰か救援に派遣しようということになり、Work・ILの職員のしのぶさんが行くことになる。6月頃か、しのぶさんが兵庫に向かう車中で、現在あいえるの会の事務局長に就いている岡部聰君に会ったのであった。そして、聰君を Work・IL の飲み会に誘ったのである。それが運のつき、その後、聰君は毎日のようにオフィス IL に顔を出すようになる。バイトで家庭教師をしていたと聞いていたが、生活費はどうしていたのだろう？ J I L の用事で私が東京などに出かけるときに、聰君が付き添いをすることが多かった。

#### 気功体操の我孫子礼子さんとの出会い

Work・IL でバザーを行うのであちこちの家にチラシをまいていて、そのチラシを見たと言って、バザー用品をオフィス IL に持ってきたのが我孫子礼子さんであった。我孫子さんはその頃気功体操を習い始めていて、岡部聰君と同じように、ちよくちよくオフィス IL に顔を出すようになる。オフィス IL ではちょうど、介助サービスの提供を行い始めたところで、早速我孫子さんに介助者になっていただく。七海稔君や岡部和之君の食事作りの介助などを行っていた。また、私は二次障がいが出始めていて、首や肩が痛くて仕方がない状態が続いていたので、我孫子さんに桑の葉を使ったお灸やマッサージなどの施術をしていただいていた。そのような縁（腐れ縁か）から今でも、我孫子さんに来ていただいて、脳性まひ者らの二次障がい予防を兼ねた健康維持のための気功体操教室をわーく IL のメンバーを中心に毎週金曜日行っている。

#### 福障連（福島県全身性障がい者等連絡会）の結成

年代的に前後しているが、小規模作業所 Work・IL の物件も借りて、活動の拠点づくりが進んできたこともあり、福島県内の全身性障がい者団体の横のつながりを密にしていく、私たちの要望を福島県等の行政に要望していくために団体を作っていくことになり、1993年に福障連を立ち上げた。福障連の構成団体は、私たちのグループ、うつみねの会、角野さんが率いる障がい者が地域で生きる会、会津のピーターパン作業所、いわきのグループであった。福障連では毎年合宿を行って仲間意識を培っていった。

#### FIL（福島県自立生活センター協議会）の結成

福島県障害者自立生活センター支援事業が創設されたのをきっかけに、福島県内の各団体はこぞって自立生活センター設立を目指していく。そして、福島市、いわき市、船引町（現田村市）、会津若松市に次々と自立生活センターが作られていった。300万円の僅かな補助ではあったが、職員を1人雇うぐらいの体制ができるので、各団体はそれに賭けたのであった。全国的に見ても福島県は自立生活センターの多い自治体の1つになっている。1997年、福島県内の自立生活センターが集い、FILを結成していく。

#### 郡山市障がい福祉課長の角田さんと当時係長であった野口さんとの関わり

オフィス IL の活動が軌道に乗っていくにつれて、ごくせまい福祉の分野でだが、認知度が上がっていった。私たちは郡山市役所の障がい福祉課にもなるべく多く顔を出すようにしていた。以前は、機関誌はなまるを毎月発行していて、各方面へ手渡しで持っていくようにしていた。そのようなこともあって、当時の障がい福祉課の課長であった角田ミキ子さん（現在あいえるの会理事）とも関係ができて、私たちの話を良く聞いていただいた。

いつだったか定かではないが、J I L の用事で東京に行った時のこと、J I L の重鎮の中西さんと話す機会があり、中西さんが「市町村障害者生活支援事業というものができるので、それをオフィス IL で取ればいいよ。郡山市に良く話してみれば」と言われ、東京から帰って、早速障がい福祉課に向いて、角田さんに市町村障害者生活支援事業をオフィス IL で受けたいのだが、と相談を持ちかける。それを聞いた角田さんは、俄然やる気になったのか、予算の査定の時には市長室に行って、市長に直談判をしてまで頑張りぬいて市町村障害者生活支援事業をオフィス IL に受けさせるまでこぎつけ

たというエピソードを後になって本人から聞く。

また、角田さんのもとに野口雅世子(現在こども支援課長)さんがいて、この人も私たちの意見をよく聞いて、行動していただいたものである。当時、七海稔君という脳性まひ者が白河の太陽の国という施設に入所していたが、実家が郡山にあって両親が健在で、なんで七海君が施設に入所していなければならぬのか分からぬと野口さんが言う。だったら、野口さんと一緒に私も太陽の国に行って七海君に会おうということで、即行動に移って、野口さんと一緒に太陽の国に出向いて、七海君とお会いする。そのようなことがあって、七海君は太陽の国を出て郡山の実家に戻る。その後、パソコンが得意な七海君はしばらくの間、オフィス IL の仕事をしていた。

角田さんと野口さんという2人の行政ウーマンがいなければ、あいえるのはこんなにも大きくなれなかつただろう。2人には大いに感謝している。

#### 脳性まひ者の二次障がいで頸椎を痛め、横浜の病院に長期入院

相模原に住んでいた時分に、前述した金禮子さんという脳性まひ者が一緒に活動していたのだが、ある時金さんが歩いていて電柱に激突して転んだ。それがもとであれよあれよという間に歩けなくなってしまうということが起こる。私は大丈夫かなと思って、神奈川リハビリテーションセンターで頸椎を診てもらったら、頸椎の一部が少しずれていると言われる。金さんの件があつて、脳性まひ者の二次障がいについて調査研究をしていくことになり、神奈川県内の4人の脳性まひ者について細かい調査を行つていったという経緯がある。

郡山に戻つてから、脳性まひ者の二次障がいのことを忘れないでいたが、1995年の頃からか、首筋や肩が非常に凝りだしてきた。横になって腹ばいで本を読んでいたのも二次障がいを悪化していく原因であったのかなと今になって思うが、1995年の暮だったか、家の部屋で柱につかまって立ちあがつたところ、足がよろめいて、ドスンと尻もちをついた際に頭の先から足の先までビビーンと電気が走つた。このままいったら私も寝たきりになつてしまふかもしれないという恐怖があつて、神奈川の厚木に住む玉井明君が頸椎の手術をしたという情報が入つてきていたので、玉井君に電話をして、手術を受けた病院名を聞く。玉井君に「手遅れにならないようになるべく早く手術を受けたほうがいいよ」という助言を受ける。

1996年1月に横浜の金沢八景に近いところにある横浜南共済病院に行く。そして、大成さんというドクターに頸椎を診てもらえば、だいぶ悪い状態なので、早めに入院したほうが良いと言われる。首を前と後ろから切つて、頸椎を針金で留めていく手術だ。想像すると恐くなつて、入院をためらつたが、妻に「これ以上障がいが進んだらどうするの。玉井さんも早めに手術を受けたほうがいいと言ってたじゃない」とはつぱをかけられて、勇気を振り絞つて1996年2月に横浜南共済病院に入院する。病院に慣れてから手術を行うというのが当時の病院の方針だったので、1ヶ月あまり経つてから頸椎の手術を受ける。手術は9時間に及んだ。手術後3日間は全く眠れずに地獄の苦しみを味わう。首の傷跡から伸びているチューブも取れて、ベッドの上で起き上がるようになり、リハビリ室にも通えるようになった矢先に、大成ドクターから首に針金を固定しているピンが緩んできたので、もう一度手術すると言われて、なんでもまた!と愕然とする。私の頭が大きくて重いのか、緊張が激しいからかと思い悩むが、手術は決行しなければならない。

1度目の手術より2度目の手術のほうが簡単に済んで、治りも早かつたが、2度あることは3度あるというが、まさしく3度目の手術を受ける羽目になる。今度は頸椎に巻いてあるチタンの針金が緩んできたという。これにはもう呆然とする。あげくの果て、手術後はハローベストという首と頭を固定する装具をつけられる。しかし、緊張で首は僅かに動く。首が動くとこめかみに打ち込んである鉄のピンがずれて頭皮を傷つけてとても痛い。大成ドクターに痛いと言って、早めにハローベストを外してもらったが、もうあのような苦しみは味わいたくない。妻は私のお見舞いに毎週病院に通つて来てくれた。妻に大いなる感謝だ。2月から8月まで半年間にのぼる入院生活を経て、無事に我が家に戻ってきた。

私の次に橋本君が頸椎を痛める。自分の姿勢が保てなくなって、車いすからずり落ちそうになる。これは危ないと思い、私が手術を受けた横浜南共済病院を紹介するが、手術を受けるのが恐いので、ズルズルと病院行きを延ばしに延ばし、二次障がいの症状が出てから2年もしたころになってようやく横浜南共済病院に行って手術を受けるが、もう間に合わなかつた。手術をすれば、それ以上の二次障がいが進むのを予防することはできるが、症状を改善することはできないとのことである。もう1人、わーく IL の元代表であ

った高松裕二君にしても、私の助言を受け入れてもう少し(何ヶ月間)早く横浜南共済病院に行って手術を受けていたら、もう少し状態の良い身体を維持することができたのにと、残念に思う。

もう4年ぐらい前になるか、大阪に住む古井正代さん(前述している青い芝の会当時の闘争仲間)、透君夫妻が郡山にやってきて、脳性まひ者の二次障がいに関する調査研究をしているので、是非とも協力してほしいという。私も脳性まひ者の二次障がいには並々ならぬ関心があったので、快く調査の協力を引き受ける。そして、福島県内の私の知っている脳性まひ者30人あまりの調査を行っていく。

#### 手術を前に オフィス IL を吉田公男さんに託す

1997年には、全国車いす市民集会と全国自立生活問題研究集会合同の「全国障害者市民フォーラム」を開催していく手筈にしていたので(私が勝手に開催を承諾してしまったので、後からみんなに文句を言われたが)、その準備を着々と進めなければならなかったが、私の二次障がいの手術と、鈴木(現在湊)久美子さんが結婚のためにいわきに行ってしまうことが重なり、オフィス IL の事務局を誰かに任せなければならないことになって、現在福島県議を務めている吉田公男さんに頼みこんで、オフィス IL の事務局で働いていただくことになる。現在 IL センター福島の所長で、FIL の代表を務めている設楽君がオフィス IL に来て働き始めたところでもあった。

吉田公男さんにオフィス IL を託して、横浜南共済病院に入院することになったのだが、半年間の入院後、オフィス IL に戻ってきてみると、ちょっと雰囲気が違っていた。私が半年間入院していたから勘が鈍ってきているのか、吉田公男さんのスタイルで事務所の仕事が進んでしまっているのか、そのどちらもあったと思うのだが、どうにも居心地が悪いオフィス IL に様変わりしていた。というか、オフィス IL は障がい者(脳性まひ者)のペースを離れてしまっているような感じを受けた。そのようなことがあって、しばらくオフィス IL に通わない日々もあったが、全国障害者市民フォーラムの開催も間近に迫っていることもあって、オフィス IL の仕事に復帰する。

オフィス IL の活動(事業)が大きくなるに従って、健常者に頼っていく面が増えていく。そのことにより障がい者同志の連帯感や泥臭さが薄れてきてしまう。吉田公男さんがどうのではなく、健常者の誰がオフィス IL に来

ても、オフィス IL が大きくなっていく以上、健常者の数が多くなり合理的に事業を進めなければならなくなり、障がい者の活躍する範囲がせばまっていく。この矛盾からは逃れられないような気がした。この時を境に、健常者の力を頼まないとできない自立生活センターの活動に対して徐々に興味を失っていく。

#### 宮下さん、聰君、全国障害者市民フォーラムの事務局スタッフとして薄給で働く

全国障害者市民フォーラムを開催するのに、こんな水道局の横のボロい家ではなく、さくら通りにデンと事務所を構えようと、郵便局あとを借りてオフィス IL の事務所として、本格的に活動を始める。この頃からか、宮下三起子さん(今や相談支援員としてあいえるの会になくてはならない存在になられた)が関わってこられて、彼女はイベント好きなもので、全国障害者市民フォーラムの開催に俄然興味を持ってしまった。そして、フォーラムのお手伝いをしたいという。ちょうど猫の手も借りたい忙しさだったので、宮下三起子さんと岡部聰君をフォーラム準備のための臨時スタッフとして1ヶ月3万円という薄給で働いていただく。このときは、お二人さんどうもお疲れ様。宮下さんに「もう少しすれば三起ちゃんにも、ちゃんとした給料を払えるようになるから我慢してね」と言ったのが、何年か後には本当になってしまったのだから驚きだ。

さくら通りに引っ越したオフィス IL の事務所には朝から晩までボランティアがひっきりなしに出入りしていて、活気にあふれていたことを懐かしく思い出す。兵庫のメインストリーム協会の廉田さんは毎月の実行委員会に来ていただいて大変お世話になった。JIL の樋口さんもたびたび実行委員会に出席していただいてお世話になる。

フォーラム実行委員会として、フォーラム開催を担うボランティアを集めため、また郡山市民にフォーラムをPRするために、たくさんのプレイベントを開催していく。どのようなイベントを行ったかを記しておく。①第10回郡山市ボランティアのつどいで、シンポジウム「誰にもやさしい街づくりを考える」を開催。廉田さんと樋口さんがシンポジストになる。②郡山市役所から福島県庁まで電動車いすでリレーする車いす駅伝の開催。③うねめ踊りに実行委員会として参加する。④イベントウィークということでイトヨーカ堂のエントランスホールでホーキング青山さん(電動車いす

に乗った異色の芸人)の公演と Work・IL のキッズ・プログラム公演の開催。⑤フォーラム市民バザーの開催。⑥JOY プロジェクト(車いすのまま車を運転することができる自動車の普及と理解を図る活動)全国キャラバンを郡山でも開催していく。⑦気球に乗り、ハーレー・ダビットソンで走り、ウォークラリーを行う。といったハードスケジュールの中、精力的にイベントを開催していった。

#### 全国障害者市民フォーラムの開催

1997 年 9 月 27 日から 29 日まで郡山市総合体育館、郡山市総合福祉センター他の会場で全国障害者市民フォーラム in 福島(第 13 回車いす市民全国集会・第 9 回自立生活研究全国集会)が開催された。フォーラムのテーマは「バリアブレイク=共に生きる社会は発想の転換と結び合いから」。実行委員長は橋本君、私は事務局長を務めた。全国各地から電動車いすを含め、車いす利用者が 200 名、計 600 名にのぼる参加者があった。フォーラムを陰で支えるボランティアの皆さんには 3 日間で延べ 1000 名の参加があった。

フォーラムの内容を簡単に記しておく。第 1 日目は総合体育館を会場に、開会セレモニーを行っていく。開会式の後、安積遊歩さんに「バリアブレイク」という題で講演をいただく。夕方からは参加者全員で交流会を行う。2 日目は各会場に分かれて、各分科会を開催していく。分科会は、①小規模作業所・就労問題を考える。②まちづくりを考える。③結婚、子育て、性を考える。④障害者の人権問題を考える。⑤知的障害者の問題を考える。⑥障害児者教育問題を考える。⑦介助制度とケアプラン。⑧ピアカウンセリングとその必要性。⑨自立生活センターの役割と今後。⑩ハーレー・ダビットソンに乗ろう。⑪障害者版ねるとん。⑫モータースポーツ体験(安全運転講習会とジムカーナ体験走行会)。⑬熱気球に乗ろう。と、盛りだくさんの分科会を行う。最終日 3 日目は、シンポジウム「バリアブレイク」という題で各シンポジストから発言をいただく。シンポジウムの後、閉会式に移り、フォーラムの全日程を終えていく。

このフォーラムの開催を機に、たくさんのボランティアの方との関係を作っていくことができた。永田壮三さん(元オフィス IL 事務局長)、本田(旧姓田崎)淑子さん(飯田しのぶさんの後 2 年間 Work・IL の職員を勤める)、野地あつ子さん(2 年間オフィス IL の職員を勤める)、渡辺徹君(現たいむ

IL 職員)、柳沼康裕君(現たいむ IL 職員)等、多彩な人材を確保することができた。その他、様々な人たちとの関係が作られていった。

この、全国障害者市民フォーラムの開催は、福島県、郡山市の障がい者福祉、そしてオフィス IL に多大な影響を及ぼしたのである。

#### ちょっと一休み、芸術活動にいそしむ

全国障害者市民フォーラムの開催後、障がい者同志の連帯感や泥臭さがだんだんと失われて、発展の段階に入ったオフィス IL にはあまり興味がなくなってしまい、橋本君と話し合ってオフィス IL の所長を橋本君に引き継いでいただき、私は運営委員だけに名を連ね、実質的な活動には参加しない方針を貫く。1998 年のことであった。

オフィス IL の活動から身を引いたので、日中の時間の過ごし方を考えなければならなくなっていく。私と同じような境遇の吉田強君や岡部和之君と電動車いすで郡山のまちを走り回ったが、それでも時間がある。本も読んだがすぐに飽きてしまうし、どうしたら良いのか思い悩む。その頃はまだワープロで文章を打っていたので、文章の他にも様々使えるパソコンを購入しようか迷っていた時期であった。パソコンを購入しても使えなかつたら、宝の持ち腐れになってしまうだろうという不安もあって、なかなかワープロからパソコンへの移行ができずにいた。しかし、パソコンを使って様々なことに挑戦していきたいという欲求が強まっていき、とうとうパソコンを購入することに踏み切る。

パソコンに図形ソフトであるイラストレーターなどをインストールして、図形制作の練習のつもりで、○を基調とした絵にメッセージ性の強い詩を載せていくといった作品を作るようになっていく。それからどんどん創作意欲が湧いてきて、次から次へと制作する作品の種類が増えていった。1998 年から現在まで、パソコンでの創作文字、粘土によるオブジェ、墨字による書アート、ワープロなどを分解した部品を使ってのオブジェ、ビンの中にゴミを閉じ込めたびんアート、アクリル絵の具での絵の制作、写真アートと、芸術活動に広がりをみせてきている。

#### アートステーション・美しい村オーナーの渡辺理恵子さんとの関わり

美しい村の渡辺理恵子さんはオフィス IL がでて間もない頃からの付き合いだと思う。以前、理恵子さんは銀河ステーションというグループを作

つて活動をしていたことを思い出す。パソコンでの作品を作り始めた頃、藤橋君が「理恵子さんが自宅を改築して、アートステーション・美しい村というミニギャラリーをオープンしたので、私の写真の展示会を行うが、白石さんも美しい村で作品展を開催してみれば」と言われ、何年ぶりかで理恵子さんと再会する。それからというもの、美しい村へは入り浸りになってしまっている。美しい村では毎週日曜日（美しい村で作品展が開催されるときには休みになるが）に日曜サロンというものを開いていて、私たちのような障がい者（だけではないのだが、いつも集まるのは障がい者）が集って創作活動を行っている。美しい村で、私がどんどん創作を続けているので、私の作品の材料等が美しい村の倉庫に山積みになっている。私の創作活動では、理恵子さんにはご迷惑をかけ、また大変お世話になっている。

#### 郡山市障害者生活支援事業を委託される

前述した元郡山市障がい福祉課長の角田さんの精力的な働きによって、1999年に念願であった郡山市障害者生活支援事業がオフィス IL に委託される。障がい者自らが運営している団体に市町村障害者生活支援事業が委託されるのは全国的に見ても数少ないことであった。福島県内では唯一オフィス IL のみである。年間1500万円（現在は980万円）のお金がオフィス IL に入ってくることになり、宮下さんなどは「このお金どうして使おうか？」と話していたことを思い出す。私の目論見どおりになっていく。これで、宮下さんにも聰君にも生活できるお給料を出すことができるようになる。

#### NPO法人あいえるの会設立、郡山市身体障害者ガイドヘルプ事業を委託される

ガイドヘルプ制度等の全身性障がい者の介助保障の在り方を研究していく通称角研（全身性障碍者公的介助制度研究会議）が、障碍者が地域で生きる会＆福障連主催で1996年から1997年にかけて開催され、私も委員の1人として参加していったという経緯がある。角研で研究された結果をもとに IL センター福島では福島市と話し合いを続けて、全身性障がい者のガイドヘルプ事業を改善していったり、自薦ヘルパー（社協登録）が実現する成果を得ている。そしてこの、福島市での先駆的な取り組みが全県的に波及していくのである。なぜ角研なのかというと、研究会のメンバーである福島市の脳性まひ者のボス的存在の角野正人さんの角をとつて角研と命名したのである。

その角研の影響もあってか、今まで郡山市社協（社会福祉協議会）で行っ

ていたガイドヘルプ事業がオフィス IL に委託されることになる。オフィス IL の活動が定着してきているので、郡山市では委託の決断をしたのだろうか。なにはともあれ、ガイドヘルプ事業を行うには、無認可の団体では難しく、NPO 法人を取得しなければならない事態となる。私も協力して定款作りなどを手伝っていく。そして、橋本君を初代理事長として NPO 法人あいえるの会はスタートしたのである。

#### 支援費制度スタートで復帰、NPO(特定非営利活動法人)あいえるの会の理事長に就く

障がい者本人の意思を重視しない措置制度から、障がい者の自己選択、自己決定を前提としたノーマライゼーションの実現を目指し、社会福祉基礎構造改革の理念のもとに2003年に障害者支援費制度がスタートした。それで、あいえるの会でも居宅介護事業を始めることになるが、居宅介護事業を行っていくにはあいえるの会を組織的に強化しなければ対応が難しいということで、宮下さんと聰君に「あいえるの会の理事長に就いてほしい」と懇願されて、障がい者のペースを堅持していく従来形の動きに縛られることなく、もっと柔軟的に障がい者運動の方向性を見つけ出していくという気持ちで、あいえるの会理事長に就任する。理事会と共に、あいえるの会の事務局体制もしっかりとしたものにしなければならない必要性に迫られていて、本来ならば障がい者が就かなければならないところであるが、その障がいを持つ適任者がいなかったので、JIL とも相談して、全国障害者市民フォーラムの際にボランティアとして活躍されていた永田壮三さんを事務局長として迎える。永田さんと果たしてうまくやっていけるかどうか不安であったが、永田さんの企業経営のノウハウをいろいろ聞いていくうちに、なるほど大きくなった組織を運営していくには永田さんのような企業経験を持つ方に入ってもらうのが一番だと気付いていく。永田さんは歯に衣着せないで率直に意見を述べられるので、私としても大変勉強になることが多かった。永田さんの指導のもとに、総務・会計をしっかりするために菅野さん、佐藤さんに総務に就いてもらう。また、永田さんは、借金はしないように自己資金を貯める方針を持っていたので、無駄遣いはなるべくせずに自己資金を貯めることに成功していく。永田さんには4年間あいえるの会の事務局長で働いていただく。

### 障害者自立支援法スタート

障害者支援費制度はスタート当初から予算をオーバーしてしまうといった問題が発生していた。そして、厚生労働省は早々にグランドデザイン案という、障害者自立支援法のもととなるものを提示してきた。DPI（障害者インターナショナル）日本会議事務局長の尾上さんに来ていただいて、グランドデザインの詳細を聞く勉強会（自立生活支援セミナー）を開いていった。この頃から全国的に支援費制度を無くすなという運動が展開されていくが、支援費制度が始まって3年後の2006年には障害者自立支援法がスタートすることになる。支援費制度から3年しか経っていないのに、またまた書類の書き直しや契約書の取り交わし、障害程度認定調査等、たくさんの煩わしい仕事量が増えて、あいえるの会ではてんてこ舞いの忙しさであった。

障害者自立支援法スタート当初、1割負担の影響で利用者の利用時間が減るのではないかと心配したが、利用者の皆さんは生活に直結する介助サービスなので、それを減らすことはできなかったようである。生活費に充てられていた年金の中から泣く泣く負担金を支払っていた。

障害者自立支援法がスタートして1年後ぐらいだったろうか、全国大フォーラム（障害者自立支援法に反対する全国組織の集会）があつて、郡山からも大人数で東京に向かったのであったが、折しも台風が東京に接近しているところで、みんな大雨に当たって大変な目にあう。靴に雨水が入ってがっぽりがっぽり、私と岡部和之君の電動車いすは電気系統に水が入って動かなくなるし、さんざんな目にあった全国大フォーラム（東京大行動）であった。その後も大行動には何度か参加していく。

このような全国的に障がい者が立ち上がって果敢な運動を展開していくので、厚生労働省でも対応していかなければならなくなり、激減緩和措置がとられる様になっていった。

### 岡部聰君があいえるの会事務局長に就任

永田壮三さんにはあいえるの会の事務局長を4年間務めていただいて、その後、2007年からはオフィスILができて間もない頃はボランティアとして関わっていただいている岡部聰君が務めることになる。聰君はあいえるの会で、あいえるの会に関わる仕事を何でも引き受けてやって来ていたので、果たして事務局長としての仕事ができるのかどうかちょっと不安な点もあった。

案の定、ヘルパーの仕事にも入っていたので、なかなかヘルパーの仕事から脱出することができずに、今年になってやっとヘルパーの仕事から離れることができたのであった。何でも自分でやらなければならない聰君の性格なので、他の人に仕事を分配していくことが苦手なことが弱点の聰君だが、あいえるの会の事務局長として4年目に入っているので徐々にであるが事務局長としての資格が出てきている。

### 渡辺理恵子さん、大島和子さんたちと芸術の街パリへ

2008年4月に生まれて初めての海外旅行に行く。元Work・ILの職員の大島和子さん、美しい村の渡辺理恵子さんの呼びかけで、私と私の養護学校高等部のとき同級生であった今野利彦君、今野君の介助者の鈴木君、画家で美術の講師をしている関根さん、その他の面々計10名でパリまで行ってくる。通訳なしのグループ旅行だったので、非常にスリルのある冒険旅行であった。

ドゴール空港からは電動車いすでも乗れるタクシーでオペラ座の近くの宿泊するホテルまで行く。それから3日間パリの有名な場所を見て歩く。凱旋門、シャンゼリゼ大通り、パリ市立近代美術館、ルーブル美術館、ノートルダム寺院、ポンピドゥーセンターの国立近代美術館、エッフェル塔など、ヨーロッパの文化を満喫してくる。ポンピドゥーセンターでは1人取り残されて、グルグル回ったあげくようやく美術館を探し当てて、ピカソやダリなどの絵を観ることができた。旅行最後の日には雨降る中、ホテルからルーブル美術館まで1人で迷わず電動車いすで散歩することもできた。パリの地下鉄に乗って、エレベーターのない駅で降りてしまって、警官やパリ市民に手伝っていただくというハプニングも味わうことができた。パリの巡回バスの時刻表を調べてノンステップバスにも乗ることができたし、とても勉強になる貴重な海外旅行を体験することができた。

### わーく ILがあいえるの会へ

わーく（Work）ILは1995年にオフィスILと別れた後は小規模作業所として独自路線を歩み、代表も橋本君から、岡部和之君、高松裕二君と変わっていく。女性の職員も飯田しひぶさん、本田淑子さん、大島和子さん、高橋やすみさんと交代していくが、男性の職員は鈴木清英さん1人で、Work・ILが誕生して少し過ぎた1998年から現在まで働き続けている。Work・ILの利用者の知的障がいを持つ空閑宗子（くがのりこ）さんが鈴木さんを慕ってい

る光景は本当にほほえましいものである。

そのような Work・IL であったが、障害者自立支援法ができて、小規模作業所の存在が危うくなってくる。福島県内の市町村でも小規模作業所に対する補助金をカットしていく動きが現れてくるようになり、郡山市でも将来については小規模作業所に対する補助金はどうなるか全くわからないとの答え。Work・IL の存続が危なくなるということから、Work・IL の内部で検討の結果、あいえるの会の法人に入っていく方針をとっていった。そして、2008 年 4 月から地域活動支援センターとしてわーく IL はスタートする。2009 年 4 月からは就労継続 B 型として（新たにスタートした生活介護たいむ IL と共に多機能型事業所）事業を開始するが、就労継続 B 型ではあくまでも障がい者の就労を目指すことを目的としているので、脳性まひ者の利用者がほとんどを占めるわーく IL の内容をみると、就労継続よりは生活介護のほうが良いのではという考えになっていき、今年度（2010 年度）からはたいむ IL と共に生活介護事業所として歩むことになる。紆余曲折したわーく IL であった。

#### たいむ IL 開所

確か 2004 年から 2005 年にかけて ILP（自立生活プログラム）の拡大版のような、障がい福祉などについての学習中心の「自立大学」を行っていった。受講生は 4 人と少なかったが、障がい福祉のエキスパートの講師陣を選んで充実した学習を行っていった。自立大学卒業生の 1 人である後藤弘樹君は福島市で自立生活をエンジョイしている。わーく IL に通っていた緑川洋君も自立大学を受講したが、わーく IL との折り合いが悪くなってしまって、わーく IL を辞めてしまって在宅生活を余儀なくされているといった状況もあった。

緑川君だけでなく、在宅で無駄（？）な時間を過ごしている若い障がい者が何人かいて、今後養護学校(特別支援学校)を卒業する重度の障がい者がどんどん出てくることも予想されるので、ここらへんに障がい者のディサービス的な生活介護事業を行っていこうということで 2008 年 10 月から本格的な準備を開始する。元わーく IL の職員で、パリ旅行に一緒に行った大島和子さんに臨時職員として来ていただき、物件探しから始めていく。私と聰君でその前から物件探しを行っていたが良い物件を見つけられずにいたが、大島さんと行動したらあつという間に物件が見つかる。須賀川の県中社会福

祉事務所には何回か足を運んで提出書類について話を聞いたり、諸々の準備をして、2009 年 4 月に生活介護事業所「たいむ IL」を開所する。

たいむ IL の名称についてちょっと説明しておきたい。まず「大夢」。利用者と職員が大きな夢を持って、その夢を実現していく努力をしていく。そして time。時間を大切に使っていこう。Good timing に楽しいことがやってくるように。それから、大島さんが付け加えたのだが、植物のタイム。タイムの花言葉は紳士的。たいむ IL の利用者、職員の男性はみんな紳士的である。このように、いろいろな意味を込めてある「たいむ IL」である。

たいむ IL は利用者に芸術性を高めてもらっていくことを目的にしたいという、私の考えがあったが、いざ、たいむ IL の事業をやってみると、利用者の意向もあり、また職員がそこまで時間が取れないなどの問題があって、私の思いから外れていってしまったが、今ではそれでもいいのかなと思っている。たいむ IL も 1 つの生き物なので、自らの意思を持って動いていくのだから、あとは静観して様子を見ていこう。

#### 最後に

6 月の終わり頃か、私と橋本君の還暦祝いの記念誌の編集をお手伝いしていただいている藤橋秀一君に、そろそろ記念誌の原稿を書き始めないと期限までに間に合わなくなってしまうかもしれないとせつつかれて、その前までやっていた障がい者制度改革推進会議に提案していく文章(あと少しで完成する)を後回しにして、パソコンでこの文章を打ち始めたのである。最初は軽い気持ちで、A4 版 20 枚ぐらいで終わるのではないかとタカをくくっていたら、後から後から書いておきたい内容が頭の中に湧き出してくる。もう、どうにも止まらない心境でどんどんページ数が増えていく。岡部聰君に「記念誌のページ数が増えて予算オーバー（？）になるが」とお伺いを立てれば、好きなだけ書いて下さいというので、7 月の半ばまでかかってこの原稿を打ち終えたのであった。

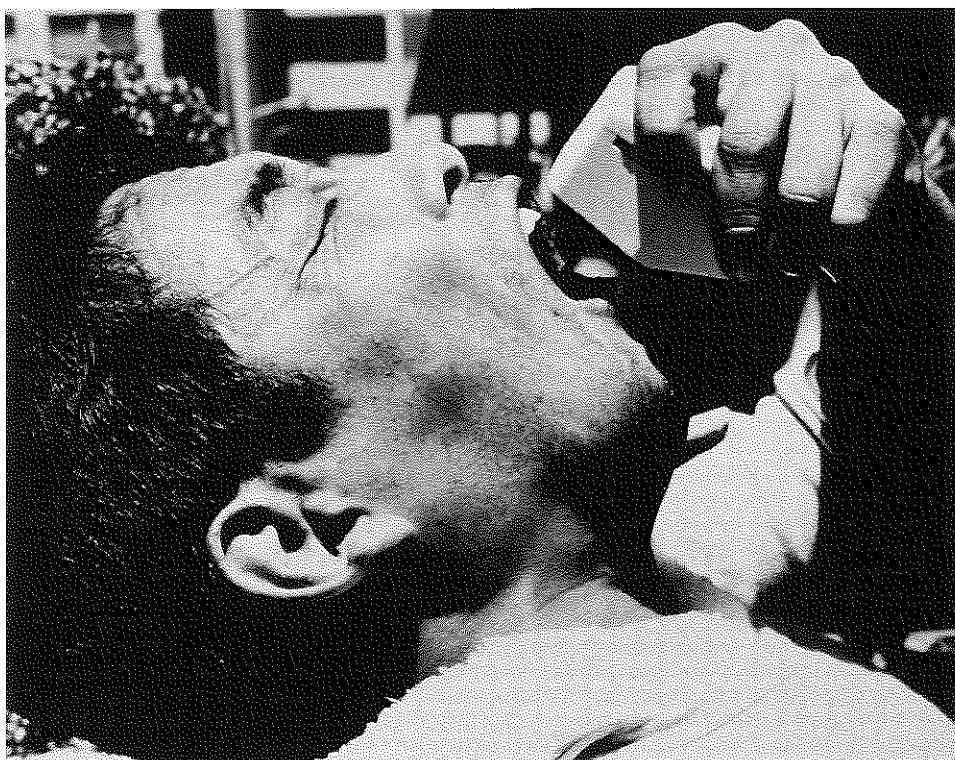
この膨大な量の原稿を読むのは大変だとは思うが、まあここまで我慢して読み進んでいただいて有り難う御座います。36 年間にわたる私の障がい者運動の歴史だが、いま思うに、あつという間に過ぎ去っていってしまった感がある。しかし、ぎっちりと詰まった私の人生であったことも事実である。

この60年間を通じて様々な方とお会いし、関係を結んできた。この、私の歴史、障がい者運動の歴史は、関わってきた全ての皆さんと共に創り出してきたものである。私と関わっていただいた全ての皆さんに感謝して、この文章を終えたい。

橋本広芳

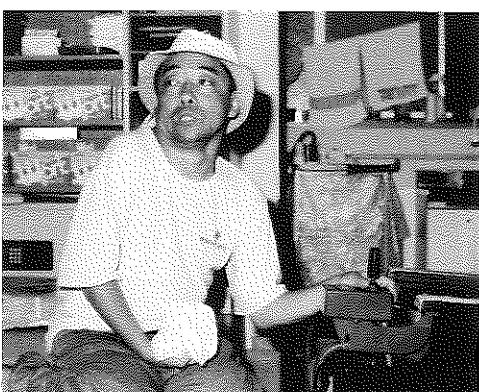
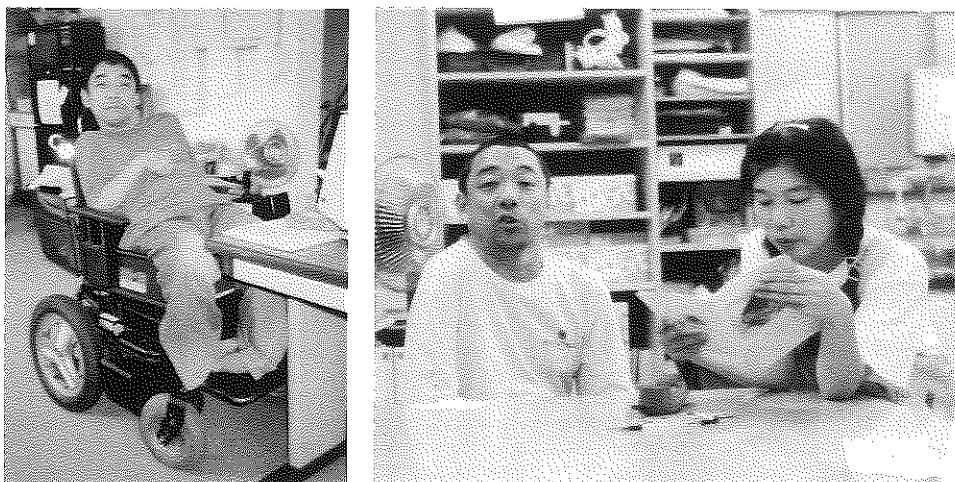


**障害者運動 政治に届け！私たちの叫び！**





当時（1998年）のオフィスＩＬのメンバー、インドネシアからの研修生を迎える、JOY プロジェクトなど1997年から2000年頃の活動



職員の安藤しのぶさん  
(現在・飯田しのぶ) と共に、懐かしき当時のメンバー達、Work・ＩＬ所長として活動していた頃の私



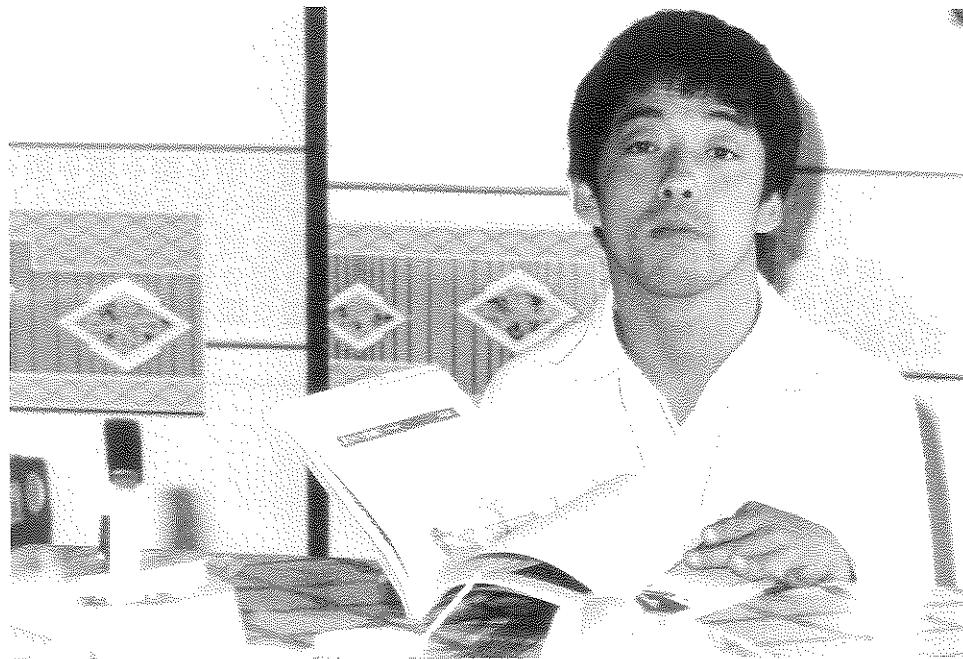
若き日のロマン ～こんな<sup>とき</sup>時代もありました～



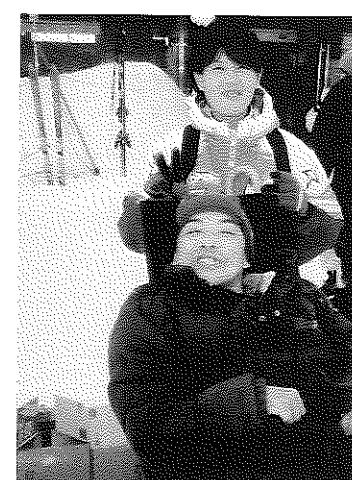
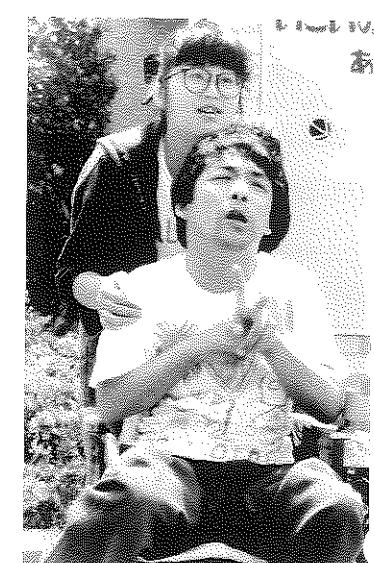
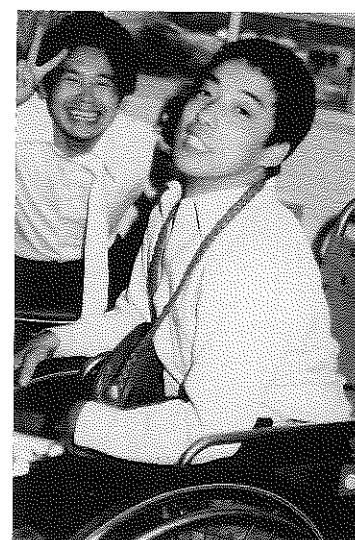
ひとりぼっちの時間も大切でした。  
ほとんど、ボ～としていました。

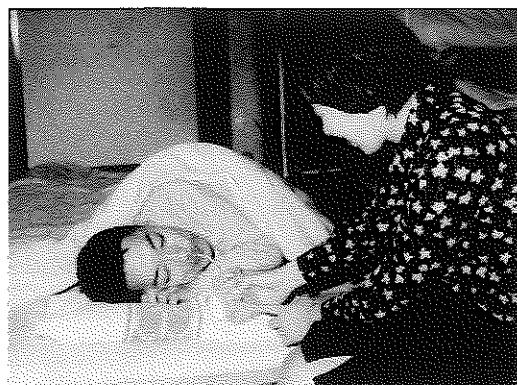


ひとときの合い間……読書を楽しむ

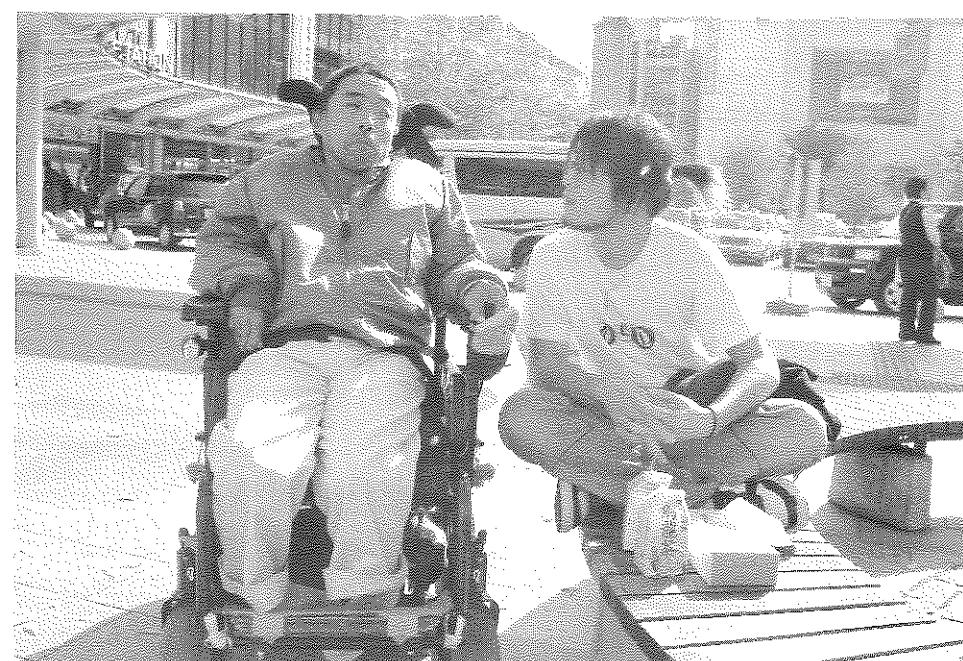


施設から仲間が遊びにきました





日常生活の思い出  
様々なことがあった日々



## 今までのあった事

橋本 広芳

### 福島から郡山へ

昔の記憶は薄れかけているので、正確ではないかも知れないが白石さんからの強烈な働きかけの下で始まった福島の町での生活は色々な事があったが2年程続いたと憶えている。

大勢で狭い所で生活すると病気になったり、プライバシーが守れないということや仲間が増えてきたので、1人1部屋で暮らしそうという事になった。それと活動の広がりも考えて福島は角野氏にお任せして、白石氏は秋田に行く事になった。私は悩みぬいた末、郡山に来ることにした。

1977年、5月の半ばの頃であったと思う。有り難いことに白石さんが町で出会っていた門沢さんという日大工学部の学生を紹介してくれた。彼は大変な秀才だったので、右も左もわからない私に郡山について水先案内人となつてもらった。

当初の2週間ばかりは兄弟のように寄り添って動いてくれたのだが、暫くしたとき、門沢さんの親父が来て、私のジャンパーの襟首を捕まえて「俺の息子を返せ」と突然迫られました。

私は初めから理解した上でのことだと一方的に思っていたので、どうしていいか分からず、その時は門沢さんと親父さんの両方にお帰りいただいた事もあった。

それと私は福島から郡山に移って来たときには、手動の車椅子一台と、どういうわけか電動車椅子一台、下着などの着替えが入った柳ごおり1つと、青い芝の資料の入ったダンボール1個、望遠鏡と望遠鏡の箱、プラスチック尿瓶、喘息の薬、病院からいただいたトイレットペーパー2個。これが私の全財産でありました。郡山に来たときの所持金は1万円位だったと覚えている。

また住む所が無かったので、引っ越しをする前に私は家探しをしておいた。門沢さんとあっちこっち歩いたのだが、来る日も来る日も断られ続けたのを覚えている。そして、桜の散りかかったときに、池ノ台にある大きな家を通りかかった時、不動産屋のおばさんがそこを貸してくれることになった。

### お化け屋敷という名前を戴いた

この家は大変大きな一軒家で8畳間が二部屋、6畳間がダイニング込みで三部屋、4畳半が一部屋、そして駐車場もついており、庭にはビワの木があった。現在でいう所の麓山の郵便局の道路を挟んで右手20~30メートル位の場所に家賃3万円のその家はあったのだが、文化通りの道路を広げるということになり1年位でその家からは立ち退かなければならなくなってしまった。

1人の障がい者が住むには大き過ぎる家であったが、私はいつも1人で寝ることが多かった。

最初のうちは淋しかったが、そのうち青い芝の会のメンバーが集まる場所になったり、ボランティアの人達が集まるようになってきたのであるが、とにかく最初の内は何も無かったので家の中がガラーンとしていて、皆からお化け屋敷という名前を戴いた。

最初の2ヶ月か3ヶ月は生活保護もおりなかったし、年金を受け取る時期もちょっとずれてしまった事もあって、食べ物を調達する事がきつい日もあったことを憶えている。

家賃も最初の3ヶ月は払うことが非常にきつくて、うすい通りでのカンパのお金やら、一部は社協からお金を借りて、その場を凌いだこと也有ったし、布団も無かったので、社協への何回目かのお願いの結果、布団一組と達磨ストーブをやつとていただいた。それまでは、この家に残っていたカーペットに身体をくるんで寝ていたので、布団を貰ってからは身体も痛くなくて安心して楽に眠れるようになった

達磨ストーブは貰ったものの、門沢さんに灯油を持って来てもらうまでは、火もつけられなかった。ありがたいことに、このころ白石さんの義理のお兄さんが郡山市内の小学校で先生をしており、月に2~3回、私と一緒に近くの銭湯に行ってきて、入浴の介助をしてくれた。これだけでもありがたいのに、この方は家賃のほとんど全部をカンパしてくれていた。

それから在宅訪問をやっていたのであるが、ほとんどの家は「もう来なくてもいい」とか「二度とくるな」といわれたのであるが、山木さんの家だけは、全然対応が違っていて、皿や茶碗に始まりなんとテレビまでいただいた。世の中には神様の様な人もいるもんだな~と思う気持ちでいっぱいあります

した。

私は門沢さんにも大変迷惑をかけたと思います。なにしろ彼が家に来ない時には、郡山のことがどうしても分からずに、色々なことを聞くために朝から晩まで何回も門沢さん宅に通ったこともあったので、家人から見れば大変迷惑だったと思うし、最初の内は親父が迎えに来たのに、暫くすると今度はお袋さんも「いい加減に息子を離してやって下さい」と迎えにくるようになった。

郡山での生活は苦しいことも切ない事も多くあったが今より大変に若く、体も利いたのでそれほど苦にもならなかったので、むしろ毎日が楽しく感じられていた。

それにご飯や食べ物があまり無かったが、どういう訳かお酒はけっこう家の中にはあったで、夜になるとほどほど飲んで眠ることができた。

私は郡山に来た時には小さな目標があった。郡山で一年の内に、脳性まひの仲間を10人見つけること、国内を旅行すること、私の恋人を見つけることであったが、一年ではとてもとも出来ることではなかったし、見通しはものすごく甘いものがあった。

## 仲間が集まり、生活の基盤が出来る

1年目にやれたこととしては生活保護を受給出来たこと、福島の佐藤孝男さんが郡山に住み着いてくれたこと、2件目の家の見通しが立ったこと、郡山の福祉課が重度の脳性まひ者の名簿を見せてくれたので、訪問活動が計画的に行えるようになったなどだろうか。門沢さんとかの力を借りる事によって、ボランティアの数を増やせたり、地区割りの担当をきめて在宅訪問ができるようになったことが大きかった

こうして色んな人に支えられながら郡山での生活も、なんとか続けられるようになっていった。

特に在宅訪問活動については最初は駄目と言っていた郡山市内に置ける重度の脳性まひ者の名簿についても障がい福祉課は何回かの話し合いの後に、わら半紙に書き写し等は構わないという事になったので、さっそくボランティアの学生さん等を市役所に連れて行き写し取ることにした。

さっそく本屋にいって買った地図とその400名近くの名簿を見比べ

て、だいたい郡山を10の地域に分け、1~10の番号をつけて天気の良い日に順番ごとに、訪問活動を行っていった。

普通の日は訪問活動や役所まわりなどでほとんどが終わり、土曜日と日曜日はいつもだいたいうすい百貨店前でカンパ活動を行っていた。

雨や雪の日などは家で体を休めていたり、図書館にいって本を読んでいた。私にとって図書館とは冷暖房付きであり、家にも近くトイレや洗面所も利用出来て新聞や雑誌も読めて、当時は食堂もあったので、コーヒーも飲めたり待ち合わせにも利用できる、大変便利な場所であった。

## 全国の波が押し寄せる

そういういっているうちに、全国青い芝の会長の横塚晃一氏が病死するという事件が起こった。

この事件を皮切りとして、青い芝を巡る様々なことが嵐のように揺れ動いた。組織の再建を巡るごたごたや健全者組織との関わりや事務所のあり方など、色々な事が大波のように押し寄せてきたのであった。

この頃は福島県においては青い芝の会に対する風当たりは相当強いものがあった。障がい者の過激派集団で有るとか、我儘団体であるという悪い噂や誤った噂が流されていて、誤解されていたことも大分あったようだった。我々としては何もいたずらにそんなことしたわけでもなく、当たり前の生活がしたいだけなんだというところで行動したわけであるが、普通の一般社会の方々からはそうは見られないところがあったのだろう。

## 学習会、カンパ活動、バザーと広がる活動

私たちとしては国際障害者年を迎えるという世の中の動きも考えて、そろそろ若い障がい者との繋がりの出来る場所もほしかったということもあって、仲間のアパートで、毎月2回ほど日曜日に学習会を開いていったのである。

ある日、この学習会に出ていた同級生の女性の障がい者から、親元を離れて街で生活したいから、力を借りたいという旨の手紙が届いた。それをその仲間の同級生やたまたま勉強会に出ていた養護学校の先生も読むことになり、なんとか協力をしていこうじゃないか、という話になっていたのである。

また私たちには、自分たちの置かれている状況や、親や年金や住居の事、

環境問題の事、街づくりや介助の事など、自分たちを巡る、とにかく問題があり過ぎるほどだったので、その中からある程度の活動資金と仲間をまず作っていこうということになり、地域での廃品回収や小さなバザー、勉強会などを開いていった。

活動が2年目に入ったときには、リヤカーを買うことができたのであるが、半年もたつと今度は軽ワゴンも買うことが出来て、倉庫も借りる事が出来て、集まる仲間も20人位になってきた。

### 彼女を求めるがほどんと悲惨な結果に終わる

自分であまり言いたくない事であるが、この当時の私は、自分よりも前に社会の中で生活している障がい者の実際の姿をこの目で見て、今後のために参考にしたいという思いがあつたし、付き合ってくれる女人も欲しかつたという想いもあった。

先輩の生き方については青い芝の活動の中で北海道や岩手県、東京などにおける実情を知ることができたが、青い芝の会の活動の広がりと共に、静岡や名古屋、大阪などの関西圏の地域、山口県や九州などで障がいの重い脳性まひの方たちが自分たちの生きる場を作っていたり、牧場やコンピューターを使って文書作成や、補装具を販売している会社や民宿を経営している方々の生き様を知ることができた。

さらに東京、静岡、大阪などに於いては、脳性まひ者同士が結婚されて、子育てをしているというカップルにもお会いしてお話を聞くことができた。

これらのことを見たり聞いたりするうちに、例え脳性まひ者であっても気持ちの持ち方によっては、色々なことをやりながら逞しく社会の中で生きていくものなんだわい、ということを教えられた。

残念ながらそんなことを経験した後でも、私自身に思いを寄せる女性は中々現れず、女性との付き合いは失敗し続けて終わっている。

あえて言えば5年間に及ぶ同棲生活が今までの中での浮いた話である。その他にも福島県から遠く離れて暮らそうと思ったこともありはしたが、すべて惨めな結果に終わって、現在に至っているのである。

### 地域作業所作りが始まる

学習会を重ねる中より、地域の方々と交流の出来る作業所を市内に作ろう、と言う話がでて、実際に行動していこうということになったのである。これが私の記憶では、1982年（昭和57年）の春の事であったと思う。

みんなが活動できる場所（作業所）は、最初は準備的に駅の裏で一軒家を借りてスタートしたのである。これがうつみね地域作業所の始まりです。ところが近隣の住民から、それまで見たことのないような障がい者がぞろぞろ現れてきて、なにやら薄気味悪いのと、なんか、どっかの得たいの知れない怖いおじさん達が集まって来るので騒がしくなり、またいつも夜遅くまで騒いでいるとの苦情がでて、やがては立ち退いてくれと言うことを大家さんから言われたのである。

その後3ヶ月位に渡り話し合いを続けたが、結局は物別れになってしまったので新しい場所を探すこととなったのである。

### うつみね作業所、西ノ内に移転する

こうして半年もたたないうちに、せっかく出来た作業所は、駅の反対側の西ノ内に移転したのである。

西ノ内に作業所が移転したときに、色々な方々の協力を得たお陰で、脳性まひ者の仲間がいっぺんに5人も郡山の街に出てくる事になり、私たちの周りは急に賑やかになったのである。

職員を捜すのも大変でだったし、家賃や維持費も払って行くのも補助金が出なかった最初の1年は特に大変であり、郡山市を始め、福島県や関係機関や皆様方には大変お世話になったことと、周りの方々にもだいぶ協力をして頂き苦労をかけたのであります。

更に言えば作業所の中で毎日何をするかと言うことが長い間の宿題となつた。内職や農作業、箸入れや箱織り、会社の下請け、民芸品作り、和紙の織り染め、廃品回収など一通りやってみたが結局みんなで何とかでき、みんなで楽しく協力しあっていける和紙染めと廃品回収がかろうじて残ったのである。

作業所二年目半ばを過ぎた頃、郡山市と福島県よりそれぞれ60万ずついただけることになり、職員も女性の方が安月給のなかで働いて戴ける事とな

だったのである。

このときは車も軽自動車しかなかったが、次の年からは24時間テレビのリフトバスをいただき、市内の在宅障がい者5～6人の通所が出来る様になつたのである。

そんな中、全県の仲間とも連絡をとりあっていく中で、年に一度のキャンプや勉強会、バザーなどを行っていくことが出来、地域の色々な方と交流を深めていくことが出来る様になったのである。

### うつみね騒動、気が付けば浮き上がっていた私

こうして活動も波に乗ってきたように見えたが、最初の職員が諸々の理由で辞める事になった。代りに若い方が職員として働くこととなつたのであるが、そんなことが1つの引き金となり、組織の中の人間関係がもつれて、3～4年の中でみんなの心の中に溜まっていたモヤモヤや不満が一挙に溢れ出したような形で爆発した。

結局が橋本が悪いのだと言われる中、私はそういった動きを纏められずに、今のどこかの政治家のように、だいぶ浮き上がっていたこともあった。

今だから言えるが、そんな時は福島の角野さんの家に泊まり込んで話を聞いてもらったり、神奈川の白石さんの所にいって、お話を聞いたり、一緒に厚生省にいってシュプレヒコールで叫んできたりすると、なぜか気分がスカっとして郡山に帰ってきたものだった。

そんな中、まったくの寝耳に水の話であるが、白石さんが郡山に帰ってくるという話を聞き、私は口から心臓が出てくるほどビックリしたのである。

これは私の勝手な思いであるが、白石さんは40代になつたら東京に住まいを移して障がい者活動の全国的な流れを東京に居座つてやるものと勝手に思っていたので、尚一層びっくりしたのかも知れない。

それから1～2年は白石さんは奥さんといっしょに補装具販売の仕事をする傍ら、グループらせんという文化活動をおこなつており、私も仲間にいれてもらつて一緒に活動していた。

### 33年間を振り返って、そしてこれから

これはわたしの想像であるが、白石さん自身は身の周りにいる我々障がい者の活動を心配で、気が気でなく見ていたんだと思う。

本当は自分は文化活動に専念したいのに、できの悪い私のような障がい者がいたお蔭でいまの状況があるのだろうか。

多くの面で活動自体が白石さんの存在に負ぶさっていることは確実であろう。白石さんが郡山に帰つてこられたのは、私が38歳のときだったと記憶しているので、かれこれ今年で33年位になるだろうか。振り返ることはあまりしたくはないので在るが、この間にも色々なことが起つた。まるで夢のようである。白石さんはじめ、お世話になつた方々のことを思い、ある種の責任を感じながら今後に活動を繋げていければ嬉しいと思っている。

## 白石清春・橋本広芳プロフィール

白 石 清 春		橋 本 広 芳	
年 代	出 来 事	年 代	出 来 事
1950年4月	福島県郡山市に生まれる。生まれた時に脳性まひとなる。	1950年7月	福島県福島市に生まれる。生後まもなく脳性まひとなる。
1969年3月	福島県立郡山養護学校高等部卒業。	1968年3月	福島県立郡山養護学校高等部卒業。
1972年	「さよならCP」を見て衝撃を受ける	1971年	千葉ベテスダホーム、福島市けやきの村と施設暮らしが続く。
1974年	福島市にて橋本君と共同生活始める	1974年	悩んだ末に福島市内の安アパートで白石さんと共同生活を始める。
1976年3月	福島市で地下歩道建設阻止闘争		街つくり、青い芝の会の活動を始める。
1976年	秋田市に転居、活動の拠点を秋田市に移す	1980年~82年	全身性障がい者の作業所立ち上げの活動に関わる。
1977年4月	川崎駅前でのバスジャック闘争に中心的立場で参加	1983年	うつみね地域共同作業所が芳賀に開所
1979年	全国青い芝の会再建委員会の代表に就任	1984年	うつみね地域共同作業所が西ノ内に移転。所長に就任。
1979年4月	郡山市で栄子との結婚式を挙げる。晃寿が生まれる。	1991年	仲間と共に自立生活センター設立の資金集めに関わる。
1980年	秋田市から相模原市へ、活動の場を移す。	1994年	ワーク・オフィス・L開所。ワーク・Lの所長を務める
1981年	脳性マヒ者地域作業所くえびこ開所。	1999年	オフィス・Lの所長になり障がい者生活支援事業の委託を受け、支援活動に関わる。
1989年7月	郡山ヘリターン	2001年	NPO法人あいえるの会設立、初代理事長に就任。
1990年	グループらせんを作る		郡山市身体障がい者ガイドヘルプ事業の委託を受け、活動に関わる。
1994年	ワーク・L・オフィス・L開所。オフィス・Lの所長を務める	2006年	NPO法人あいえるの会の理事となり、現在に至る。
1996年2月	頸椎を傷め横浜の病院に入院		
1997年7月	全国障害者市民フォーラムが郡山で開催される		
2001年	NPO法人あいえるの会設立。郡山市身体障がい者ガイドヘルプ事業の委託を受け、活動に関わる。		
2006年	NPO法人あいえるの会理事長に就任。現在に至る。		

## あとがき

私が白石さん、橋本さんと出会ったのは1995年でした。震災ボランティアに向かう夜行バスの車中で出会ったワーク・Lの職員の方に誘われて、障がい者の作業所が何なのかも分からずに顔を出し、その場で飲み会があるからと、また誘われるがままに出かけていきました。

元々、障がい者福祉に興味があったわけではない私を15年も惹きつけているのは、青い芝の会が突きつけた「差別」や、自立生活運動が提示した「自立」の概念などが、新鮮かつ本質的なものとして響いたからでもあります。何にも増して、やはり白石さん、橋本さん、お二人の魅力であろうかと思います。この記念誌を通して、お二人の人生のほんの一端にでも、触れて頂くことができましたら幸いです。

いずれにしても、皆さんもお感じとは思いますが、白石さんも、橋本さんもまだまだ衰えそうな気配はありません。

皆さん、次は古希のお祝いです！そして喜寿、いやいや米寿まで。そしてめでたく百歳！？…何となく行けそうな気がしませんか？

岡部 聰

## 白石清春氏・橋本広芳氏還暦祝い記念誌



発行日

2010年9月11日

発 行

特定非営利活動法人あいえるの会

〒963-8013 福島県郡山市神明町9-1

TEL.024-921-3567

写真提供

白石清春・橋本広芳・藤橋秀一

題字

白石清春

編集・製作

藤橋秀一・岡部聰

印刷・製本

(株)ヨシダコーポレーション